

考 の 思 の 臨 界 期

上・糸山泰造

▼まえがき

ここに書いてある私の考え方は間違っているかも知れません。ただ、私の考えは全て私が実際に指導してきた子供達から教えられたことばかりです。
ですから、机上の空論ではありません。少しでも健全な子育てと教育の参考になれば嬉しく思います。
子供達のために、誰もが自在に操ることが出来る「視考力」の使い方を教えてあげて下さい。

▼教育者は哲学者でなければなりません

教育者は哲学者でなければなりません。なぜなら、子供達は、哲学を求めて学校にきているからです。哲学とは生き方を考える学問です。そして、生き方とは、人生の楽しみ方のことです。
つまり、人生の楽しみ方を教えるのが教育だということです。
楽しむには、感味力と思考力が必要です。簡単なことです。「ゆっくり・ジックリ・丁寧に」想像を膨らませればいいのです。教育者は、優れた哲学者でなければなりません。

▼言葉の役割

言葉はイメージ（多くは視覚イメージ）を再現するための記号です。つまり、言葉はイメージ（多くは視覚イメージ）を再現するためのトリガー（引き金）にすぎないということです。私達は、言葉でなくイメージで考えているからです。このことを知らなければ教育は失敗します。

▼動物は全てイメージ思考をしている

動物は全てイメージ思考をしています。ですから、言葉が無くても考えることができます。視覚イメージ（絵図：イラスト）なのです。身体への命令も思考も視覚イメージで行っ

ています。ですから同じ場所（小脳）で処理できるのです。
脳科学の分野でも、やっと最近になって運動だけでなく思考も小脳が大きく関係していることが分かってきました。やっとです。「大脳の活性化」が「思考の発達」には無関係であることも、前著「絶対学力」に「新・絶対学力」で言及していますが、少しずつ科学的な証明も追いかけてきているようです。
この本では、みなさんをもっと先まで案内します。

誰もが自分ではありません。
誰もが自分ではありません。誰かが自分で検証できることはあります。これから読むことを5分だけでも実践されれば教育に関するあなたの疑問は、一瞬で氷解するでしょう。
子供の一生を左右することに5分を惜しむ人はいないと思います。
もし、いるとすれば、それは特別な理由があるからです。営利が絡んだ特別な理由があるときには、今までの思い込みや迷信を利用すると便利だからです。
子供の教育ではなく教育費に関心がある人達です。

私はこの本を子供達を守るために書きました。ですから、子供に接する全ての人に読んでもらいたいと思っています。
ここにかいてあることは私が直接に接した子供達から得たことばかりです。ですが、子供達から教わったことを整理しているうち、それは、ギリシャの哲学者達（ソクラテス、プラトンなど）が言っていることと同じことだと分かりました。
人間が持っている力は、時代や年代に左右される様なものではなく、人間が人間として持って生まれている誰もが持っているものだということを証明しています。

▼公開授業「リンゴとリンゴ」

「読める」とは発音できると言うこと
「分かる」とは発音からイメージしたものを考えることが出来ると言うこと
「見る」とはイメージしたものを頭の中で移動変形させることが出来ると言うこと
頭の中でイメージの移動変形は、人間が出来る最速の反応です。ですから、時間的にはゆっくり考えていても実際に処理されている内容（イメージの移動変形）は複雑で多様です。そして、これらのイメージの移動変形の中から状況にあった（設問にあった）解決方法（答え）を選択するのです。人間の思考過程は、このようになっていま

す。ところが、多くの人は言葉を知っている「分かる」と思い込んでいます。ですから、いつまでも考える力の養成ができません。
人はイメージで考えているのに、伝達手段の中心は言葉となっています。そこで、言葉そのもので伝えたいことが伝わりと勘違いしているのです。ところが、実は言葉は、イメージを導くキッカケでしかありません。
ですから、このこと（言葉のトリガー理論）に気付かない限り、「伝える力・理解する力・考える力」を養成することはできないのです。
つまり、「言葉のトリガー理論」を知らなければ「正しい教育」はできない（不可能である）ということです。このことは小学生にでも15分もあれば理解させることが出来ます。
公開授業の様子を載せておきますので参考にしてください。

「リンゴとリンゴ」

私：リンゴとリンゴって分かりますか？
生徒：……？

私：リンゴは分かりますが、リンゴは分かりませんね。どうして分からないのかな？読めるよね。発音できるよね。なのに、どうして分からないのかな。では、リンゴをリンゴの隣で口を閉じて微笑んでいるお魚さんだとします。さて、リンゴとリンゴって分かりますか？
生徒：……分かりますね。

私：……うん。

生徒：……うん。ついでさっきまで分からなかったことが、今は分かっていますね。どうしてでしょうか。

生徒：説明してもらったから。

生徒：言葉の意味が分かったから。

私：……うん、そうだね。じゃあ、みんなが言ったことはどういうことかな？

生徒：……？

私：イメージできるようになったということ。言葉からイメージを引っ張ってきて、頭の中で見ることができるようになったからです。『見える』に分かっているんだね。では、見えたものを描いておきましょう。
【リンゴとリンゴの絵】
この分かったことを描いておくということが大事なことですよ。どうしてかと

いうと、この分かったことを使って『考える』からです。今は2つだけです。から絵を描いておかなくても大丈夫でしょうが、どんな場合にでも考えられるように、必ず絵を描くようにします。描いたかな？

生徒：もうちょっと。

生徒：はい、じゃあ今度は目を閉じて。リンゴとリンゴが見えますか？

生徒：はい、聞きますよ。リンゴとリンゴって分かりますか？

私：……うん。

全員：……うん。

私：……うん。

生徒：……うん。

私：……うん。

生徒：……うん。

私：……うん。

生徒：……うん。

私：……うん。

生徒：……うん。

私：……うん。

生徒：……うん。

私：……うん。

生徒：……うん。

私：……うん。

生徒：……うん。

私：……うん。

生徒：……うん。

私：……うん。

生徒：……うん。

量の漢字練習も危険行為です。でも「老人のリハビリには効果があるのだから」という人がいます。もちろんです。子供と老人とは全く違うから「効果がある」のです。機能が始動し、基本的な能力が固定した（臨界期を超えた）後は、多少乱暴な刺激でも致命的な機能損傷はないからです。

ですから、子供と大人では、してもいいこと、してはいけないことが違ふのは当然です。特に、成長期の前では、同じ刺激でも、与える影響は全く違ふのです。それなのに「脳内のエネルギー消費量が増加（血流増加）する」だけのことを「脳が活性化すると」曖昧に表現し、「活性化が良いいこと」のように印象つけて、単純思考の強化をさせる危険教育が進行しています。危険極まりないことです。

ガムを噛んでも脳は活性化するし、不快なことを考えても脳は活性化するんです。何ともお粗末な考えです。

視力も同じように、成長（機能始動と機能確認）を終えれば（臨界期を過ぎれば）、長期に眼帯（高速計算練習）をしてても、視力（思考力）は回復します。機能回路が出来上がって固定しているからです。臨界期は、視力は6才思考は12才です。

これは、子供の一生の問題です。ですから、眼帯（高速計算練習）は厳禁なのです。

では、子供の眼科手術（中学受験）の時はどうすればいいのでしょうか。

手術の時ですとも、眼帯（高速計算練習）は原則的に手術日当日（受験前1ヶ月）だけです。眼科手術（中学受験）の時ですえ子供に眼帯（高速計算練習）はさせないというのが、眼科医（教育者）の常識です。

子供の眼帯（高速計算練習）が、非常に危険なことを知っている、それだけで子供の視力（思考力）を救うことができる場合が多いことを知っておいてください。子供達の力は計り知れませんが、機能障害だけは自力での回復が出来ないので、す。どうか、くれぐれも、子供の眼帯（高速計算練習）にはご注意下さい。

▼思考力を育てるにあたって

思考力を育てるにあたっては「子供は一人一人違う」とか「個性に合わ せて」とか「家庭の方針」とかは、あり得ません。人間の思考方法は同じであり、成長過程も同じだからです。個性を伸ばす前に、人間（自分で考えるこ

とが出来た人間）に育てなければならぬからです。有名な「みんながってみんないい（金子みすゞ）」という詩には「ヒトから人間にまで育て上げた後ならば」という但し書きが必要なのです。

▼個性とは

個性というのはその子の「できること」ではありません。個性というのは、その子が自然に無理なく楽しめること・面白く感じる能力のことです。なぜなら、全ての人間には全ての能力が与えられているからです。ですから、何かが出来るという意味では（同じ能力が備わっているという意味では）個性はないのです。従って、個性とは「楽しむ力」のことだと考えるのがよく分かります。

第1個性とは、その子が持つ生まれたテンポのことですが、第2個性である「好み」を一般的には「個性」と呼んでいる人が多いようです。ですから、子供の個性とは、親が子供に植え付けた快・不快の感情から生じた「好み」のことになります。独創性は「好み」の追求から生まれます。「好み」は快・不快経験から作られます。ですから、才能を結果させなければ、何かを「させる」のではなく「快体験」を多く持たせ「好み」の幅を広げておくことが大切

です。そして、才能は伸ばすものではなく、成熟するのをまつものであることを肝に銘じておくべきです。

子供の特性である反復行動は納得するため（納得回路を作るため）であって知的系統的学習（覚え込ませること）に使うべきものではないです。

一つのことを本心に納得するまで、ゆっくり見守ることが親の役目です。その子の個性と子供の特性を間違っはけません。個性（第2個性）は、育てることが出来ませんが、特性は育てることが出来ないからです。

また、第1個性である、独自のテンポは、先天的なものなので生涯にわたって変えることは出来ませんし、変えようとしても効果はありません。

これら2つの個性のことを知ったうえで、子育てと教育を考えると無理なく無駄なく効果的な接し方が自然に見えてきます。

▼開発という名の破壊活動

開発という名の破壊活動を御存知だと思います。リゾート開発とは自然破壊のことです。

あることが殆どです。同様に、才能開発とは個性破壊であることが殆どです。能力は開発すればいいというものではありません。幼児・児童期に目ざめさせてはいけない能力もあるのです。特に、時期がずれている（不自然に早く）に発揮される能力は害になります。書になるから、自然に発達しないようにプログラムされているのです。それなのに、眠っている子を起こして喜んでいようとする人が大勢います。幼児・児童期に目ざめた能力は一生の性格（能力）によって一生の弊害（能力）が多いので、要注意の弊害（能力）になる場合が多いです。

人間はあらゆるものを楽しむ能力を持っています。しかし、あらゆるものを楽しめることは、実は恐ろしいことです。どんなに不自然なことでも非道徳的なことでも、そこに快楽を感じることが出来るのですから、ここに子供達を教育することの重要性があります。特に幼児教育の重要性があるのです。

開発してはいけないこと、目ざめさせてはいけない能力が人間にはあるのです。これを知らずに行う教育や開発は、暗闇の中で射撃練習をするようなものです。幼児・児童期に、テレビゲームで快楽を感じるような能力を開花させる必要は、全くありません。高速計算を喜ぶ能力も、害になるだけです。スビードに憧れる必要もありませんし、慣れさせる必然性もありません。開発という甘い言葉には、要注意です。

なぜなら、開発などしなくても、視覚イメージ操作は超高速で出来るからです。そして、この能力は生まれたときから、誰もが使っている能力なのです。

▼超記憶能力開発をしてはいけない理由

まずは、次の資料をご覧ください。

■参考文献 ■ルリア著、天野清訳「偉大な記憶力の物語」（文一総合出版）

原著は1988年モスクワ大学出版局より出版ルリア（1902-1977）。ソビエト連邦時代の著名な心理学者。登場人物であるシーの本名は、エス・ヴェー・シエシエフスキー。ラトビア生まれのユダヤ人。兄弟、家族は普通の人達で、精神異常もいなかった。

ロシアの心理学者ルリアの研究室に、1980年中頃のある日、驚異的な記憶力を持った新聞記者シーが訪ねてきました。

彼は、編集長の勧めでルリアの研究室にやってきましたが、彼自身は自分の超能力に気付いていませんでした。ルリアは当時まだ80代でしたが、シーはまもなく30才になるころでした。ルリアは数の系列、語の系列などつぎつぎとテストしていきましたが、シーは系列の数を増やしても何の困難もなく正確に憶えることが出来ました。

ルリアはその後8年に渡って、シーの記憶力の異常発達、それが認識過程や人格形成にもたらした作用について、心理学の様々な手法を駆使して、観察・分析することになったのです。

シーは、語や数の系列を見続けるか、あるいは、口述された語や数を視覚像に変換することで記憶していました。

例えば、黒板にチヨークで書かれた数表を記憶するとき、彼は、数表を注意深く見つめ、目を閉じ、再び目を開き、次に目をそらしました。合図があると、その数表を順方向にも、反対方向にも、対角線の順番にでも言うことができたのです。彼は単に、与えられた視覚像を記憶し、再生のときに記憶した視覚像を読んでいたのです。反対方向でも、対角線でも流暢に「読む」とができたのはそのためでした。

シーには幼児の頃から、「共感覚」とよばれる現象がありました。音を聴くと色や形が見えたり、色や形を見ると音が聞こえたり、匂いを感じたりする現象です。ルリアが8歳の音を聴かせたところ、彼は、「暗い背景に赤い舌を持った褐色の線条が見えます。その音の味は甘酸っぱく、ボルシチに似ています。その味覚が舌全体を覆っています。」と報告しました。ルリアはこれらの共感覚が記憶の背景を作り出し、彼の記憶の正確さを保証しているのだらうと考えました。

シーはまた、自分の心拍数や体温を随意にコントロールすることが出来ました。例えば、汽車を追いかけると、心拍数を想像して心拍数を減少させたりできたのです。彼の空想の世界はあまりにも鮮明で、空想の世界の存在を経験することもしばしばあったようです。そうしたエピソードのひとつは、少年の頃、想像の中の彼は学校に出かけたのですが、そこへ父親が入ってきて、まだ自宅にいる現実の世界に引き戻されたそうです。

シーの記憶は、視覚化と共感覚によってその正確さを保証されていました。しかし、

逆に、視覚化したものの記憶は、共感覚によって引き起こされる視覚像によって邪魔されることもしばしばありました。彼はルリアに人の顔の記憶について愚痴をこぼしていたそうです。

「人の顔は、人の気持ちの状態や、どういふときに会うかによってしょっちゅう変わります。そのニューアンスはメチャメチャになります。」と。

長い物語や詩の理解も、彼にとっては苦手なものひとつでした。

つきつぎに浮かび上がってくる視覚像に邪魔されて、本質的なものを抽出し非本質的なものを捨て、話や詩の流れを追うことが困難になるためでした。

シー以外にも驚異的な記憶者の研究報告はありますが、それらの例では必ず忘却もありました。

ところが、シーの記憶は、ルリアが十数年後にテストしたときも全く完全に、忘却のない完璧な記憶でした。

しかし、それと引き換えに彼は、つきつきと生じる視覚像のために抽象的な思考は妨げられ、また、しばしば、現実と想像の世界の区別を失うという異常な世界に生きていたのです。

彼がどんな長さの言葉の組み合わせでも、また、これらが最初に彼に与えられたのが一週間、一ヶ月、いやもっと何年も前だったにせよ、再生するに何の苦労もないことが実験によって示されました。しかし、ルリアは異常な記憶力にもかかわらず、彼が特に優れた知性を持っているわけではな

いといっています。

物事を視覚イメージで記憶するという脳本来の入出力方法を利用したから容易に記憶（記録・再現）できたのです。人は死ぬときに自分の人生を走馬燈の様に回顧するといいますが、これも視覚イメージ操作を超高速に行うことが出来るからです。「走馬燈の様に」とは視覚イメージの連続再生です。小脳の二億個の脳細胞に記憶されている視覚イメージが意識することが出来る大脳に情報を流すことで起きた記憶の再現です。

誰もが全ての記憶を視覚イメージで保存しているという事です。だからといって、では視覚イメージで全てを完璧に暗記しようなどと思っただけでいけません。不自然な能力開発は異常開発に他ならないからです。そして、思考には「しない能力」も重要だからです。

私達は、考え事をしているときに、母国語が耳に入ってくると考え事をできなくなります。ところが、意味が分からない外国語や音楽などなら、聞かなくても考え事は出来ます。また、母国語でも騒音と同じように単なる音として聞いているときには、邪魔にはなりません。

それは、母国語は自動的に「音→視覚イメージ」という変換をして脳内言語であるイメージ再現をして分かる（見える）状態を作っているのだからです（イメージ操作の邪魔）が生じるからです。

このイメージの混乱が「考えられない」の正体です。言葉（意味の分かる言葉）以外のものでは、入力しても思考に影響するほどの明確な視覚イメージには変換されないで、邪魔な視覚イメージに思考が影響する。この視覚化「できない（しない）」能力も思考には重要な事です。不要だから能力があっても発達しないようにプログラムされているのです。自然な状態では人間の頭は最も思考に適したデータ処理をするようにプログラムされているのです。

もしも、この視覚化能力を開発してしまつたら完全記憶者シーのように考えられなくなるのです。

大事なのは、多量のいわゆる知識ではなく考え方（思考モデル）なのです。なぜなら大脳で意識的に作られた思考モデルは、小脳にコピーされて自動思考に使われるからです。アインシュタインの「自伝ノート（90年）」にこうあります。

「多くの場合、記号（言葉）がなくても思考は進められるもので、無意識のうちにさうもかなりの程度まで、それがやれるといふことは、自分にとっていまや疑いないことである」

まさに、小脳思考のことへの言及です。もちろんアインシュタインだけでなくギリシアの哲学者達も知っていた事実です。

▼サブリミナル効果

サブリミナル効果とは、意識されないレベルで呈示された刺激の知覚によって生体に何らかの影響があることです。

例えば、ある映像刺激が20ミリ秒以上の長さで呈示されたときには、それを知覚したことが意識できるのに対し、それ以下は意識できないとします。この場合、刺激が20ミリ秒以下で呈示されれば、それをサブリミナル刺激と呼び、それに対する知覚が

サブリミナル知覚です。サブリミナル知覚とは、サブリミナル知覚の効果のことです。なお、サブリミナル知覚とは逆に、意識されるレベルで呈示された刺激の知覚は、スプラリミナル知覚と呼ばれます。

クランスト・ウィルソンとザイオンズは68年に、被験者に二種類のランダムに作つた不規則な八角形を、一つずつ、認知できない短い時間見せた後、今度はそれらを、見せたことのない八角形と一つずつ、ペアにして二秒間見せて、どちらを見たことがあるか（認知）とどちらが好きか（親近感）を答えさせました。その結果は、認知はできていない（正解率は0%）が、前に見せたものを好ましく感ずる割合が統計的に有意（信じるに足る結果）に見られました。

これは、対象が何であるかを認知できなくても（大脳が意識できなくても）情動的判断ができることを示す有名な実験で、自覚的再認知とは無関係に、潜在記憶により（記憶された小脳からの情報で）親近感を判断できるということです。

視覚イメージのマッチングが、そうさせているのですが、反応が速すぎて意識できないだけです。

ところが、この何百回ものサブリミナル知覚に頼る無意識を利用した高速多量の反復よりも意識的に「ゆっくり・ジックリ・丁寧に」意識するスプラリミナル知覚のほうが、時間の労力も格段に少なく効率的に記憶できるのです。「知らないうちに」「反復するだけで」というのは、実は無駄な時間を無駄に使っていることなのです。つまり、600回のサブリミナル刺激よりも1回のスプラリミナル刺激のほうが効果的だということです。600回のフラッシュカードよりも1回の体験が応用が利くのです。600回の暗算よりも1回の筆算が可能性を広げるのです。

意識することは、視覚イメージの再現を容易にします。それどころか、意識するとは視覚イメージを明確化することと同じです。そして、視覚イメージは、頭にも体にも効果的なのです。

スポーツ界では、イメージトレーニングの重要性は既に確立しています。結果が目に見える形で出てくるので確認が容易だからです。実は、学習も同じなのですが、教育界ではまだまだ気がついていません。サブリミナル効果は破格に速いから、サブリミナル効果が生まれやす。入力と再現のタイムラグがもたらす現象。再現するより早く刺激が消えるだけのこと。確認再現しない入力。

い入力。

漢字は大きく書くことで覚えてしまいがち。視覚イメージは、細部を保存しないようになつていきます。思考に支障のない細部の形や色などは保存しないのです。刺激を受け再現はしますが脳内言語としては保存しません。リサイズしているからです。情報量を減らすことで、素早い動きを実現するためです。ですから、細部を思い出せるようにするには、大きな文字や絵図で入力することが肝心なのです。

▼「しつけ」をする理由と効果的な方法

「しつけ」とは「その社会でタブー視されていることに不快感や違和感を持つように育てること」で、基本的には不自然な行為です。

ですから、物心つかない時に、原始的な感覚を利用して慣らすことが大事になります。不快感や違和感は、普段しないことをしたときに生じます。小さいときであれば小さな刺激で大きな効果が得られます。ですが、幼児・児童期の刺激は、不快感を促す刺激であつても穏やかなことが望まれます。

しつけの時には、不快感を催すことをしなければなりません。ですから、しつけは子供が物心付いてからすると副作用があるのです。それは、叩くことや、命令の言葉などです。不快感を与えるかたないのです。物心ついた後では、不快感と共に言動そのものが子供に残り、パトリミナル効果を生むからです。物心付く前ならば、不快感だけで済みますので弊害は最小限で済むことになりま

▼「しつけ」の限界と2種類の「しつけ」

物心付いてからは、本来的な「しつけ」はできません。

しつけは、否応なくさせることです。不自然なことを強制することになります。ですから、納得の前の段階の快・不快の感覚を応用するのは、快・不快ではなく「約束」を納得させ「守らせる」ように仕向けます。

つまり、第1の「しつけ」は、快・不快の感覚を利用しますが、第2の「しつけ」は「約束」だということです。

物心ついた後にまでも、快・不快を応用して「しつけ」をしようにすると、強制です。から何らかの暴力を伴います。そして、それは「しつけ」の本質（快・不快の感情の

育成)よりも暴力の傷跡を大きく残します。物心付いてからは、説明し、納得させて、ルールを分らせることしかないのです。満足な親子関係がなければ難しいことです。強制を感じる段階でのしつけは、体は従っても心は従わないからです。これでは本当のしつけにはなりません。自分で一人になったときには、強制的に止められていた言動は歯止めが利かなくなるからです。

「しつけ」は「自分からするように仕向ける」と考えると、色んな方法が出てきます。

「自分からするように仕向ける」というのは、どういう場面があるでしょう。例えば、「だいたい」と言わせた時には「だいたい」と言わなくても、迎える方が「おかえりなさい」「おかえり」「早く来たね」「学校どうだった?」「今日は寒かったろう」と声を掛けます。誘い水です。返事をするまで呼びかけます。「返事をしろ」とは言いません。環境設定を十分にするといいことです。

また、大事な「しつけ」には「身体を動かすこと」とはならないように育てる。「他人に相談できるように育てる」という項目もあります。

さらに、「相手が悲しむようなことはいらない言わない」「相手を思って自分の言動に判断を加える」ということもあります。『うつつていうこと』*やんは悲しくないかな?」「悲しくなるようなことは言わないようにしよう」と言ってあげるといういいですね。

「しつけ」とは、させることではなく、自分からするように仕向ける。自分からするように仕向けることが「しつけ」です。ですから、快・不快の原理を使います。また、ワガママであることは、大事なことです。ワガママで命に関わることは、殆どありません。ワガママを叱る必要はないし、叱る利点もありません。ワガママがなければ我が道はあります。ワガママ無きところに我が道はない」と言っても過言ではないでしょう。好きなことと上手なことは、同じ意味で

はありません。もちろん、得意なことと好きなことが同じ意味でもありません。大事なことは、上手なことも得意なことでもありません。大事なのは好きなこと。その上が楽しいこと。その上は面白いこと。体を動かすことを厭わないように育てましょう。それには、自分が動いているところを見せてあげることが第一です。

「させる」ことが第一ではありません。そして、お手伝い期を利用して、面倒なことも楽しく丁寧なことを手伝ってもらうのです。

▼「しつけ」的言葉の違い
「しつけ」的言葉の違いを知っていますか?言葉の感覚(語感)を育てることです。

日常的に、子供が確かめられる言葉を使わないとだたの役に立たない知識となります。「しつけ」的の心遣いをしていますか?心の感覚(心感)を育てることです。他の人がどう感じているのかを、感じる感覚が大事だからです。

「急にさせない・やめさせない」ということも大事な注意点です。例えば、テレビはエンディング・予告までキチンと見る。「あと5分で終わりにしましょうね」「おやつを食べてから宿題しようかな」と予告する。この予告が大事なことです。1クッションが大事ということです。心の準備がよい結果を招くからです。自分を納得させる時間を与え、自分の意志でやることになるからです。「自分で」が自分を作り、確かな感情を育て、自信を作り上げます。回りの状況が分かるように育てることも重要です。回りの状況が分からないと、能力があっても対応できないからです。

▼「しつけ」に関するメモ
見本として親が日常的にすること
体を動かすことを厭わない。
チョットしたことでも手を抜かない。
複雑なことでも丁寧に根気よくする。
記録することを見直さない。
覚えていけば見直す必要はないが、記録を取ることを自然にする。
一連の納得して決めた動作を毎日できるようにする。

例: 帰って来たらテーブルの上のメモを見て、おやつを食べる。簡単なお手伝いをキチンとこなす。
※忘れても叱りません。確認だけで結構です。そして、「じゃあ、今度お願いし

ます」で十分です。

▼注意すべき幼児・児童期に与える刺激
幼児・児童期の刺激は、不快感を促すことが目的である刺激であって、穏やかなことが望まれます。

大人より何十倍も敏感な時期に、大人と同じ刺激や、大人よりも大きな刺激を与える、その刺激は、種類の如何に関わらず、ストレスを与えるだけの劇薬となります。そんな刺激を与え続けられていくと、子供は最終的には無反応状態となります。表情が乏しい面のような顔になります。反発してくれば早期発見が可能です。反発でなく従順に見える場合には特に注意してください。

▼「しつけ」+α
「しつけ」と同時に、子供には、一生に渡って、応用の利く智慧を授けてください。簡単なことですが、出来ていない場合が多いので、少しだけ自省してみてください。

1 他人に相談できるように育てる。
2 子育てと教育で、自分の子供には命令形は使わない。
3 他人からの叱りには真摯に受け止める。しかし、家訓と異なる場合には家訓を優先する。

※命令形は相手の存在・意志を全否定する働きがあるから要注意です。保護者からの命令形は命を守るための行動の支持に限られます。「君は自分の意志に関係なくする」というのが命令形の働きです。最も信頼する親に否定されては、子供の伸びやかな成長はありません。

自分の子供には、使ってはいけない命令形でも、他人の子供には、時と場合によっては、よい忠告となります。人間関係を考えることが分かれます。特に、子供への言動には繊細な教育的配慮が必要です。

▼声かけの言葉について
「ちよっと待ってね」は禁句です。
やりたい↓ストップ:否定表現「不安定な満の増加になるからです」。
反対に、「今、行くね」はGOODです。
やりたい↓準備していい:心は進んでいる:肯定表現希望や期待の増加)

▼大前提
子供に善悪という基準はありません。善悪とは社会的に作られた判別基準だからです。

虫を殺す↓母親が悲しい顔をする:これだけで十分です。小さいときであれば小さな刺激で大きな効果が得られます。

▼「こ分だけ机に座ろう」は要注意
見せかけだけの学習習慣ほど、時間の無駄遣いはありません。学力養成とは全く関係ない無意味な服従を競泳しているからです。大事なのは内容です。形からはいると、机の前に座っていることを勉強と思ってしまうようになってしまう。勘違い学習の始まりです。

小学校時代の学習は、スポーツや芸事のよう、体を使って型から入る学習とは根本的に異なる、脳内進化過程で動き出す機能始動のための学習であることを忘れてはいけません。何をしたかではなく、どのように(進化)したかが重要なのです。

▼しつけの3段階
1・触覚(タッチ)
2・視覚(親が「お手本」を見せ続ける)
3・言葉
※物心付いたら、絶対に叩かない(手は出さぬで口を出す)
※全てに共通していることは「穏やかに」接することです。

▼小学校での表現力養成が危ない理由
何かを伝えるのに、言葉(文)の練習をすれば上手になると思っている人がいます。フランクのアカデミーとインクラテスの学校のことを知っているのだろうか?表現を磨くのは、確かに見栄えがして格好良い。しかしそれは「入力↓消化↓オリシナル」の全てが終わってからです。そうでなければ、表現(表現力の養成)は子供の持っている才能や個性を制限し、単なる誰かの「上手な猿真似」にしかならないからです。

大人が求める陳腐な表現様式に、豊かな子供達の表現様式を合わせなければならぬ必然性は全くありません。ましてや、担任の先生の好みの表現に合わせるなどあってはならないことです。学校での評価(学力とは無関係の成績)につながらないという理由は子供には通用しません。

▼2種類の教育と優先順位
12才までの教育は、12才以後の教育とは全く違います。
12才までの教育を基本教育といい

「ヒトを人間に育て上げる教育」のことを指しています。これが本当の義務教育です。人間とは考えることができるヒトのことです。少なくとも、12才以前の教育で表現力を求めることは無意味です。

▼スピードをつけてはいけない2

再び「どうしてスピードをつけてはいけないのか」に言及します。不要なことをさせるのはストレスを溜め、吸収力を落とすからです。さらに、視覚イメージへの変換さえすれば視覚イメージ操作は、誰もが練習しなくても最速だからです。ですから、すべきことは、外部からの刺激を視覚イメージへ変換する練習なのです。描く。そして、意識する。だけの話です。

▼視考力の育て方

目で考える力・視考力を育てるためにはどうすればいいのでしょうか？ イメージ操作練習をする「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」で十分です。視考力養成とは「言葉→イメージ再現・イメージ操作」のことです。「良質の算数文章問題」は、この視考力を使わなければ、解けないように仕組んでありますので、自然に視考力を育てることが出来ます。文章問題を、式を導くだけの文章と考えているようでは「視考力」も「思考力」も育てられません。

▼「どんぐり問題」なら独創性も維持できる

「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」を使った学習ならば、子供たちの独創性も維持できます。

理由は簡単です。映像（視覚イメージ：絵図）は誰もがオリシナルだからです。この映像を明確にせずに、あるいは使わずに立式すると、そこには何のオリシナルもないただの「問題を解くだけ」の練習になってしまします。これは教育ではなく調教です。個性を守る・育てるとは、常にオリシナルを意識することです。

「どんぐり方式」には、常に毎回オリシナルがあります。同じ子が同じ問題を解いても違う絵になりますから、復習でさえも、オリシナルは、幅を増す結果となります。言葉も同じです。視覚イメージを意識した言葉は、言葉が同じでも再現される視覚イメージは同じではありません。ですから、イメージの再現は同じ言葉からのものであっても全てオリシナルになるのです。

「意識的に」というところが大事なのです。そして、そのオリシナルのイメージを確かなものにしていければ、語彙量が増加するにつれて言葉での表現も豊かになります。逆はあり得ません。

語彙量を増加させることからいえると、それは言葉のサルマネになってしまします。知識が増えたように見えますが、そこには才能を潰してしまう効果しかないのです。理解力・判断力・表現力・創造力・伝達力などの全ての基本は、イメージ操作にあります。もちろんイメージというのは、視覚イメージ（映像：絵図）だけではありません。音のイメージ（声・チャイム・ルパン三世の声からのイメージ・風鈴の音）、匂いのイメージ、皮膚感覚のイメージ、味のイメージなどですが、考えるということに關しては視覚イメージが、突出しています。式と答えに、オリシナリティーはありませんが、絵図は全てがオリシナルです。

たとえ、問題が同じでも、その問題を頭のなかで絵図にしたときに、一瞬で全てがオリシナルになるのです。オリシナリティーを大事にするとは、イメージをつけるということです。全ての学習教科で、イメージ力を媒介にして学習を進めることで、学習そのものも格段に吸収しやすくなりますが、それ以上に思考のベースとなるイメージ操作の力を得ることが出来るようになるので、この視覚イメージの操作を意識することが重要なのです。

ですから、解けても解けなくても、絵図を描く。これが大切。絵図を描くことそのものが、オリシナル（個性）を維持することなのです。描くことが、学習の中心でありオリシナルを守るのです。これが思考力養成の第一歩です。文字のイメージ化がなければ、思考力は育ち得ないからです。

▼算数で国語力を伸ばせる理由

「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」が国語力（読解力）も養成できる理由は、シーン展開を含んでいるからです。算数と国語の違いは1シーンの細部描写（再現）か、多数シーンの曖昧描写（再現）かの違いです。算数も国語も本質的には、全視覚イメージ再現という点においては、全く同じなのです。違いは細部描写には、根気と緻密さが必要ですし、複数シーンの流れをつかむには、大まかな理解（再現）で数多くのシーンを理

解（再現）をする、あるいは完全に理解しなくても次に行く大雑把さ（拘りすぎないこと）が必要になるということなのです。ここで大事なことは、精細（緻密なこと）から大雑把になることは、比較的簡単にですが、逆に難しいということです。

整理整頓出来る人が、乱雑にするのは簡単ですが、日頃から乱雑にしている人が整理整頓するのは難しいということです。「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」は算数の文章問題でなり、緻密さを要求されます。しかもかなり高度な緻密さを求めます。さらに、ストーリー性を加えてありますから解きながらの遊びがあります。実は、この遊びが、国語の複数シーンの把握につながるのです。算数の文章問題が、楽しくなければいけないのは「飽きないように」ではなく、国語力もつけるために必要だからなのです。

ですから、「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」は、これだけで国語力も算数力も付くのです。

プラトンが創立した哲学学校の門に「幾何学を解さざる者入るべからず」と刻んだのは「哲学には精緻な思考が必要である」ということです。計算とは全く関係ないので、また、曖昧な流れの方が日常的であるが故に訓練が必要なのは、緻密な描写の方なのです。映画を楽しめない人はいまいせんが絵図を楽しめない人は多いのもこのことが原因です。楽しい「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」という中間形（プラットホーム）を知っていると、修飾の少ない数学にも修飾の多い文学にも、どちらにも簡単に移行することが出来るようになります。さらに、独創的な考えもヒラメキでさえも養成することが出来ます。なぜなら、これらは全て視覚イメージの操作から生まれるものだからです。

▼「良質の算数文章問題」の存在理由

「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」を全ての子供たちに早い時期（といっても年長さん）から、やってほしい理由があります。「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」は人間になるために必要な「考える力」の養成問題だからです。「難しい問題などありません。」「考える方法」を知らないのと、難しいと思うのです。難しいと感じる場合は「考える方法」を習っていないという証拠になります。

中には「それでもいい」「こんな難しい問題は解けてもいい」と言う人がいます。「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」に難しい問題はありませし、中学受験用に作った問題も1題もありません。誰もが解けなければならぬ問題だけなのです。

鳥が、飛び方を教わらないで走り方を教えてもらっても、永久に大空を羽ばたくことはできません。ヒトは、考え方を教わらないで計算や暗記を教えてもらっても、永久に人間にはなれません。人間らしい判断力を含む思考力もったヒトのことを人間と呼ぶからです。

「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」を前に「計算は速いが文章問題が弱いので、まだ」とか「読解力がないから、まだ」とか「うちの子には合っていないから」などという理由は全く通用しません。

▼幼児教育はイメージ再現教育

幼児教育は言葉の教育と言いますが、実はイメージ再現教育です。

知識があっても原形イメージがなければ、何も分りません。「原形イメージ」を育てるには、体験を味わうことが必要です。そして、味わうには穏やかな時間の流れを要します。ここでもスピードは、一番の敵になります。海を楽しむ、お話しを楽しむ、お料理を楽しむ、遊びを楽しむ、十萬語を覚えるよりも、一つのイメージを明確に再現できる方が応用力は高くなります。知識は、その知識を操作する回路が十分に発達しているときにだけ効力を発揮します。ですから、知識は回路作成（思考モデル作成）の後からでなければ邪魔になるだけなのです。知識を学力と勘違いしている教育者に育てられた生徒は実に悲惨です。貴重な子供時代の時間を、無駄な高速多量学習で浪費してしまい、気付いたときには思考力を養成できる臨界期を超えてしまっているのです。

▼習い事と教育の違い

習い事と教育を混同してはいけません。「できるからさせる」は何の理由にもなりません。子供に、飲めるからといってお酒を飲ませますか？ 勉強も同じなんです。できなくていいもの、すべきでないこと、があるのです。「できるからドンドンさせる」「才能があるからその才能を伸ばす」は、子供にとっては何の価値もありません。習い事が、勉強（思考力養成）に役立つと

思っているわけではありません。習い事は芸事です。芸事と割り切って通わせることが大事です。勉強にプラスになると思えば通わせていては親子で学力の勘違いの罠にはまってしまう。このことをキチンとしていないと「教室に行っているのに、どうしてなの？」と見当違いのことを思うことになり、的外れに子供を責めることになます。また、小学校の時期は、完成させる時期ではありませんので「体験さえすれば」「続けること」には重要な意味はありません。楽しさを残してサッと「やめていい」と言うことが最高のアドバイスになります。楽しい思いが残っていれば、自分で再開しますから、余計な心配はいりません。

▼早期教育の殺し文句

「早(速)ければ早(速)いほどいい」とはありません。同じ内容でもタイミングを間違えた教育は時間とお金と労力を無駄にする才能潰し教育です。

▼「早ければ早いほどいい」

「速ければ速いほどいい」という言葉は売人が作り出した単なる、キャッチコピー・客寄せの宣伝文句です。それどころか、実際には早期教育による弊害が全世界からレポートが出されているのに長期的な効果は何も証明されていません。

▼前倒しの限界

前倒しの限界は、12才以降に可能になるスパルタ教育を11才に持つてくることまでです。それも11才以前の11年間を使って丁寧に育て上げていけば可能、というだけで準備もしないで前倒しは悪影響を与えるだけです。

基本は、前倒ししない・スピードをつけないうち・ゆっくり原形イメージ作成に時間をかける。と思う力の養成ができます。

▼スピードという悪魔の刺激

スピード教育の恐ろしさだけは、知っておく必要があります。何も知らずに、時間とお金をかけて、自分の子供に致命的なダメージを与え続けている人が大勢います。何と悲惨な光景でしょう。本当の幼児教育の合い言葉は「ゆっくり、ジックリ、丁寧に」「急がず慌てず穏やかに」です。

▼高速計算練習をしてはいけない

12才前(特に9才以前)に高速計算練習をしてはいけません。

高速多量→ストレス蓄積→短絡的思考形成→思考力の低下→深思考の欠如→浅思考の習慣化→深思考停止命令という流れは止められませぬ。

「多量に高速に」は、子供の才能を潰して利益を生むための教育屋のキャッチフレーズです。

でも、どうして人気があるのか？見栄えが良いからです。学力は見えないと、みんな入れているんです。ところ、学力は簡単に見えぬんです。

「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」で確認できます。なぜ、私達は「言葉を知らなくても、考えることはできるし、数字を知らなくても計算ができる」のでしょうか？・・・ね。

▼危険な現象

計算が、ある時を境に急激に速くなる「ふっさける」という感覚は危険信号です。考えることを「止めた」という瞬間の感覚だからです。

考え方を学ぶべき時期に「考えること」を止めさせる訓練ほど危険な訓練はありません。でも、そんなことを喜んで訓練させている人がいます。異常教育が、健全な子供を異常に育てていきます。視察力を無視した教育は、負担とストレスを与え、未熟なままの脳を異常に肥大させます。異常に肥大したネズミの脳を見て喜ぶ早期教育愛好家を知っていますか？

アイシンシュタインの脳は、平均より10%も軽かったのを知っていますか？

▼才能を守りながら学力を育てるコツ

子供の才能を守りながら学力を育てるコツを御存知ですか？「目に見えぬように言う」ことが大切です。

▼具体例：おつかい編

「お醤油買ってきて」を目に見えぬように言う。→「*スパーの入り口を入って突き当たり」の棚の2段目あたりにある醤油の中で三角マークのついたgogoroのペットボトルのお醤油を1本買って来てくれるかな。もしでは「お願いします」と言ってお醤油をお財布からお金を払ってね。お釣りはこのお財布に入れて来てね。お釣りはこのお財布に、毎回こんなことはいませんが、複雑な事の説明などで使うと良いのです。

▼大事な大事な満足回路

満足したという感覚が納得感を導き、次のステージを目指す動機となります。「ネクストステージ理論」といいます。「ここでやるべき事はやってしまった」「次は何をしよう」という感覚が大事なんです。

親がすべきことは、子供のテンポを乱さないで時間を十分に与えることです。一緒に楽しめるのもっといいですね。満足すると自分から止めます。

中止させる場合は、突然ではなく、子供(の子)が納得するために必要な時間を考えて「あと15分したら御飯だからもう少ししたらかたづけようね」というような覚悟をする(自分で自分を納得させる)ための猶予を与えます。

▼利用してはいけない幼児の反復性

幼児の反復性を知的系統的学習に利用してはいけません。幼児・児童期の反復性は安定した感情を作るためのものです。次々に新しい物を与えられては、不安定になり一番大事な土台となる基礎工事をする時間がなくなってしまう。もちろん、個人差はありますが、年齢が低ければ低いほど反復性が高いのは当然です。ですが、それを知的系統的学習に利用してはいけません。

▼「認める」とはどういうことか

一番大事な「認める」とはどういうことかを知っておきましょう。

認めるとは「できるできない」には関係なく「見・止める」→「止まって良く見る」→「目を向けている」ことです。

子供が最も安心するのは、親が認めているときです。キチンと見ている姿を子供に見せることが大事なんです。子供は、その姿をよく見ている親の姿。そのもので、自分を認めている行為だと判断します。

「見届ける」という感じですが、求められれば意見はいつてもいいでしょうが、それはオマケです。良く見ていて下す正しい評価(子供も納得する評価)なら、どんな意見も認めていることになります。否定の言葉でも「良く見た」後であれば認めていることになるからです。否定も含めた子供全体の肯定です。

▼刺激は攻撃(破壊力)にもなる

些細な勘違いが見当違いの結果を招きます。「タッチとパンチの法則」を御存知でしょ。

うか？

成長期には、大人にとっては普通の刺激でも幼児には過剰な刺激となる高速単純計算(スピード)も過度の刺激です。過激な映像も過度の刺激です。不自然な時間の流れも過度の刺激です。

▼9才前後までの幼児脳を鍛えてはいけません

乳歯は永久歯を導くためにあります。乳歯を鍛えて一生使えると思っていると、永久歯を導くためにあります。このことを忘れて、乳歯を鍛えて一生使えると思っていると、永久歯を導くためにあります。

▼絵本の読み聞かせ

絵本の読み聞かせは「楽しむため」にだけ読んであげて下さい。ストーリーや登場人物を確認させることのメモリーは計り知れませんが、そんなことのために「読み聞かせ」をしているのではありません。毎日絵本を1冊読む。子供が好き。毎日同じでもいい。読み方は上手くなくてもいい。抑揚は重要ではありません。大事なことは子供が無理なくイメージ再現できることです。

毎日がいい。途中で終わってもいい。一人2冊まで。もっと読みたいときには自分で読む。多い方がいいのではなく、日常的に「言葉イメージ」そして、味わる体験をしていることが大事。知識を与えるために読んでいるのはありません。親子で時間と空間を共有し楽しむために読むのです。

▼やる気の誕生

やる気は「満足」「納得」「楽しみ」の循環過程で生まれます。「できた」という達成感ではなく、「分かった」という満足感が大事です。12才までは、体育でさえも「出来る」「ことよりも「分かる」ことが大事なのです。

「わかった」ということをわからせるための具体的方法は、頭の中のイメージ確認です。「ああ、あの感じね」と、頭の中でイメージ再現できることが分かった(見えた)ということです。「イメージ再現してごらん」といえばいいんです。

逆立ちを「できる」ではなく、「分かる」ようにするには、補助を利用して体を「お手本」通るに、その時の感覚(イメージ)を意識する。で、オワリ。

▼「できる」は「すごい」ことじゃないよ
「できる」ってのは全然「すごい」ことでは
ありません。デキルの条件は、時期が来
て揃えば「分かっていれば」必ず出来るか
らです。
条件が揃えば、必ず出来ることを、条件が揃
っていない段階で（今すぐに）無理して出
来るようにさせる利点はありませぬ。
「から10億まで足せるから」といって実
際に足し算をさせますか？
実際に馬鹿げていますね。
練習すれば百問を1分で計算できる。だか
ら、特訓する？論外です。自信を持たせら
れる？困った勘違いです。

▼学力の素は情緒の安定
本当の学力を育てたいのであれば、幼児・
児童期に感情が不安定になることは、させ
ないで下さい。特に「高速」「多量」は厳
禁です。知識量ではなく、安定した感情が
応用のための情報保管庫の通り道を広げる
のです。道が狭くては何も通過できません。

▼応用力と判断力が育たない理由
応用力・判断力に乏しい子供が育つ原因は
視察力と自信力の欠如です。
視察力なくして、思考力はありませんし、
安定した感情無くして、判断力はありません。
結論を実行することを判断力とは言い
ません。また、視察力をつけることで、
応用力と思考力が育ちます。

▼「考える」とは「イメージ操作（イメージ
の移動・変形・連想・比較）すること」そ
のもののだからです。

▼「自主的な遊び」の重要性
「自主的な遊び」は、感情「これでいい」
と判断「する」と、結果「あれ、違うぞ」
「思った通り」との繰り返しです。
自分で予測したことをやって、その結果を
自分の考えに反映させます。その繰り返し
です。

▼判断力とは「不安や違和感がない状態で結
論を実行に移す確信の感情」です。「自主
的な遊び」は判断を実行に移す練習となり
ます。
ですから、遊びの中に、子供自身が自分で
予測したことを実践できるように工夫する
仕組みが入っているものがないのです。
自然の中での遊びには当然あるものでは
テレビゲームにはありません。

▼子育てと教育とは
子育てと教育とは「ヒトを人間に育て上げ
る」ことです。そして「ヒトを人間に育て
上げる」ためには時期と方法を知っておく
必要があります。
ヒトは、人間らしい判断力を含めた思考力
を育ててもらわなければ、人間にはなれま
せん。人間とは考えるヒトだからです。
人間になる能力は、誰もがヒトとして生ま
れている限り持つてはいますが、その能力
を使って永久脳を持った（思考力のある）
人間になるには、人間になるために進化し
た過程で手に入れた視察力（視覚イメージ
操作）と、人間らしい判断力を育てなければ
ならないのです。
そして、0.12才までに、この思考力養成
をしないと、教育のチャンスは急激に減少
します。

▼健全な「成長」
現実社会（身の回り）で使われている記号
・材料を脳内言語である視覚イメージに変
換する練習を中心に据えて、学習する状況
に合わせ、視覚イメージを考えることに使
ったり表現に使ったりしましょう。
イメージは、外にはありません。イメージ
は、頭のの中にだけあるのです。ですから、
常に外の事象と中のイメージとを往復（変
換）させることが大事なのです。
脳内言語は、視覚イメージです。ですから
理解も思考も伝えたいことも視覚イメージ
をハッキリさせれば分かりやすくなります。

▼基本とは
単純なことが基本ではありませんし、複雑
なことが応用ではありません。基本とは、
何にでも応用が利く根本的な考え方のこと
です。
視察力を身に付ける。これが基本です。
全科目を使って、この視察力を育てれば、
全科目が得意科目になります。できなくて
も好きになります。これが大事なことです。

▼算数も国語も同じ力を使っている
算数ができる国語ができるというものは、
学習方法が間違っているという事です。
どちらにもイメージ再現できればできるん
です。無理なく「デキル子」は、国語も算数
も同じ力を使っています。意識的に言葉
を視覚イメージ化（脳内言語にする）する
練習はとても大事な学習です。
小学校時代には反射脳を育てないよう
にしよう。「応用が利かない反射脳」「考
えることができない反射脳」「人間らしい判

断をしない、短絡的思考しかできない反射
脳」こんな危険な脳を育てる利点は全く
ありません。
小5までは有害な瞬発力（単純暗算力）を
つけないでいいです。瞬発力という、聞
くには良いのですが「考えないで反射的
に反応すること」であって「考えない頭」を
作る最も有害な学習です。

▼教えられても分からせることはできない
早期教育の場では「子どもには何でも教え
られる」と言われています。ですが、実は
続きがあつて「子どもには何でも教えられ
る、しかし分からせることができない」と言
っていない」というのが全容です。
当たり前のことで、小学生にでも特殊相対
性理論を教えることはできませんが、分か
らせることはできないのです。
また、分かったとしても、そのことが、い
い影響を与えるとは思えません。
1才の子が、時計を読めたら天才と呼ばれ
るでしょう。しかしながら、その子が10才
になったとき、回りの子どもみんな時計を
めるようになっていきます。その時「僕は1
才の時に時計が読めたんだぞ」と言っ
たくなるのだらう。笑いたんになるのが関
の山でしょう。どうしてこんなにも明白なこ
とが見えないのでしょうか。
速さにしてもそうです。「速いに越したこ
とはない」と思っている人がいますが、本
当に速さが必要場面があるのでしょうか、
入試でさながら8割以上が文章問題です。こ
ろ分を解くのに、どんなに高速でも役に立
たないでしょう。正確であれば、5倍の時間
がかかっても大差はありません。
ここに「ミスエデュケーションティヴィ
ッド・エルキンダ著」という本がありま
す。筆者は児童心理学者・米マサチューセ
ツツ州タフツ大学教授・全米幼児教育会
会長です。彼の考えは「どんぐり倶楽部」の
考えとよく似ています。資料とともに抜粋
を載せておきます。

▼「体験的学習」というポイントを見失って子
どもに何かを教え込もうとするのは、誤っ
た教育です。例えば、フラッシュカードは
不要な冷たいコミュニケーションを強いる
ことになるので、将来の学習にとって不
利なもので、愛着と信頼感を損なう結果と
なり、子どもにとっては百害あつて一利な
しと言わざるを得ません。また、象徴的に
派生の学習の準備ができていない子どもに
系統的早期教育を押しつけることの
弊害は、すでに多くの証拠によって裏付け

られています。例えば、早期教育を受けた
子どもと受けなかった子どもとを15才まで
追跡調査した研究によると、受けた子ども
の方が10代になつてから非行に走る割合が
明らかに高かつたのです。別の研究では早
期教育を受けた子どもの方が小学校に上が
つてから、より攻撃的な態度を示すことが
明らかになりました。さらに、80年代の
初め、米マサチューセツ州では2、4才
の子どものおよそ3割が学校に通って読み
書きを習わせられていました。また、同じ
時代のイギリスでもロバート・オーエンが
早期教育を推進しようとして失敗しました。
ところが、結局どちらの試みも失敗に終わ
り、幼児に読み書きを教えることはなくな
つたのです。

▼つまり、幼児・児童期には情緒の安定が最
優先であり、学習は体験的学習に限るとい
うことです。少なくとも8割の土台準備
ができてからでないと、人間の土台作りにか
かる時間は決まっています。ならば、建物
のことは後回しにして、素晴らしい土台を
作ればいいのです。

▼早期教育・幼児教育はアメリカが最先進国
です。しかし、その最先端の情報、日本
ではあまり知られていません。なぜならば、
早期教育・幼児教育に携わる殆どの人々の
職を奪うことになりかねないからです。
つまり、早期の知的系統的教育は、その子
の能力を開発するのではなく、制限し、
才能を潰し、性格を攻撃的にする可能性が
大きいという報告が多数あるからです。

▼体験的学習
体験的学習には、説明できないほど複雑な
情報が含まれています。一方、知的系統的
学習は、単純で簡単で受動的で限定されて
います。いわゆる早期教育・幼児教育は、
この知的系統的学習が殆どです。
例えば「写真と文字を見て海を知る場合」
と「海に行つて海を知る場合」では、ど
ちらが高度な情報処理を迫られるでしょう
もちろんです。後者は知るだけではなく、感
じること、感覚的に納得すること、これが
大切なことです。これは限らない情報を受け
入れていることなのです。こればかりは、
海なら海そのものを目の当たりにしなければ
不可能なことなのです。

▼知的系統的学習である早期教育は、合理的
に作られています。言い換えれば、単純で
程度の低いものとなつていくということです。
当然のことながら、最も処理能力が高

られています。例えば、早期教育を受けた
子どもと受けなかった子どもとを15才まで
追跡調査した研究によると、受けた子ども
の方が10代になつてから非行に走る割合が
明らかに高かつたのです。別の研究では早
期教育を受けた子どもの方が小学校に上が
つてから、より攻撃的な態度を示すことが
明らかになりました。さらに、80年代の
初め、米マサチューセツ州では2、4才
の子どものおよそ3割が学校に通って読み
書きを習わせられていました。また、同じ
時代のイギリスでもロバート・オーエンが
早期教育を推進しようとして失敗しました。
ところが、結局どちらの試みも失敗に終わ
り、幼児に読み書きを教えることはなくな
つたのです。

▼つまり、幼児・児童期には情緒の安定が最
優先であり、学習は体験的学習に限るとい
うことです。少なくとも8割の土台準備
ができてからでないと、人間の土台作りにか
かる時間は決まっています。ならば、建物
のことは後回しにして、素晴らしい土台を
作ればいいのです。

▼早期教育・幼児教育はアメリカが最先進国
です。しかし、その最先端の情報、日本
ではあまり知られていません。なぜならば、
早期教育・幼児教育に携わる殆どの人々の
職を奪うことになりかねないからです。
つまり、早期の知的系統的教育は、その子
の能力を開発するのではなく、制限し、
才能を潰し、性格を攻撃的にする可能性が
大きいという報告が多数あるからです。

▼体験的学習
体験的学習には、説明できないほど複雑な
情報が含まれています。一方、知的系統的
学習は、単純で簡単で受動的で限定されて
います。いわゆる早期教育・幼児教育は、
この知的系統的学習が殆どです。
例えば「写真と文字を見て海を知る場合」
と「海に行つて海を知る場合」では、ど
ちらが高度な情報処理を迫られるでしょう
もちろんです。後者は知るだけではなく、感
じること、感覚的に納得すること、これが
大切なことです。これは限らない情報を受け
入れていることなのです。こればかりは、
海なら海そのものを目の当たりにしなければ
不可能なことなのです。

▼知的系統的学習である早期教育は、合理的
に作られています。言い換えれば、単純で
程度の低いものとなつていくということです。
当然のことながら、最も処理能力が高

く、高度な感受性を有する幼児・児童期にこんな教育をしていたのでは、開発どころか、様々な能力を未発達に終わらせていることになりそうです。

豊かなインプットなしに優れたアウトプットはあり得ません。リンゴの皮だけを集めてもアップルパイは作れないのです。優れた種があっても、豊かな土壌がなければ作物は育たないのです。

幼児・児童期の体験は知識を越えています。ですから、小手先の知的教育では、全く相手にならないのです。知っているようでは、何の教育もできません。ましてや、才能開発などは不可能です。

遊びという体験学習

人間は、人間になるために遊びを経験する必要があります。全世界の人間に共通な遊びとしては「ごっこ遊び」などがあります。そして、十分な体験学習の後で高度な学習が可能になるのです。この体験学習なくして高度な学習は成り立ちません。

正しい時期に正しい教育を受けましょう

どんなに低学年で学業優秀でも、高学年で学業不振に陥ったのでは、全く意味がありません。この歪みを取り除き、子供の自然な成長に合わせた手作りの学習方法を考えましょう。

スキヤモンの発育曲線(1980年)は、現在も幼児教育の有用性を訴える基礎データとして利用されていますが、殆どの幼児教育理論は神経型神経細胞の発達度合い(のデータを一方的に教材販売や教室運営に結びつけるための貧弱な理論となっっています。この「スキヤモンの発育曲線(神経型)」から分かることは「神経細胞は6才までに98%という急成長をし、9才までに99%に達する」ということで、「だから、幼児・児童期に知的情報刺激を詰め込む方がいい」という結論には繋がります。

また、第一言語修得に関する臨界期(大脳の側化：大脳左半球と右半球の機能分離)や言語習得装置のデータを利用して、幼児英語の必要性を説く場合も、第一言語が日本語である日本人には的外れな理論が殆どです。

Skellernの理論を引き合いに出すまでもなく、人は生まれながらに言語を習得できるようにになっています。逆に言えば、言語を修得出来るのが人間の証なのです。でも「だから、幼児英語」とは繋がらない

のです。

人間(人類)の発達は、日本の教育に合わせ作られているわけではありません。というところは、発達曲線を見る時には「この年令でこの発達するのだからこれをやらせよう(幼児教育を支える理論)」ではなく、「何のためにこの年令でこのような発達が見られるのか」と考えるべきです。そして、この発達が人間に固有のものであること。さらに、人間が人間である最大の理由は言葉第一言語：母国語を操ることが出来る点にあることを考えると、次のような推論が成り立ちます。

神経細胞が、幼児・児童期に急速に発達するのは、複雑な言葉を十分に修得するためである。なぜなら、言葉は具象の世界から抽象の世界への掛け橋となるからです。つまり、思考の源となるからです。

ですから、この時期に、全身が言葉の修得に全力を向けるための行動をとるのです。一般型(肉体系細胞)が生命維持のための細胞を作り上げた後に、一時期緩やかな発達(停滞)を遂げるに移行するのも全エネルギーを思考の発達に振り向けるためだと考えられる理由が分かります。具象から抽象への飛躍には、それだけエネルギーが必要であり、重要だということです。

もちろん、言葉→視覚イメージ。そして、イメージ再現→イメージ操作のためのエネルギーです。

こう考えると、天才とも思える乳幼児の言動が全て理解できます。

神経細胞の発達は、決して、幼児教育を可能にするためのものではないのです。つまり、いわゆる知識偏重型の幼児教育は的外れということ。知識としての言葉ではなく、実体験を伴った豊かな言葉の修得には時間がかかります。ですが、このような言葉の修得は、豊かな畑を作るために丁寧に耕された土地と同じで、豊かな実りを約束するものです。手を抜かず、慌てずに耕してもらいたいものです。

豊かな言葉は、複雑な事柄を簡潔に吸収する力を生みます。「要点が分かる」「いいたいことが分かる」ということです。

また、言葉の裏にあることも理解します。「1を聞いて2を知る」ということです。全ては言葉をイメージへと切り換える練習のためものです。この能力はやがては、空間知性と呼ばれる3次元を操る力に発展します。

視覚イメージは、平面図であり、平面図は操作次第で立体を感じることができるからです。

豊かな言葉とは、豊かな視覚イメージと殆ど同じなのです。

子供は学習したがっている？

「子どもは学習したがっている」と言われて「うへ、知的系統的学習を」と思ってしまう人がいますが、子どもが求めているのは心地よい体験的学習なのです。このことを知らずに「学習→勉強→知識の集積・処理能力向上」などと思うのは大きな間違いです。子どもが求めているのは、機械的な反復刺激ではなく、豊かで暖かい体験的な意味のある刺激なのです。

人生は楽しむためにある

人生が楽しむためにあることを教えましょう。

親は人生を楽しんでいる姿を子供達に見せる義務があります。そして、楽しむためには思考力が必要になります。思考できるようになったから、人間は人生を楽しむのです。

人生を楽しむから人間なんです。ですから、学力は思考力であり、学力は生きた力となるんです。本当の学力とはそういうものです。

変身する脳：乳脳と永久脳の仕組み

思考モデルの保存庫(小脳)を使えるかどうかで大脳の優秀さは決まります。

大脳の本来の役割は、司令塔です。司令塔は処理自体も優れていますが、より効率的に働くためには、小脳のコピー能力を利用して自動思考(小脳思考)を活用することができるようにならなければ、本当の思考力(深思考)は発揮できません。

脳内言語は視覚イメージです

体を動かす時の命令も、思考するときの命令も、全ての命令(脳内言語)は同じものです。視覚イメージです。

体はイメージを追って動くようにプログラムされています。脳は視覚イメージを信じるように出来ています。生命維持のためであり、危険回避のためです。言葉ではなく視覚イメージを使うことで超高速に反応できる(操作できる)のにエネルギー消費は最小なのです。最も効率の良い仕組みをとっているのが脳内言語なのです。

小脳は一般に「運動をつかさどる脳」として知られていますが、最近の研究では、言語やイメージなどの高度な思考モデルも写し取ることが分かっています。つまり、

小脳は、大脳が考えた形を思考モデルとして写し取り、自動処理することができるといことです。

今では、数十年前の大脳の活性化だけを対象にして、脳がフル回転しているなどという考えが、とてもない勘違いであることが分かってきているのです。

データの解析が正しく行われていれば、大脳の活性化が頭を効率的に使っている状態ではないことは簡単に分かるのですが、そこに、営利主義が入り込み、教育と営利主義が脳科学のデータを間違った理論に結びつけたのです。

生物の進化は、どうやら生き延びられるかの工夫の連続の結果です。魚類から爬虫類への進化は、体の巨大化、体表の角鱗化、角、牙、爪を発生させるなど、中枢神経系以外で行われてきました。それに対し、哺乳類の進化は、中枢神経系で行われてきました。

工夫できるようになった。つまり、イメージ操作できる脳を持つようになったということです。肉体的に弱い哺乳類が生きたための進化です。イメージ操作の司令塔が必要になったのです。その最終進化形が霊長類です。

霊長類は、樹上生活に適応した結果、平爪で、発達した大歯さえも持ちません。武器を装備していない状態と言っても良いでしょう。そのため、遠位性知覚、特に視覚系が発達し、この情報からの確かな判断を下し、敏捷に行動する必要が生まれました。両眼視による距離感、四肢の運動能力の巧みさが必要になったのです。

さらに、運動には動態予測(イメージ操作によるシミュレーション)が重要になりました。これらは全て視覚イメージ操作を発達させることになりました。そして、当然の事ながら思考ができるようになったのです。

視覚イメージの操作そのものが思考だからです。

大脳の役割分担(機能分担)は、外界からの様々な刺激をイメージという統一された信号に変換するための専門技を効率的に行うための発達です。ですから、同時に多くの種類の刺激を与えると、大脳だけが全能活性化状態にならず、しかし、それは考えているのではなく、イメージ変換処理をしているだけのこと、操作はしているだけのことです。つまり、単なる処理をしているだけという事です。ここでも、注意しないと大量高速の餌が待ち受けています。

【参考】小脳の内部モデル

人間の脳細胞は約100億個あると言われていますが、それは大脳の神経細胞のことで、小脳の神経細胞は100億個もあるのです。この小脳の100億個をいかに使えるかがキーポイントになるのです。

小脳の役割がよく知られている役割としては、平衡感覚中枢としての役割でしょう。そればかりでなく、運動全般に関係しており、知覚と運動の間を取り持っているのが小脳の自動処理機能です。バランスをとるための精密な制御などを言葉で説明することなどは到底出来ることはありません。

小脳が覚えた一連の動作は、ひとかたまりのモデルとして保存されます。これが「小脳の内部モデル」です。小脳の内部モデルは、試行錯誤によってだけでなく、動作の反復によっても形成されます。どちらも連続した視覚イメージの流れをセットでコピーしたものです。

小脳の内部モデル作成は、速く行なう必要はなく、モデルが形成されるまでは、大脳で考えながらゆっくり正確な動作を繰り返すことで、正しいフォームをモデルとして作り上げることが出来ます。

大脳はモデルを作るための構造（様々な操作をすること）には適していますが、高速処理には不向きなものです。高速自動処理の役割は、小脳が受け持っているからです。

▼意識することの重要性

同じ事をする場合でも、意識して行う場合と無意識に行う場合では、全く違う効果を生むことは、スポーツ界では常識になっていますが教育界ではまだまだです。

この「意識して」の重要性を教育現場（小学校）が理解したときに、全国の子供達の学力は一気に跳ね上がります。そして、高速多量な小学校から消え去るでしょう。

ここでは、誰もが実感できるように、スポーツの例を見てみましょう。

野球やテニスやゴルフなどの「素振り」を思いだして下さい。「素振り」とは最適なフォームを体に覚えさせることが目的であり、最適なフォームをハッキリとイメージして、ゆっくり反復するのが正しい「素振り」です。回数を多く振れば良い、というものはありません。重要なことは、イメージを大事にしなごら意識して練習することなのです。なぜなら「意識する」という行為そのものが、小脳のモデルコピーを素早く行う行為だからです。

無意識の100回よりも、意識した1回の方

が効果的なのです。そして、このことは、動きだけでなく思考にも通じるのです。なぜならば、動きも思考も、同じ視覚イメージを利用してゐるからです。体は視覚イメージの真似をします。

思考とは、視覚イメージ操作のことです。理解するとは、言葉を視覚イメージで再現することです。

伝達するとは、自分が伝えた視覚イメージを相手にイメージ再現させることです。

▼人間の条件

人間の条件とは、人間らしい判断を下すことが出来る能力を含めた思考力をもっていることです。この力は、12才までの感情教育が大きく影響します。理論的な結論には訓練すれば誰でも素早く到達できます。

ですが、その理論的な結論を感情に移しているかどうかの最終判断は、感情が支配しているからです。人間の最も高度な判断は常に「結論を保留する」という選択肢を持っていることにあります。正しい感情がなければ、この最終判断が常に理論的な結論と同一視されます。これは非常に危険なことです。そして、これらの矯正は、小学校の高学年までに行わないと、手遅れになってしまふことです。

「正しければ何をやってもいい」「ルールだから何をやってもいい」という基準の中には、自分が何もありません。そこには確かな感情がないからです。確かな感情を育てて貰っていない子は、感情以外の基準で動くこととします。その時に、貧弱な理論を持ち出されると、感情がない場合には従うほか無くなってしまう。感情教育が最終的な判断力を制御する理由がここにありまふ。

▼ノーベル賞受賞者の声

ノーベル賞を受賞した人は必ず「子供の時の体験が大事」と言いますが、理由があるんです。

原形イメージがなければ、考えることができない人がいます。健康的だからいいと考えているのです。ですから、大事なのです。能動的な遊びは無数の思考モデルを作ります。

▼人も視考力を使う

鳥は飛翔力を使うことで鳥本来の飛行が出来ますが、同じように、人は視考力を使うことで人本来の思考が出来ます。

考えるのは苦手という人がいますが、その

人達の88%は「考え方」を教えてもらっていない人達です。

抽象思考とは、小脳に保存されている視覚イメージを利用してイメージ操作をすることです。

高度な抽象思考は、小脳に蓄えられた思考モデルも使います。

▼理解力と思考力

夢を見ることのできるのであれば、理解力はありませんが、思考力は別物です。

夢を見るということは、イメージ再現が出来るということでは、イメージ再現が出来るということです。

イメージ再現できれば、理解することは出来ます。ところが、思考はイメージ操作です。言葉→イメージ再現→イメージ操作※これを練習することが思考力養成です。

▼乳脳と永久脳

どんなに乳脳を鍛えても、使い方が違う永久脳にはなりません。

変身時期は、生物学的に決まっているのです。自然の法則を無視した学習の前倒しは全く効果はありません。

異常な成長をさせたいのであれば、話は別ですが、そんな人はいないでしょう。小学校時代の学習は、思考モデルを小脳に写し取らせるシミュレーション学習が大事なのです。

ですから、「ゆっくり・ジックリ・丁寧に」行う必要があるのです。

12才までは「できる」ではなく「分かる」：モデルの作成」が大事なものは全科目共通です。

・読解力とは文章をイメージ化する事ができる力のことです。

・文章力とは読解力の反対でイメージを説明するのに文字を使うことです。

▼宿題

よく工夫された宿題は、学力を保証する最も優れた教材になりますが、工夫の足りない宿題は致命傷を与えます。

「お粗末3点セット」は、工夫のない宿題の代表例です。

・「お粗末3点セット」とは、「教科書の音読」・「トットツでも読めればしない」「漢字ドリル」・「2文字以上は書かない・ゆくり大きな字を書く」「計算ドリル」一日5題以上はしないの3点セットのことです。

・「暗唱」は音楽鑑賞や料理を味わうことに近く、「分かる」「考える」ことには適していません。暗唱とは半自動的に声（音の

連続）が出るからです、視覚イメージと連動していない場合も多くあります。ましてや、イメージ操作とは無縁です。

▼ソロバン

私の好きなソロバンでさえも思考力養成には関係ありません。ソロバンは原始的な視考力を使いますが単純すぎるのです。

十種類の視覚イメージしか使っていないのですから思考力養成にはなりません。ただし、単純であるが故に高速操作には向いています。

高速計算が必要であるのならば、天才以降に利用すればいいでしょう。学力養成が終わった後でなら弊害はありません。

▼無用な中学受験をしてはいけない

中学受験は必要でなければ、絶対にしてはいけません。必要ならば効率的に楽しくやって勝ちに行きましょう。

小5の夏までは、誰もが同じ学習です。中学受験をするもしないも関係ありません。ただし、保護者は5年間ほどかけて、受験校とその受験校の問題分析をしておく必要があります。

準備さえできていれば、無駄な強制学習は不要です。長期展望を実感できない小学生に「数年後」をどんなに力説しても効果はありません。

受験の話は小5の夏にします。

中学受験対策は、どんなに速くても、小5の9月からです。小5の夏に目一杯遊んでから覚悟を決めて受験対策に入ります。

中学入試・高校入試を余裕を持って突破するには「低学年での無駄な知的系統的教育をしないこと」です。

応用の素（思考モデルの蓄積）を保存しない後半の伸びはありません。パターン学習は最後の仕上げにだけ許される頭を固定化する危険な学習です。

ですから、3ヶ月だけ受験頭にシフトしましょう。

本当の学力を受験の学力に切り換える方法は設問解釈です。ですが、危険なので期間限定にしましょう。

※設問解釈は「絶対学力」で確認しましょう。

▼学力を低下させる学習の代表例

・表現力養成：小学校以下では、高度な猿真似養成であることが殆どです。表現力とは、「伝えたいと思うことを明確にイメージ再現できる力」です。出力に関する行為は無駄な時間です。

・調べ物学習：書かせることは最小限にすべ
きです。
・書き写し：算数の文章問題の書き写しは、
全く意味がありません。
・幼児英語：日本人に英語脳はいりません。
小学生の英語学習で尤も効果的で弊害のな
い学習方法は英語を一切使わない英語学習
です。※英語学習に関しては「新・絶対学
力」を参照

▼危険な「脳の活性化」崇拜

・見当外れな脳科学と教育の関係
機能回復と性能アップの方法は、全く違
うことを知らないで、幼児・児童期の貴重
な時間を無駄な無駄な学習で潰してしま
います。「脳（大脳）」の活性化＝学力ア
ップでは全くありません。大人の高速単
純計算は、リハビリや気分転換には結構
ですが、子供の高速単純計算は絶対にい
けません。消え去る（動き方が変化する）
幼児の脳・乳脳を鍛えると永久脳が育
たなくなるからです。
計算力あつての文章題ですから、まず
は計算練習というのは全くの反対です。
計算力は1週間で付きますが、文章題は
1週間では不可能です。

▼「どんぐり方式」のすすめ

日本には整った教育の場があるのです
から、理論さえ一新されれば学力は瞬
時に伸びます。
小学校の協力があれば1年もあれば学
力再建は可能です。
分かることはどうにか、考えることは
どうにか、判断するには何が必要なの
かを具体的に知ることが考える力を育
める鍵なのです。
受験戦争時代も、ゆとり教育時代も、
子供達が受けている教育方法は何も
変わっていませんでした。その証拠に
一番大事な宿題は何も変わっていま
せん。ですから「落ちこぼれ」は増加
し続け、不登校は異常な数に上り、
短絡的思考しかできない子供大人が
溢れ、幼稚で残酷な犯行が続いてい
るのです。
今こそ、これまでとは全く違う教育
理論を採用する時です。この理論はキ
リシヤ時代に既にソクラテス・プラ
トンらによって証明されている「考
える力」を育てる実践論です。
成績表「あゆみ」は学力表ではありません。
あてにならないのは当然で、あてに
するほうが間違っています。同じ子
でも、転校す

るだけで全く違う評価になるのは、
子供の学力を表してはいないという証
拠です。転勤族の家庭では常識です。
元来「あゆみ」は、学力を評価対象に
していません。ですから、出てくる
評価数字は学力を表してないのは当
たり前なことです。出来高評価であ
る「できた」は、小学校では何の意
味もありません。「できた」は「わ
かった」ではないからです。

▼学力向上の簡単な方法

- 1：数少ない良質の宿題を出す（↓「分
かん帳」まで作る）
- 2：遊びと宿題は必ずさせる（遊びが
優先）
- 3：週間に1時間だけは保護者と一緒
に「どんぐり倶楽部」の「良質の算
数文章問題」を1冊する

これだけで学力は向上します。2・3
は簡単ですが問題は1です。「お粗
末3点セット」を「お見事3点セッ
ト」にしなければ不可能です。

※何の役にも立たない確認テスト（小
テスト）で満点を取るために使っ
ている時間は、考えない力（反
射的学習）を身に付けている時
間です。ベキことは全く反対で
す。ですから次に問題は「学力低
下や幼稚な犯罪」が起こってくる
のです。考える力を育てていれ
ば確認テストは9点でも何の問
題もないのです。
※入試に必要な入試用に半年前
から対策すればいいのです。

▼人間の機能は考えるために設定

されている脳内言語である視
覚イメージが、写真画像のよう
に鮮明ではない（考えるのは不
要な情報）を力づけられている
（メーキング）のためです。現
実と同じ視覚イメージを再現し
てしまうと、現実との混同が
生じるからです。
人間は視覚イメージを基準に
行動している。で、視覚イメ
ージそのものに差を付けな
ければならないのです。また、
情報量の少ないイメージは、最
も扱いやすく、細部や色しも
詳細な情報が必要な場合には、
目を通して（使って）、その
時々に必要な情報を獲得す
れば再現できるからです。
全ての機能は、思考を容易に
するために設定されているの
です。全てを再現する能力は
あるのには、軽い画像が加工
しやすく操作しやすいから
です。

▼本末転倒学習

文章問題の中には、必ず計算する部分
があるのを忘れていませんか？
「文章問題の前には必ず計算問題」とい
うのは全くの無駄な学習なのです。いつ
になったら文章問題を始めるのです
しょう。いつになったら考える練習を
始めるのですしょう。一番大事なこと
を、一番吸収力の高いときにしな
い。どうして先送りするのです
しょう。基礎固めに計算練習とい
うのは本末転倒学習以外の何物
でもありません。また、せっか
く文章問題を解いているのに、絵
図で考えることをしないで、文
章から式を考えている人がいま
います。これも大きな勘違いで
す。視覚イメージを意識せずに解
く文章問題は考える力を育てる材
料にはなりません。しないよりは
マシですが、非常に効率の悪い
方法です。確かに、非常に大
きな問題を解けば、中にはイメ
ージ操作をする子も偶然に出て
くるので、その子は考える力を
得ることが出来ます。しかし、こ
れは偶然です。最初から、キ
チンと考えるとはどうい
うことができるのでしょうか？
考えることは200%考え
ることが出来るれば、子供達
は200%考え教育は偶然に頼
るべきものではありません。
誰かが確実に簡単に、思考
力を身に付けることができる
方法があるのですから是非とも
活用してもらいたいものです。

▼最も効率の悪い学習方法

最も効率の悪い学習方法は、
忘れないように（忘れることを
恐れて）徹底反復すること
です。「覚え続けていること」
「いつも反射的に応えられる
状態にしておくこと」です。
これではいつまでたっても
応用の利く深い学習はでき
ません。帰国子女の英語で
さえも、3ヶ月もすると使
えなくなります。反射を利用
して覚えたものは考えるこ
とには向いていないから
です。

▼応用が利く頭

思い出すには、音ではなくて
理屈で覚えることがポイント
です。ただし、視覚イメ
ージを導くトリガーとしての
音は結構です。応用の利か
ない単純な1対1対応の再
現のみならば音で覚えるこ
とも結構ですが、思考に
使った応用力として保存す
るには、納得感や感覚を伴
わなければいけません。思
考モデルの定着には「分か
った」という感覚が必要
なのです。「分かった」とい
う感覚が、思

考回路が繋がった、思考モ
デルができた、ということなの
です。すると、小脳へのコ
ピーが許可されるのです。納
得感とはコピーが完了したこ
とを意味します。これで応
用可能状態でのモデルの保
存ができたこととなります。

▼フラットホームは平面図

数学の立体図形の問題を解く
ときに、立体を展開した展開
図を作ると理解し易いのは
脳内言語が平面図だから
です。

頭の中では立体を作り出し
たり回転させたりはできま
せん。立体を意識できるの
は、平面図を使った応用で
す。応用視覚を使っている
のです。その証拠に初めて
見た立体を頭の中で回転さ
せることはできません。頭
の中で回転させることが出
来るとは、あらゆる角度から
見た平面図を持っている
のです。つまり、私達が立
体を感じているのは錯覚であ
り、頭の中にあるのは平面
図だということです。

私達が見える（予測できる）
応用視覚を使うのは立体を
平面図にして入力した過去
のデータ（立体を様々な角
度から見たときの平面図の
視覚イメージ）を応用して
いるからなのです。

触れば分かるかと思ってい
る人もいますが、触っても
どう見えるのかは分かりま
せん。全盲の人は、健常者
が直方体を斜め上から見た
時に見られる菱形を意識
できません。実際には直方
体には、菱形は存在しな
いからです。

頭の中では平面図しか操
作できないのです。という
よりも、最も効率がいいよ
うに平面図の応用処理で立
体を意識しているのです。
私達は目の力で無いもの
（形）を瞬時に作っている
（再現している）というこ
とです。見えるというのは、
頭の中で映像を作り上げ
ているということです。

平面で立体を表せる（感じ
取らせることができる）の
は共通した図形処理能力
を持っているからです。
立体図の切り口が分かり
づらいのは頭の中で使わ
れる平面図の操作ではな
いからです。立体を平面と
して入力している頭の
中の処理方法に原因があ
るのです。

脳内言語は平面図なので
す。ですから、考えるべき
部分を平面図で書き出す
とよく分かります。数学
の問題などでも、教える
べきは立体のまま切り口
を見えるように慣れるこ
とでは

なく、どうしたら切り口を平面図で表せるかという変換方法なのです。

反射学習の恐ろしさ

反射（反射的学習：スピード教育）が恐ろしいのは「分かっていても止められない」ようになるからです。

ですから、反射は、緊急の場合や、全く害のないことだけに使えるようにすべきなのです。

論理的な結論がいつも正しい（実行に移していい）ことはないのです。

特に思考することには反射を使うことは、幼稚な思考であれば幼稚な行動に直結するということです。反射的思考を養成して「幼稚で残酷で短絡的なことをするように育てておきながら、幼稚で残酷で短絡的な犯行がある」と「原因が分からぬ」といって、分かるはずがありません。分かっていれば、そんな教育（反射的思考を育てる教育）はしていないのだから。

速くさせるということは、思考力の養成を終えていない子供にとっては「考えないで実行しろ」と強制していることになるのです。

▼原形イメージ・思考モデルを蓄える時期

原形イメージや思考モデルを蓄えるべき時期に、使う練習を徹底反復するのは、明らかに無駄なこと。大脳の活性化が大人や老人には有効でも子供には無効であるばかりが致命的なイメージを与える危険性を知っておくべきです。使う練習はコミュニケーション程度で十分なのです。

▼翻訳できるということ

言葉自体の共通点はないのに全く違う言葉を翻訳できるのはなぜか？

言葉はイメージを表す記号だからイメージが同じであれば、当然ながら必ず翻訳できるのです。

言葉は音を導く道具ですが、その音はイメージを再現するためのものなのです。脳内言語は動物であれば同じで、それはイメージなのです。

▼計算式は算数の言葉

「3×4＝12」という数学語を国語に解説すると「3単位の長さ」と4単位の長さを二辺とする長方形を作り、そのなかの単位正方形の数を数えよ」となります。海上で事故があった場合に、船や人命を救うために使われる国際信号では「O」だけ

で「人が海中に落ちた」となるし、「A」だけで「本船には医師が乗っている」、「O」だけで「ボートはあなたのもとに向かっている」となります。どれも最終的には視覚イメージを導く記号です。

▼見て見て聞いては子供が発するSOS

「認めてもらう」は「見、止めてもらう」「見てもらう」「分かってもらう」ことです。

ここでも「見える」「分かる」なものです。なぜなら、見るということによって、多量の情報を超高速処理しているからです。そして、その情報の中に安心素材があるのです。子供は見えるように接して欲しいのです。分かるように接して欲しいのです。認めて欲しいとは、良くみてほしいということです。

目から入ってくる情報を処理する能力は格段に優れているので、安心も大きいのです。見てあげることは、納得させることにもなります。満足させることにもなります。見てもらっているだけで満足するのです。見ていなくて、結果だけ見て「凄い」といってもダメなのです。

▼忘れることが大事

記憶はなくなりません。しかし、いつも顕在化してはいません。いつも大脳に常駐している（顕在化している）と邪魔になつて考えられないからです。思考妨害をするからです。

ですから、忘れる（潜在化する）のです。効率的に考えるための合理的な脳の手法（自己防衛策）なのです。ですから、忘れることが恐れてはいけません。思い出す練習が大事なのです。

また、思い出す練習は、忘れないとできません。

思い出すことと覚え続けていることとは全く異なる操作です。思い出すことは無限の応用が利きます。覚え続けていることは、無駄なエネルギーを使い、応用も利かなくなります。

人間の頭は、考えるために最も効率よく働くように進化しています。

だから、忘れることを恐れて覚え続けているのは実に馬鹿げたことなのです。楽しんでながらドンドン忘れましょう。そして、楽しんでながら思い出す練習をしましょう。思い出す練習は楽しいものです。

▼思い出すための工夫

記憶の再現は「音↓絵↓内容」というセットで出来るようにします。

まず、入力ですが、入力には視覚イメージの再現を自力で出来るように意識することで最も効率的な再現しやすい記憶となります。

この時のポイントには「内容↓絵」として入力することです。脳内言語が視覚イメージであることを考えると絵図化して入力することが内容理解の最も効果的な入力方法だと分かります。

さて、入力が終わったら、今度は再現の準備です。ここで、直接一気に内容を再現しようとするは無理があります。再現は絵図化したものの再現にします。さらに、その絵図化したものには音（言葉）のタグを付けておいて音の記憶で絵図を再現するようにつまみ、再現時には「音↓絵↓内容」という再現ルートを使うのです。こうして文書で書くのと複雑に見えますが「語呂合わせ」のことです。

音は最も記憶・再現性に優れており、誰でも苦勞なく簡単に覚えてしまつてからです。実は言葉の発達も、この特性を利用したものです。

さらに、メロディーにのせて覚えると一段と効果的です。中国語が暗記に向いているのもメロディーの様な抑揚があるからだともいわれていますが、その通りです。小さな子供が、演歌を数多く覚えることが出来るのもメロディーがあるからです。

日本人の場合は、五七調で覚えると無理がありません。

英語での例：「トド以外、主婦はスूपを口でチェック！」※8の発音

※語尾のgはs以外の単語に付くと、発音がシュ・フ・ス・ブ・ク・チの時はずっと全音となる。sの後ではss。その他は全でss。

・数学での例：「接弦の内側の角、円周角」

※接弦定理

理科出題例：「太陽の光は2回反射する：光の移し変え」※惑星の見え方

・造形鑑物の区別（音↓絵図↓内容）

・暗記するの区別（語呂合わせ）

・新幹線は刈りあげ君（黒）、うんから石器き、長いお顔↓「しんかんせんは、かりあげくん（クロ！）、うんからせつききなる。いいおかお」と歌いながら表を完成させる。

※表には必要事項全てが含まれている。

※問題は自分で描いた表を見ながら考えること。どんな問題でも解けてしまつ。

しん：深成岩

かん：花崗岩

せん：閃緑岩

はん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

かん：斑岩

1 深成岩は等粒状組織：斑晶のみ

2 火山岩は斑状組織：石基＋斑晶

3 無色鉱物は石英・長石

▼再現と操作

反応は再現なので五感でできる。しかし、思考は操作なので視覚イメージが中心となる。

・聴覚：再現しても考えられない

・嗅覚：再現しても考えられない

・味覚：再現しても考えられない

・触覚：再現しても考えられない

・視覚：再現しても考えられない

・平面図は脳内言語そのものなので直接操作できる

・再現と操作

1 脳外イメージ：再現補助情報（○）＋脳内イメージ（○）

2 脳外イメージ：再現補助情報（△）＋脳内イメージ（○）

3 脳外イメージ：再現補助情報（×）＋脳内イメージ（○）

II目を閉じている（色ナシ・輪郭のみ）

・操作

1 脳外イメージ・再現補助情報 (○) + 脳内イメージ (○)

11 誰でも発見できる

2 脳外イメージ・再現補助情報 (△) + 脳内イメージ (○)

11 ボーっとしている・ヒラメク

3 脳外イメージ・再現補助情報 (×) + 脳内イメージ (○)

11 天才思考

▼ 国語と算数を同じ能力で吸収する

国語の読解力とは、内容を視覚イメージに変換して、その視覚イメージを細部に注意することなく次々に再現して、その流れを感じる力です。

算数的読解力とは、内容を視覚イメージに変換して、その視覚イメージを細部に注意して理解する力です。

使う能力 (視覚イメージの再現と操作) は同じですが注意すべきポイントが違うのです。どちらかが弱いというのは、ポイントのシフト (意識の仕方の変更) をしていないからです。

ギアチェンジをしないで、山道と高速道路を走ろうとしているから効果が現れないのです。国語と算数という異なるエンジンがあるわけではありません。エンジンは1つなのです。

文学鑑賞は思考ではなく、反応 (再現) ですから五感が総合的に関わります。

▼ 人の痛みが分からない

「人の痛みが分からない」とは「想像力が無い」ということです。

本当の学力がないということと同じです。

視覚イメージが明確でない想像はできません。視覚イメージにともなう五感の繋がりが弱いので反応が鈍いのです。五感の総合反応である感情が出てこないのは体験不足 (原形イメージ不足) が原因です。

▼ 視考力

視考力を知らずに教育を語るのは、目を閉じて美術館を彷徨っているようなものです。

▼ 12才までの学習

12才までの学習で高速単純計算ほど危険な学習はない

▼ 絶対基礎学力

絶対基礎学力を育て上げれば、12才以降はスパルタ教育で結構です。絶対基礎学力を育てれば子育ては終わりです。

▼ 言葉の先にあるもの

言葉の先にあるものを知らなければ教育は失敗します。

▼ 子供を守る

教育において「子供を守る」とは「自分が納得できる教育方法を学校の先生にお願いし続けること」です。

また、家庭教育も準じます。工夫すれば可能です。不要なことをさせないことが大事です。自働宿題しますマシーンもその一つです。

▼ 人間に育て上げる

ヒトを人間に育て上げるには「感味力+視考力+人間らしい判断ができる思考力」が必要である論理的結論と言動は一致すべきでないときがある

▼ 視覚イメージで考えている

私たちは言葉で考えているのではなく、視覚イメージで考えている。今までの教育の失敗は、このことに気付いていなかったこと

▼ 教育とは

教育とは、知識を与えることではありません。教育とは、知識を消化吸収することが出来る力を育てることです。

学力とは文字通り「学ぶ力」のことだからです。特に小学校での表現力養成は全くの見当違いです。考える力を育てる前に修飾方法を教えるも無駄というものです。

▼ 人間は野菜ではありません

野菜ならば多少味が落ちるにしても促成栽培の利点はあるでしょう。

ですが、人間は野菜ではありません。そうはいかないのです。

考えられない頭に育ててしまつては、人間の格好をした動物でしかないからです。

▼ 「穏やかに育てる」ことの重要性

「分かる・理解できる」から「考える」までは理論的な考え方の養成 (イメージ再現と操作：視考力) で簡単に出来ません。しかしながら、行動の素 (直接原因) となる判断 (理論的結論を言動に移して良いかどうか) をする時には感情再現を使った自分か納得できる行動基準が必要なので、自

分の実体験から得た時に作られた本物の確かな感情が不可欠になります。

これらの感情は、情緒の安定がなければ正しくは定着しませんし、繊細な感情も受け入れられません。感じ取ることが出来ないからです。

「穏やかに育てる」ことが「子育てと教育には必要」である理由です。言動の素になる「判断」に重要な影響を与える安定した感情は乳幼児・児童期に作られます。子育て成功の秘訣は「穏やか子育て」なのです。

▼ 感情教育が学力の素になる

感情教育ができていて判断 (抽出) が可能なのですから、学力養成には安定した感情養成が不可欠なのです。どんなに高速で処理すること (理解すること) が出来ても結果に対する人間的な判断が狂っているは何にもなりません。そこが機械と人間を区別する部分です。そこから、まず育てるべきは、人間的な判断の素になる感情なのです。

▼ 無意味な評価を気にはいけません

学校や先生の評価を気にはいけません。なぜなら、今使われている評価基準は「できる」一だからです。ところが、12才まで (肉体は8才まで) というのは「分かっている」は必ず「できる」のですから全く気にしなくていいのです。「分かっている」かどうかの評価ならは大いに参考になります。『できる・できない』の評価では全く参考にならないからです。

▼ 素早い行動には要注意です

判断は行動を一時停止させます。考えていると行動は遅くなるのです。反対に、考えていないと行動は素早くできます。

ですから、小学校時代の素早い行動には要注意なのです。新しいルールで、じゃんけんをしてみよう。例えば「チョキ」は「グー」より強く「グー」は「パー」より強く「パー」は「チョキ」より強いというルールです。勝ち負けの判断が一瞬遅れます。

頭 (大脳：司令塔) で判断を加えているという事です。ここで通常のジャケンに戻します。すると、いつものように小脳が自動判断するので、反射で勝敗を決めることができます。

考えていないということです。反射は、考えない練習の成果だということです。

じゃんけんなら結構ですが、考える力を養成するためにやっている学習においては、最悪の学習であることは明白です。

▼ 子供の考えていること

子供の考えていることが分からない、と嘆く人がいますが、嘆く必要はありません。考えそのものよりも、どんな「考え方」をしているのかを知ることが大事であり、それは簡単に出来るからです。算数文章問題で、絵図を描かせると、頭の中の動きが手に取るようになります。何を考え何を考えようとしなかったのか、どんな言葉が分からないのか、どこを理解していません、どう対処するのか、あらゆる事本人自身でさえも意識していないことまで分かります。

問題は問ではないので、様々な角度から子供の考え方を考えることが出来ます。また、変化も即座に見て取れます。

目の前で、子供の考え方が変わる瞬間さえも見る事が出来ます。

頭の固さ、考え方の硬直性も、即座に分かります。つまり、心が分かっています。子供を分かろうとして、データやテストをする人がいますが無駄なことであり、誤った推論を導くだけです。

与えたものを使ってデータをとっても、その子の考えは出てきません。考えとは、イメージの移動・変形・連想・比較だからです。数値では何一つ分かりはしないのです。

「頭の中は分からない」という人がいます。そんなのは教育をしたことがない人です。頭を育てているのに、頭の中が分からないなんてあり得ません。方法を知らないのです。

▼ 指折算の大切さ

計算で、指折算を使わせないことは、感情を殺す第一歩です。反対に、目を閉じて指を感じる練習をしてみなさい。この補数なども一瞬で分かるようになります。

▼ 計算問題と文章問題

「計算が速ければ、それだけ文章問題に早く取りかかることができ、時間を有効活用で

きる？」

「一見本当のように聞こえますが、実は大間違いです。特に中学入試に関しては、致命的な勘違いです。」

これは、全問を解くという大前提があつてさらに計算が簡単であるという条件が成立するときにだけ効果的な考え方です。

つまり、100点満点を狙うときにのみ効果的な方法であり、そんな入試は中学受験ではあり得ないのです。錯覚なのです。

実際に志望校の入試問題を解けば直ぐに分かります。特に、上位校であればあるだけ顕著になります。

さらに、計算を速くしようとすることで、計算ミスの確率はグンとアップします。

日常的な高速計算練習は全く無駄なのです。無駄なだけなら、こんなに何度も注意しませんが、致命的なダメージを与えるから言つたのです。

計算問題を出す学校は、我慢強さや工夫する目を持っているかどうかを見ているのです。なぜならば計算そのものは「この補数と九九」だけしか使わないので誰もが出来て当たり前であり、実際にできますので単純計算の確認は意味がないのです。

▼子供達は評価に合わせて成長します

子供達は実際は評価に合わせて、評価されることに応えようとしています。

つまり、評価方法に合うように育つてしまふのです。表面的な力を評価するような環境で育てれば表面的な力を付けようとしてます。ですから、少なくとも家庭では、表面的なことを評価するのは止めましょう。評価は先生の為にあるのでなく保護者のためにあるのもありません。評価は、子供達の為になければ意味がありません。

出来高評価は、最も大切な過程を無視する貧弱な人間を作り出します。

反対に、過程を大事にする評価は過程を大事にする人間を育てます。

▼人間の思考方法

人間の思考方法を知らずに思考力を育てることは出来ません。

「読み・書き・計算」の徹底反復が自然に思考力を育てることはあり得ません。こんなことは教育史を検証すれば明白です。

▼有能感を育てる

有能感は、育てなければならぬ感情でもあり才能です。役に立っているときに嬉し

いと感じる事が出来る能力です。これが育っていないと、役に立つことが無意味に感じるようになるからです。

また、有能感が育っていないと、役に立っているのに嬉しく感じる事ができません。人は、自分が嬉しく感じないことをしようとは思いません。自発的行動には、理屈ではなく行動に移るための確かな感情が必要なのです。

自分が嬉しいと感じることは、誰に言われなくとも感心できるようにします。つまり、感情教育が大事なことです。

ポラントニア教育が大事なことが、有能感を育てるのではありません。小学校の時に家庭ですべきことです。

感情とは感じる事ができる能力なのです。本当の能力開発とは、感情教育のことなわけです。知識量を増やしたり、反応を速くさせたりすることはありません。そんなことは口ボットの役目です。自分の子供をできの悪い口ボットにしたい人がいるのだろうか？

▼有能感を育てる魔法の言葉

子育ての大きな目標の一つに「有能感を育てる」という考え方があります。とても大事なことです。簡単に言うと、

子供はお手伝いが大好きです。その時に、ちよっとだけ声のかけ方を変えればいいのです。それだけで、子供に有能感を植え付ける事が出来ます。

その魔法の言葉とは「助かった」です。よく私たちは「有難う」といいますが、ここで一工夫してほしいのです。「ありがと」だけではなく「助かったあ。ありがと」と言うのです。これだけで、子供に有能感（役立っているという感覚）を持たせる事が出来ます。

だって、助けてあげているのが自分で、助かっているのが大好きなお母さんなのです。から、これより効果的に有能感を育てられる場面はありません。

▼速くはいいけど

「速くはいいけど悪いことはない」「速ければ速いほどいい」は幼児には通じないどころか、致命的な弊害を与えます。

「一桁の暗算くらいは」でも無用であり危険なことです。実用性はなく、体感と思考の乖離を促す不要な学習方法です。五分もあれば、どれ程危険な学習方法であるかを自分の体（頭）で検証できるのに、見栄えが良くなる（集中力がつく・静かになる）か

らといって、実際には何の役にも立たず、それどころか致命的な副作用を子供達に与える学習方法を、基礎学習という尤もらしい名の下に強制している人が大勢います。

教育に「知らなかった」は通じません。子供達は毎日教育を受けて成長しているのです。そして、育てられたように、子供達は育っています。考える方法を教わっていない、考えないように育てられた子は考える事ができない、考えない子に育ちます。

今の教育が、何をしたいに育ちます。子供達の様子を見れば一目瞭然です。子供達は、誰もが才能豊かに生まれてきます。それなのに、教育（教師や保護者の勘違い）が才能を潰しているのが現状です。

今すぐに自分自身の頭で検証して下さい。多くの発見があるでしょう。「読み書き計算」よりも大事な「絶対基礎学力」「この力がなければ「考える力」は育ちません」。

私たちは、言葉で考えているわけではなく、私達は「言葉の先にあるもの」を知らなければ教育は失敗します。

反対に「言葉の先にあるもの」を知っていれば、全科目で効果的な指導や学習が簡単に可能になります。視察力を育ててあげれば、人は一生「考える力」を持った人間として存在できます。スピードという悪魔の刺激は、どんな楽しみもストレスに変えてしまふ。

▼大事な考え方

言葉を知らなくても考えることはできる。数字を知らなくても計算はできる。言葉も数字もイメージを再現するための記号にすぎない。言葉（文字）が有効なときってのは、言葉（文字）の向こうにイメージが見えるときだけだ。

計算（数字）が有効なときってのは、計算（数字）の向こうにイメージが見えるときだけだ。でしょ？

▼数字が示すイメージが大切

数字は文字よりも、もっと高度な抽象化をしている記号です。

記号の役目はイメージ再現です。肝心なことは、イメージまで戻れる（イメージ再現できる）かどうかなのです。

数字と文字を合体させると、イメージ再現の重要性が一層よく分かります。30+30=60と同じ30でも全く意味が違います。30+30=60はできて、30+30=60はできないわけでは

この時も、イメージがなければ30+30=60として何の違和感も感じません。

実際に感じない子がたくさんいます。これはクアレミスなどではなく異常事態です。教育方法を根本的に間違っているということです。

▼無限の効果を引き出すイメージング

全く同じ事（物）をしていても効果が格段に異なります。

イメージを意味（味わいを感じることを）しながら歩く。文章問題を「こなす」人と「味わう」人では80%と20%も違ふ。

つまり、差は80%になり、何もしていないのと同じことになる。時間の無駄です。重要なのは「何をするか」ではなく「いかにするか」なのです。そして、効果的な方法には必ずイメージの利用があるのは当然なのです。

なぜなら、頭は全てのことを、イメージで処理しているからです。指一本を曲げる場合も、哲学的思考をする場合も「最初にイメージありき」なのです。

▼教育が問われる時

教育が問われる時とは、小学校卒業、中学校卒業、高校卒業、学生卒業の時期です。

つまり、制約から解放されたときに（束縛から自由になったときに）多くの情報や誘惑の中で、自分の確かな判断で行動できるかどうかなのです。ですから、自分で考え、判断できる力を養うことが教育の目的となるのです。管理下で成績がいいということは、何の意味もありません。管理下になく、どう動くかが大事なことです。

教育とは、一人になったときに、自分が動く価値基準を明確にもてる力を養うことです。だから、教育は「生きる力」を育てることになるんです。

▼「確認テスト」なんかで分かるもんじゃありません

「考える力」「生きる力」です。

このことが分かれば、今までバラバラに見えていた事が、全て一つになります。教育は、全科目を通して一つのことを目指しています。

ヒトを人間に育てるために「考える力」を育て、人間らしい「判断力」を養うことで、そして、その為には幼児・児童期の感味力と視察力が2大原動力となります。この

力がなければ、どんなに知識を与えても、人間に育て上げることはできません。誤魔化さないで、味わうこと。味わうことは、絶対時間が必要です。味見と味わうことは、全く違います。急がせないことが大事。同じ事をさせても、そこにスピードを加えてしまつと台無しです。コヒーでも同じで、最初に少量の熱湯でアロマドームができるまで待つことが大事なのです。アロマドームができなければ豊かな味はできません。最初にかけるべき時間を省くことはできないのです。

▼右脳教育の落とし穴

確かに、頭はイメージ操作を基本としていますのでイメージによる反応は最速です。ですが、人間が作り出してきた文化（記録）は全て文字を代表とする記号でなされています。ですから、記号をイメージ再現することができなければ、記録を利用したイメージ操作はできません。また、イメージ操作は、誰もが得意としていることですから、特別な練習は不要なのです。

つまり、練習すべきは、記号（文字・言葉や数字など）をイメージに変換することなのです。イメージ操作だけの練習をしても、記号からのイメージ再現ができなければ、全く利用できません。高速反応を常にしているのです。ですからイメージ再現に要する忍耐力を消耗させ面倒なものとして文字嫌いになってしまいます。これでは、人類が残してきた記録を利用することはできません。正に本末転倒です。よかれと思ってしていることが、才能を潰すことになる代表例です。同様の勘違いは、いわゆる文字優先の左脳教育にも言えます。記号（文字・言葉や数字など）の向こうにあるイメージを意識できずに「言葉で考えている」と思っている。「分かる」とはどういうことか「も分からなければ、考える」とはどういうことか「も分かれませんか、ただ「よく考えなさい」という何のアドバイスにもなっていないことを平気で言うことになります。簡単な全脳教育とは、言葉とイメージを連動させることです。言葉の先にあるものを意識して言葉とイメージの役割を正しく理解して有効に使うことです。そうすることで、無理なく無駄なく効果的な学習が楽しく簡単にできるのです。記号（文字・言葉・数字・数式など）

イメージ再現（記号の視覚イメージ化に分かる）イメージ操作（考える：イメージの移動・変形・連想・比較）イメージ抽出（選択する：採用しないという選択肢もある）イメージ体現（イメージしたことを言動に移す）

▼意識的に

よく意識して、確かなイメージを持つて、これが頭の体操にも、体の体操にも大事なこと。ボディビルでも、筋肉の動きをイメージ化しながら行うことが重要。勉強も言葉はイメージ化しながら行うことが重要。なぜなら、脳の指令はイメージで行われているから。意識的に計算する。意識的に読む。意識的に確かめる。イメージを作り上げてそれを見ながら。逆立ちができる」と「逆立ちが分かる」分かったら出来なくてもいい。なぜなら、体力などの条件が揃えば必ず出来るのだから。ところが、出来ても分かっていないと応用は利きません。

だから「分かる」ことが大事。分かるとはイメージ化できるということ。そして、分かっているとは、自力でイメージ再現できるということ。できるとは、イメージを体現できるということ。どちらも大事なことが、幼児・児童期に必要なことは「できる」ではなく「わかる」です。できるだけでは、できなくなることもあるが、わかっているれば、必要なときにできるようにさせることが出来ます。「できる」と「わかる」の比率は2対8で十分です。できる（体現化）は、表現することです。表現練習は、義務教育の最後の仕上げでしか養成してはいけません。内容がないのに、出し方だけを教えてしまつと、どんなに上手でも内容のないサルマネになってしまつ。また、できていても、楽しくなければいけません。分かっていけば、楽しかったことは、するようになります。楽しく分らせること、できなくてもいいから楽しく分らせることが大事な理由です。教育者の手を放れたときに真価を問われるのです。本当に分かっているこ

とが自発性も導くのです。ここに子供の可能性を保証する鍵があるのです。料理の味付けと同じです。手順を間違える知識とスピードは、塩にあたりまです。最初に塩を入れてしまつと味付けはできません。「できる」は最小限でいいのです。

▼手法が大事

どんなに多量の問題を解いても、その手法が間違っていると学習にかけた時間は、無駄な時間であるばかりか致命傷を与える危険な時間になりまです。否気な顔をして「勉強に無駄なことはありませぬ」と言う人がいますが、とてもない勘違いです。2才までは無駄な勉強は、一切させてはいけません。主体的な遊びに無駄はありませんが勉強にはあるのです。

▼技術と教育

技術の習得と幼児・児童期の教育を混同してはいけません。義務教育と社員教育とは、全く異なるもの

義務教育は、第1段階が2才までで、ヒトから人間に育てるための教育で、第2段階が15才までで自立準備段階です。ここで、知識を獲得し、社会の中での自分を位置付けます。「分かる・考える・判断する」までが、2才までに完成させるべき力です。この後に知識を加えて応用して熟成させます。15才までに仕上げます。家庭教育は遅くとも、ここまでで終わります。2才で終わりにしたいものです。理想としては、2才で終わりにしたいものです。日本の教育制度は、大変よくできていて、高校入試を自分の意志と責任でさせるようにすると実にタイミング良く育てることが出来ます。

▼記号とイメージ

記号（言葉・文字）⇔変換⇔イメージ（多くは視覚イメージ）
記録やコミュニケーションの多くは、記号で行われます。ですが、記号はトリガー（引き金）にすぎません。記号は瞬時にイメージ変換がなされなければ「分かる」ことはありません。記録でしかないので、単なる無意味な音や形の記録でしかないからです。イメージの再現があつて、使われた記号は

意味を持つのです。このイメージ変換（記号の向こうにあるものを意識すること）が、人間の進化の原点なのです。考えるにも記号のイメージ化が必要な理由です。思考は全てイメージ操作で行われているのに、記号そのもので考えていると思つていて、思考力の養成は永久にできません。

言葉だけを覚えてあそんでも、言葉から確かなイメージを再現できなければ、考えること（イメージ操作）ができないのは当たり前のことなのです。かといつて、イメージだけを覚えてあそんでいては、言葉からのイメージ再現力は養われずにイメージ操作の前の段階で止まってしまう。

イメージ操作だけを練習していると、反応が速いことになってしまふ、言葉からイメージ再現をする手間を忍耐できなくなつ。さらに、言葉から再現したそのイメージを使つて考えること（イメージ操作）の練習をしないと、タイミングがずれてしまふ無駄な努力を使うことになつ。つまり、文字・言葉・数式→イメージ化→イメージ操作（考えること）を常に一連の流れとして練習しなければ、効果的な学習はできないということ。

さらに、計算も含んで練習できるものが、最良の思考力養成教材になります。「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」です。

国語・算数という教科別の学習を超えた学習方法がここにはあります。「どんぐり倶楽部」の問題を、暗算で解けるからといって暗算で解くのは全くのナンセンスです。

「どんぐり倶楽部」の問題は、消化するためにはありません。何にでも通じる考え方をマスターするためのものです。考える手順をキチンと踏むことが大事なのです。ですから、数多くする必要はありません。手抜きをしてはいけません。こうすることなく同じような問題にぶつかつても、迷うことなく同じ手順で立ち向かえるのです。計算一つとっても考え方が大事なのです。桁が多くなると出来なくなる暗算は何の役にも立ちません。どんなに桁が多くなつても筆算なら誰でも出来ます。

これが応用力なのです。「暗算でできる問題は暗算、暗算できない問題は筆算」ではダメなんです。途中で出来なかったり、計算間違いをしたりすることがあるからです。「何でも筆算」で終わ

りです。
基本とは、どんな問題にでも対応できるルールでなくては意味がありません。

▼暗算は芸事です。

芸事は、学生には不要です。計算は筆算です。という覚悟をしていると、暗算にするか筆算にするかを迷うことはありません。筆算で間違っような計算問題であれば、暗算では100%間違えます。

どちらが基本かは一目瞭然です。

さらに、受験時間はこの迷う時間こそが、不要で危険な時間なのです。「計算とは筆算することと見つけたら」です。

▼入試で考えてみましょう。

過去問題を解ければOK? 大間違いです。過去問題で「を」ではない) 解くのです。手順や・考え方のマスターが主眼だからです。だから、同じ問題を何回やつてもいいのです。

毎年、入試問題は変わりますが、求められている考え方は同じなんです。ですから、求められている考え方をマスターすれば、どんな問題も解けてしまます。これを意識して勉強することが受験勉強なのです。ところが、莫大な問題数をさせて、肝心の考え方は意識させないで感づく程度までしか育成できないのが現状の塾です。

つまり、子供自身が考え方を発見するまで指導せずに(指導できずに)子供が自分の力で考え方をやっとなマスターした時に「多くの問題を消化したから応用力が付いたんだよ」という。ところが、考え方は最初から「考え方が大事なんだ」と教えていけば、誰もが直ぐにマスターできるものなのです。何と多くの無駄な時間とお金と労力を使っているのでしょうか。正に「労多くして益少し」です。

▼危険な考え方：大きな勘違いベスト3

- 1 出来れば分かってい出来ても分からない
：読めても分かっていない
：書いても分かっていない
：計算できても分かっていない
2 簡単なことが基礎である→複雑でも応用の利くことが基礎である
- 3 早(速)ければ早(速)いほどいい→早(速)くてはいけない

▼×××

子供は反復が大好きです。ですから多くの

ことを何度も反復させて覚えさせましょう。つてのは全くダメです。

子供の反復は納得(満足)するための行動であって、覚えるためのものではありません。ですから、覚えていなくても納得(満足)すれば終わりにすべきなのです。

それなのに、大人の勝手な都合で、反復を続けさせると、残るのは満足感ではなストレスになってしまいます。ストレスは必ず蓄積します。納得回路が出来れば、それ以降の反復は、ストレスのみが増加するので

また、スピードという刺激は、どんな楽しみもストレスに変え、どんな良薬も毒薬に変えてしまいます。大好きなケーキを3秒で食べろと言われたらそれはストレスを食べているようなものです。

▼帰ってきたら直ぐに宿題をする?

「帰ってきたら直ぐに宿題をする」のは夏だけ!

だって冬は暗くなるのが早いからね。

遊ばないってのは、それだけでストレスが蓄積されるんです。

ストレスは、学習の大敵です。遊ばせない

ストレスを溜める

学習に支障を来す

遊ばせることが学力の素

▼「するどい顔」「大人びた顔」

「するどい顔」「大人びた顔」は危険信号。

子供はどの子も生まれつき豊かな才能を持っています。それを潰すのは、子供の真の才能を知らない大人の教育屋です。この子供の才能を潰す教育屋のキャッチフレーズは「多量に高速に」です。

ストレスに潰されていくのです。

目の前の子供は、あなたが育て上げた子供です。

他人のせいにしてはいけません。何も手をうたなかったという選択をしたのです。考えない宿題をさせ続けたのもあなたです。変えるのもあなたです。

「才」の時に、どうなっていて欲しいのか。明確なイメージを持つことが大切です。

人間らしい勝負です。

人間らしい判断を下すことができず、計算を高速に出来て言葉は知っているが、自分で考えることができない。そんな子に育って欲しいと願う親がいるのだろうか?

でも教育は「才」までしかできません。優先順位は決定的なのです。

迷ったら立ち止まって回りも見渡すこと。回りが見えてくると自分が見えてきます。自分が見えなければ、有効な対策は打てません。見えればすべきことは見えてきます。危険な思い込みは致命傷を与えます。

▼小学生でも簡単

小学生でも簡単に理解できる「分かる」

「考える」「判断する」

偶然を待つというようでは、思考力を育てることは難しい。

思考力は正しい手順さえ踏めば、誰もが獲得できる人間の特技です。

ただし、方法を教えないければ、偶然見つけた人しか身に付けることはできません。

最優先させるべきは、ストレス発散の予定

です。

※昔はお祭りなどがこのストレス発散の手伝いをしていましたが、今は家庭で設定しなければなりません。

完璧であってはいけません

完璧でないことを、受け入れられるように育てることが大事です。

勝負の時だけは完璧を目指しても結構ですが、日常的に目指すことは異常です。

成功とは、過程に対する評価の言葉であって結果に対するものではありません。

失敗とは結果の別名というだけであって、結果は結果に過ぎません。

何も変わりません。

何も変わらない目の前の結果に、失敗という別名をつける積極的意味は、何もありません。

▼小学生でも簡単
人生(子供の一生)を左右する「絶対基礎学力」を知っていますか?
「読み・書き・計算」では「考える力」を育てることはできません。
これですべてあれば、全国の小学校で立派に育っているはずだし、落ちこぼれなど存在しません。
不登校が十万人を超えている今、こんな迷信は何の支えにもなりません。
教育政策失敗の根本原因は、基礎学力の「定義」が間違っていたからです。一刻も早く気づいて欲しいものです。

▼子供はスーパーコンピューター

コンピューターに、どんなに優れたソフト

が入っていても初期設定(正しい処理方法の指定)が間違っていると、役には立ちません。本来の力を発揮できずに負荷ばかりがかかってしまいます。

たとえスーパーコンピューターであっても何をどう使うかという初期設定が出来ていなければガラクタです。

反対に、どんなに小さなコンピューターでも、初期設定次第で、フルパワーを出すことが出来ます。優秀でなくても十分に使うことが出来ます。人は自分の持つ生まれ

た得意技になかなか気が付きません。ましてや、得意技を封印されたのでは勝てない試合にも勝てないのは当たり前です。反対に得意技を工夫して使えば、出来ないこと

はないし、最高の自分になることができます。

▼学校の責任にするのは止めよう

だって、何も解決しないのだから。

自分の子供は、自分で守るものだからです。

先生は教え方を身に付けて、先生になって

就職しているだけです。授業参観に行くと

たに、この先生が塾に行ったら、一日でクビだろという程度の先生を何人も見て

きた。

しかし、「どんぐり方式」ならば、教師の

力量に関係なく思考力の養成が出来ます。

工夫された教材は、人間本来の力を自然に

引き出すように作られているからです。

例えば作文：絵コンテ作文

作文とは文を作ることはありません。イ

メージを文で説明したものです。作文がで

きないのは、説明する元になるイメージが

明確でないからです。ないものは説明でき

ないから書けないのです。

ですから、反対に確かなイメージがありさ

えれば、どんな作文も自由自在です。

確かなイメージを持たせれば「見えるよう

にしてあげれば」あとは、そのイメージを

よく見ながらイメージを説明していけば

いい作文です。言葉にすれば説明ですし文に

すれば作文です。

コミュニケーション能力などと、取り立て

ていうことはありません。表現力と特別な

呼び名を使うことも不要です。人間が出来

ることは、記号とイメージの変換くらいな

ことです。

このようにイメージを媒介させることが、

入力にも出力にも最大の効果を発揮するの

です。

作文に味を付ける、子供達が得意な効果的

▼小さな満足・大きな満足
小さな時には「小さな満足大きな効果」ですが、大きくなると「大きな満足小さな効果」になってしまいます。

▼満足回路
小さいうちに「満足回路」を育てましょう。小さな刺激（快刺激）で直ぐにできます。子育ても学習も、時期（タイミング）と手順（オーダー）を守れば、誰でも無理なく無駄なく効果的にできるのです。

▼両方あるもの
両方あるものは、両方を同時に使って効果を発揮するようになっていきます。一番分かりやすいのが目の仕組みでしょう。遠近感、2つの目を使って感知するもの。片方ずつ使っているのは、いつまでたっても感知できません。

脳も同じです。右脳教育・左脳教育という言い方を聞きますが効果的なのは両脳教育です。そして最も大事なものは、その間に介在する変換作用です。言葉はイメージ化する力、イメージを言語化する力。もちろん言葉はイメージ化する力が優先されます。入力に関連するからです。出力は後です。そして、この力は「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」で簡単に育てることができます。

▼朝の頭の始動に効果的なのは、映像再現のない「百ます計算」よりも、映像再現のチャンスのある「暗唱」が少しはいい。しかし、不明確な映像再現しかもてない他人が作った文の「暗唱」よりも、明確な映像再現を瞬時にできる自分の「活動報告（昨日の出来事）」が格段にいい。これは「イメージの再現練習」日常の意識化、言葉とイメージの連動、イメージでの再体験による経験の深化を容易に伴う。また、個々人の子供の行動や好みも分かり、先生にも子供同士にも、交流の助けになり話のキツカケにもなります。こうすると、何の手間もなく効果的に個人を知る生きだ情報が増えて来ます。工夫次第で、学習の準備と子供の日常を知ることが同時にできる一例です。

▼時間内にするこの無意味さと危険性
入試の時だけは選んだ問題を時間内でします。入試は本番の試合ですから、特別です。非日常です。日常的に非日常的なことをし

ているのは異常です。毎日毎日、緊急時（大災害時）の避難訓練をしているようなものです。不安と緊張で疲れてしまい日常生活に支障を来します。緊急時がいっつのかが分かっている場合は、緊急時に合わせて訓練をするだけでいいのです。日常は日常を楽しむことが全てです。なんの検証もない疑心暗鬼ほど馬鹿げたことはありません。

▼悪い宿題のストレス度チェック
実際に子供達の宿題をしてみれば、どれ程のストレスを与えているかは直ぐに分かります。さらに、子供は大人よりも敏感であることを考えるとストレスは数十倍にもなっています。これでは学力向上どころか勉強嫌いになるのは当然です。いい宿題ならストレスを感じないで、学力向上と勉強への好奇心のどちらもアップできますが「お粗末3点セット」ではどんなに本人が頑張っても学力を育てることはできません。大事な宿題が「お粗末3点セット」の場合は、自宅で「お見事3点セット」に切り換えましょう。

▼小さな時には小さな回路、
大きくなった大きな回路が必要になります。でも、一度作られた回路は成長と共に大きくなります。ですから、作る時には小さな時に作りましょう。必要な回路と同様に小さな時には、不要な回路もできやすいので、不要な回路ができなないように注意することも必要です。頭の条件反射回路は全く不要です。最も危険な回路です。そして、危険な回路も成長するのを忘れては行けません。カン細胞も増殖するのです。

▼味わうことの楽しさ
「味わうことの楽しさを小さいときに体験する」「これがないと「味わうことの楽しさ」を知らずに大きくなってしまい、楽しい人生であって（人生を味わうチャンスがあっても）味わうことができなくなってしまう。味わうことを知らないとは、実に悲しいことです。子供と一緒に味わうことがとても大切なことです。味わう対象は何でも結構です。味わう楽しさを体験することが大事なのですから。星を見る、花を見る、料理を味わう、工作

に熱中する、スポーツを楽しむ。全てに共通している効果的な方法はジックリ味わう。勝敗や出来る出来ないは関係ありません。味わうことに成功すればいいんです。努力に成功すればいいんです。結果は関係ありません。過程が伝わるべきことの全てだからです。結果は導かれるものであって、それ以上でも以下でもありません。

▼遊びと宿題
遊びを犠牲にしてまですべき宿題などあり得ません。少なくとも私は実際に出された宿題を、年間毎日（365×8＝2920日分）見てきません。一日たりとも遊びに勝る宿題はありません。遊び時間の確保は第1優先課題です。宿題は間に合わない場合は家族全員で楽しくするんです。それどころか「悪い宿題」ならばさせない方がいい。良い宿題であれば「宿題してね」の一言で家庭学習は十分ですが、悪い宿題だとそうはいきません。宿題をさせることで、悪影響を与えるのですから嚴重注意を要します。

▼子育てメモ
「いつも」ではないのに「いつも」なんだから、とは言わない。「こういうときがあるよ、気をつけようね」で十分です。「言い訳」と「口答え」は丁寧に聞いてあげましょう。子供のストレス発散を押さえずにむとストレスは肥大します。丁寧に聞いた後で静かにアドバイスすれば済むことです。捨て台詞は絶対に言わない。質問はしない。答えられないと分かっている質問はしない。自分の感情を安定させるための（ストレス発散の）しわ寄せを子供にぶつけてはいけません。

▼自然な両脳教育
効果的なのは自然な両脳教育です。右脳教育と左脳教育を合わせれば両脳教育になるわけではありません。両輪を同時に自在に操れて安定走行が可能になります。必要で在れば高速走行も可能です。片方がどんなに速く回転しても、安定走行はできません。高速回転しているタイヤだけを見ていると速そうですが、車は空回りしているだけ。その場をグルグル回っているだけで前進し

ていません。これでは、いつまでたっても目的には着けません。「もっと速く徹底的に車輪を回せばいい」という声が聞こえますが「？？？」です。右をやったから、次に左するのでもダメです。両方で1つの感覚なのです。両方を同時に感ずることで、片方では感じられない感覚（使用法）が身に付くのであり、それが2つある理由なのです。

車でも両輪同時に回って前進できるのです。言葉が劣っているから言葉を強化する、イメージが劣っているからイメージを強化する、というのはナンセンスです。両方を意識しながら、言葉とイメージの間を強化しないと、言葉とイメージの往來をスムーズに行うことはできません。言葉とイメージとを繋ぐ架け橋を大きくすることで、入力も出力も自在に出来るようになるのです。

今は入力だけ、今は出力だけなどという処理方法はあり得ないのです。右足だけ歩く練習をして、次に左足だけ歩く練習をすれば、それでスムーズに歩けると思いますが？そんなことを言う人は、自分で歩くことを意識したことがない人です。片足で歩く感覚や技術と、両足で歩く感覚や技術は、全く次元の異なることなのです。

▼読解力とは
読解力とは何か。読解力とは文章をイメージ化する事が出来る力です。意味が分かるとか言いますが、意味が分かるとは、イメージ化できるということです。見えることが分かることですから、イメージ化することと分かることなのです。イメージ変換の対象が文字の場合に読解力と呼んでいるだけです。このことは得意分野の本と苦手分野の本を読み比べて、その時の頭の中の様子をよく観察すると分かります。苦手分野の分からない本はイメージ化できていません。見えていないから分からないのです。得意分野の方は意識しないくらい素早くイメージ化できていますので、静かに頭の中を観察しないと気付かないほど速いのですが、文字をイメージ化して吸収理解しています。映像は一瞬で反復再生が出来ますので長い内容のもので、イメージ化できているものは分かる（いつでも見れる）のです。苦手なものは、イメージ化できていないうちに次の文章に移ってしまいますので、反復再生できずに繋がりがもたなくなるの

です。

つまり、文字をイメージ化できないまま音声化しているだけなのです。イメージ化がなければどんなに速く読めても内容は掴めません。全く無意味な音声再生機にすぎません。これが、スラスラ音読が全く不要である理由の一つです。本読み上手の本嫌いは、スラスラ音読の重要視から生まれます。

「読みながらイメージ化しているかどうか調べようがない」という人がいますが、簡単にできます。絵図を描かせればいいんです。また、音声化は普段話をしている子であれば、何の問題もなくできることは証明済みです。何の問題もなくできることは証明済みです。スラスラ音読に拘る理由は全くありません。読めればトツトツで十分なのです。問題はイメージ化して味わっているかどうかです。

文章力とは読解力の反対で、イメージを説明するのには文字を使うだけの事です。「考えを自分のものにすると」とは文字・言葉で伝えられた内容(イメージ)を伝えられた文字・言葉に頼らずに再現できることです。なぜなら、文字からイメージに変換した瞬間にそれはオリジナルになるからです。イメージはそれとして同じものはありません。文字や言葉から離れてイメージ(オリジナル)を再現することは、オリジナルを使うということになるからです。

そして、そのイメージの説明を自分の言葉ですれば、オリジナルの考えとなります。原形と似てはいるでしょうがオリジナルです。もちろん、体験を深めることで、そのイメージを深化させることは大事ですが、まずは取り込むことが最初の一步です。私達には見えないものを見る力(信じる力)が備わっています。

最も偉大な力の一つです。私達には、その力を守り育てることで人生を楽しむことが出来るようになります。子供は空想に生きることが出来ます。既にこの力を体得しているということです。この力を守り抜くことが大事なのです。現実を取り入れる術は簡単にできます。ですから心配は要りません。

注意すべきは空想する力を失うことです。イメージ力の枯渇は子供に致命傷を与えます。学力にも致命傷を与えます。創造力にも表現力にも、あらゆる面で致命傷を与えます。いつも不思議に思うのですが、「手遅れですか?」とよくきかれます。「手遅れ」

だと言われたら諦めるのだろうか?もちろん、安心感を求めているのは分かりますが、口にするべきことではないと思います。目の前の子供に自分で育てておいて「手遅れですか?」は納得でしょう。ですから保護者が諦めない限り「手遅れ」ということはあり得ません。しかし、保護者が諦めた瞬間に、教育は「手遅れ」になります。

▼「やりたいと言っているのだから?」

子供がやりたいと言っているのだからやらせている「は要注意です。多く子供の場合は、お母さんが喜ぶから、という条件があったりします。これは隠れた強制であって、ストレスが時間差攻撃してきます。

「子供を信じる」とは、こういうことではありせん。何でも本当のことを言える状況を作ってあげなければ、本当のことは分かりません。

▼無意味な評価基準

無意味な評価基準に合わせ頭を成長させてはいけません。評価基準は基準を作った人の勝手なモノサシでしかありません。そんなものは、入試でも社会でも人生でも役には立ちません。代表例が「あゆみ」です。

また、できる(上手な・得意な)ことと、好きなこととは違います。好きなこととは「上手な・得意な」ことがあっても、好きなことがなければ、楽しく過ごすことは出来ません。ところが、「100」全てができなくても、好きなことが1つでもあれば、楽しく過ごせます。

そして、好きなことがあれば、好きでないことを我慢することもできます。好きでない仕事を続けられず、好きなことがあれば仕事が続けられます。何もないから仕事を続けるというのは、殺伐たるものです。楽しみのためにする仕事は、その楽しみに繋がる楽しみの一部になれます。人生の核は好きなことなのです。

▼算数力と国語力

算数力と国語力は同時に育てることが出来ます。数学の論文は無性格です。そこには知性と理論はあるが感情がありません。だから感情は別系統で育てる必要があるのです。普通は算数文章問題という数学の論文の

ように無性格ですが、「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」を使うと、子供達の解答の中に笑っている動物など楽しい登場人物が数多く出てきます。問題が無性格ではないからです。国語的な要素を多分に含んでいるのです。ですから算数の問題なのに「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」は国語力もアップできるので

▼子供の「分からない」

子供の「分からない」が全ての始まりだった。「分からない」ということだろう。長い間考えていました。すると、「分からない」「イメージできない」「視覚イメージを作れない(再現できない)」と気がきました。

すると「考える」「イメージ操作」だと分かりました。そこで、このことを文章問題で検証してみました。国語でも算数(数学)でも英語でも理科でも社会でも同じでした。

ということでは、学力の素はイメージ操作だとしても、なぜイメージなのだろうと、今度は考えました。頭はイメージで考えているからだと分かりました。言葉はイメージを導くトリガー(キッカケ)に過ぎなかったのです。

▼先取り学習は無意味

ある種の初期経験(絶対基礎学力を作る経験)が、よりよい知的な発達を生み出すことは証明されている事実です。この種の研究は、それぞれの年齢で、その年齢に見合った異なるタイプの学習が必要であること、また初期経験は精神技能の獲得(知性の獲得)において、差を生み出すことを一貫して示しています。

シヨックかも知れませんが、先取り学習は無意味である。あるいは、それにかけた時間と労力には見合わない、世界的に証明されているのです。

▼永久脳の仕組み

「大脳の思考モデルを小脳が写し取る」ことは最近になって、やっと分かってきたようです。このようにして、大脳は小脳が写し取った思考モデルを利用して、高次の思考を効率よくできるようにする(9才の壁を突破する)のです。脳の構造や、思考の意味(イメージ操作)

や言葉の性質(「言葉のトリガー理論」)を考えるのが当然のことです。私が「絶対学力(83年)」で言及していたことは、まさに、この高次の思考が正常に行われるかどうか、人間の思考の発達の鍵だということです。脳科学がやっと追いついてきたようです。余談ですが、言葉は全てイメージ化されて処理されることに気付けば脳科学やAI(Artificial Intelligence: 人工知能)の研究は、飛躍的に進歩するでしょう。

米国のMarlene(ライクル)らの研究では「リンゴ」と言ったら「食べる」とこたえるような多くの名詞を関連する動詞に転換する(関連を見つけて最も適切な動詞を選択する)課題は、正常な脳であれば、ある程度の練習で間違わずにできるようになります。小脳に異常があると、いくら練習しても間違いがなくなるということが実証されています。

確定判断したモデル(回路)を納めた小脳を使えないから、同じ問題なのに、新しい情報として最初から処理をし、今までの判断基準を使えないので毎回判断に迷うのです。つまり、大脳で正しい(使える)と判断された回路は応用のために小脳に保管されるというわけです。そして、いつでも参照できるようにになっているのです。

こうして、小脳をコンピュータの記憶装置のようにして使えば、大脳は思考本来の演算処理だけにエネルギーを当てることで、でき効率的な脳の使い方が可能になるのです。この大脳と小脳の連係プレーを効果的に利用できるようにするのが9才前後なのです。大脳の本来の機能は思考の司令塔です。チームで言えばキャプテンです。たまたま上げのキャプテンですから何でも上にできます。ですが、キャプテンが全てのことをしては司令塔としての指示を出すことはできず、全体としての活動は極度に鈍ってしまします。

対戦相手が弱ければ(暗記や単純計算などなら)キャプテン一人でも勝てるでしょうし、勝敗の結果も早いでしょう。ですが、大事なものは強敵と戦うときにどうするかです。各人が本来の役目を自覚を持って遂行しなければチームとしての勝利はありません。キャプテンにはキャプテンとしての練習課題があるのです。ですから、メンバーがすべきことを教えた後はキャプテンとしての練習(作戦の立て方や指令の出し方)をしなければならぬ

のです。小脳と大脳の関係が分かれるとヒラメキも分かります。運動の練習では、最初は意識しながら（考えながら）確認しながら（手足を動かしながら）慣れてくる（納得回路が作られて小脳にこの回路が写し取られる）と意識しなくても運動ができるようになります。そして、次の段階では、今学習した運動より高次の運動を既に学習した運動を使って発展させます。

つまり、小脳の動きは意識されずに行われることに属するのです。大脳で作られた思考回路を小脳が写し取って、無意識のうちに考えを継続していくのです。ですから、自分でも考えていない（意識していない：意識できない）のに突然ヒラメクのです。意識の上では他のことを考えていても、動作は全く関係ないことをしているても、小脳思考（無意識思考）は続いているのです。ただし、この思考は大脳で明確な思考モデルを一度作り上げないと、移すことができませんので、思考モデルの作り方（イメージの移動・変形・連想・比較）を知っておく必要があるのは言うまでもありません。

危険な自動化：反射形成学習

思考において最も重要なのは判断です。ですから、思考に関連する分野では、天才以前の条件反射的な判断さえも自動化する反射の形成は極力さける必要があります。最も危険な学習が高速単純計算に代表される、スピードを強いられる学習方法です。反対に運動競技（スポーツ）においては、無意識下で動くことを多くの部分で要求されるので、条件反射の形成は必要とされます。頭と体の学習を混同しないことが、健全な子供を育てる要です。

▼体も思考も同じ仕組みで再現されている高度である必要はないが、体を自分の望むように動かすことは、大脳で考えたモデルを小脳に写し取らせて利用するという点において思考の発達と同じです。子供が体を動かすことが重要である一つ理由です。上手下手は関係ありません。思ったように動かせること。そして、少しでもいいから修正していくことができること。このサイクルはまさに思考の発達のサイクルと同じです。体も思考も脳（視覚イメージ）によって統制されているのです。

行間を読む

物語を味わうことも言葉のイメージ化を明確に出来れば簡単です。文章を自分のイメージで読んでいるもので明確にするだけで、文章で表現されているもの以外のことで、文章でイメージ化されるからです。この時にイメージされる、文章で書いている部分のイメージが「行間を読む」ことであり、このイメージをよく見ることに味わうことです。

さらに、作者のバックグラウンドや設定場所や時代のことをすれば、自動的にイメージも変化します。知識はイメージの色づけに過ぎません。イメージさえあれば色づけは後からでもいくらでもできるのです。ですから、背景を知らなければ、行間が読めないなどということは微塵も無いのです。明確なイメージ再現さえできればいいのです。ところが反対は不可能です。本体がないのに飾りは付けられないのと同じです。どんなに背景を知ろうが、上手に音読できようが、暗唱してしまおうが、イメージ再現が出来なければ、行間は読めないし味わうことも出来ません。

このように、背景の知識が無くても行間は読めます。小学生でも簡単に出来ます。言葉の視覚イメージ化です。文章なら映像シーンとなります。この方法だと、知識が追加された時点で、瞬時にシーンが変わって、新しいシーンとなります。知識量と共にどんなに進化していくのですが方法は同じなので、知識がなくても練習できます。

シミュレーション学習です。知識がなければ行間は読めないというのは勘違いなんです。それは知識を使って説明しているだけであって、行間を読んではないのです。行間を読むとは言葉以外の視覚イメージを状況に合わせて再現すること。ですから、この人いれれば必ず通るあります。全く同じ再現イメージなどありません。まじくても同じイメージなどありません。行間はオリジナルに成らざるを得ないのです。例えば「雨が降っている」とだけ書いてあるとしましょう。

行間を読みなさい。ここで「良く読めば分かる」という人がいます。何も知らない人の台詞です。「自分が見たことのある雨が降っている様子を思い浮かべてもらえ」と言えば、誰にでも無数にイメージ再現できます。

そして、その様子を言葉で説明させます。果てしなく説明が続くでしょう。果てしなく行間を読めるといふことです。何と簡単なことでしょうか。

教える方が知らないだけです。知識（条件）を追加すると一瞬で視覚イメージは変化します。違う行間を読めます。「夜のことです」と追加して「イメージ再現しよう」といいのです。「冬」と追加してイメージ再現。「遠足の前日」と追加してイメージ再現させます。

ドンドン変わるイメージ再現を誰もが簡単に体験できます。国語という「言葉：語彙量」と思っている人がいます。それではいつまでたっても偶然教育しかできません。ここでも大事なことはイメージ再現です。

なぜなら、言葉とはイメージ再現のためのトリガー（引き金）にすぎないからです。ですから、言葉を出させることではなく、イメージ再現が大事であることを教えなければならぬのです。

全教科を通して視覚イメージを使うことで生活にも応用できるようにします。そこまで育てて本当に生きる力を育てたこととなります。

▼思考の先にあるもの

猿には失礼とは思いますが、「考えるだけなら猿でも出来る」のです。人間である条件は「考える」だけではありません。「判断を保留する（論理的結論が唯一の行動基準ではない）」という「判断力」これが人間としての進化の証です。大江健三郎は「自分の木」の下で・日新聞社刊行の中で「ある時間、待ってみる力」と表現しています。「人間であること」の条件を真剣に考えたときに、誰もが到達すべき自然な考えです。この考えは教育界の大原則にならないければならないものです。

▼検定

数学検定、漢字検定、英語検定等を幼児・児童期に目指すのは害あって利なし。するならば、高校生になってから、どれか2級から取り始めると、多少は受験の助けにもなります。勝手に定められた、他人の価値判断に合わせる、大事な子供の才能を制限し強制する必要はどこを探しても見当たりません。

▼テレビについて（天才まで）

物語はリアルでないものが多い。展開は自然な時間に近いものが多い。時間は1週間で一人2時間以内。週に一日は見放題の開放日。時間は8時まで。就寝は9時。※不可能ではない現実的な対処法の紹介です。実際に実施しています。が十年間何の不都合もありません。特別なときにはビデオ収録が効果的です。

▼イメージ化について

イメージ（頭で作り出した感覚）と感覚（肉体から得た感覚）が一致したときに肉体的動きは理想的に動く。理想のイメージと肉体的感覚が一致したときに体はイメージと同じ理想の動きを表現しています。

「最初にイメージありき」なのです。日本体操のムーンサルトもこうして生まれました。正常で普通の動きだと常にイメージと肉体的感覚が一致しているのに、実感はありませんが、特殊な動きや異常な動きをしようとすると実感できます。「逆立ち」がいい例です。

▼言葉

言葉は考えるためにあるのではなく、イメージ再現のためにあります。その付加利用として記録することも出来ます。ですから、記録もまた、イメージ再現のためのものであります。さらに、音は覚えやすい（記憶に止まりやすい）ので言葉を伝達手段としているのです。伝達とは、イメージのやりとりですが、トリガーを使った方が、正確ではありませんが、効率的（簡単）なので言葉を使っています。正確ではないですが、勘違いやすれ違いも起こりますが、日常レベルでは問題ありません。これが言葉を使う理由です。ですから、イメージを受け取らなければ、言葉に意味はないのです。絵図を利用して伝達すると分かりやすいというのには理由があるのです。

〒871-1356

福岡県福岡市南区花畑2-21-33-105

「どんぐり倶楽部」

<http://homepage.ncc.com/donguriclub/frompage.html>

e-mail: donguriclub@mac.com

考の臨期

下・糸山泰造

▼力の出させ方

誰もが力を持っています。ところが、力を持っていますが「君は力を持っているんだよ」と教えてあげなければ、持っていることに気付かないし「こうやって使ったよ」と教えてあげないと使えません。スターウォーズのヨーダのように、先生（親）は生徒（子供）に持っている力のことについて教えてあげるべきなのです。「君達は目で考える力を持っている」ってね。

▼授業と日常

授業に日常（遊び）を持ち込むことは極めて重要なことです。生活と学習が連動し補完関係になるからです。生活の中で学習を意識するようにする必要があります。「あ、これ授業でやった！何だこのことだったんだ」この様な意識を持たせることが出来るように仕向けるのです。「ふん、同じなんだ」「へえ、こういうことなんだ」が日常も学習も深化させます。体験の深化であり学習の深化です。深化した体験は小脳で応用を待つ状態になります。

▼調べ物学習の注意点

調べ物学習の注意点、地域のことではなく、外国のことではなく、アニメのキャラクターを調べます。調べるのはどこでもいい。図書館・本屋・ゲーム屋・インターネット・キャラクターに詳しい友達。こうすると「もう調べなくていい」「それくらいいいよ」と制限してあげなければ、止まらないくらいに調べます。調べた内容を「環境」だの「外国の文化」だのにしては効果半減です。子供達のあふれる好奇心からくる爆発的な「やる気」を全滅させ、苦行に仕舞ってしまうからです。ポイントとは「調べること」「調べ方を工夫すること」なのです。他の学習と同時にという考えは、全くダメ

です。ついでに「は両方ダメにします。

調べ物＋他項目→×
調べ物＋日常→○
小学生：ぬいぐるみ・キャラクター
中学生：歌・ダンスなど
目的項目を明確にして絞り込み、そこに「楽しさ」を加えます。この「項目＋日常」楽しいの原則が無制限の楽しい授業や宿題を作る誰にでもできる奥義です。同じことでも興味が出ると、吸収力は抜群に上がります。反対に興味が出なければ吸収しません。こういうことの積み重ねが「やる気」を育てるのです。

▼深思考

意識的に考えようとしなくても考えてしまう。反対に考えない回路ができていようと、無意識に考えないようにしてしまう。「考え・ら・れ・な・く・なる」のです。お金と時間をかけて考えられない頭を作っているとしたらゾツとしませんか？さらに、「考えさせない回路」は相反する「考える回路」を作る場合に摩擦（軋轢：邪魔）となります。

高速計算練習をみっちりこなして、反射的に反応するように育て上げられた頭は、反射とは反対の動きである思考を嫌がり、時には文字通り「泣き叫ぶ」こともあります。更地に家を建てるのと、一度建てられた家を取り壊して家を建てるのとでは時間も手間も格段に異なります。一番大変なのは取り壊し作業です。頑丈に作られていなければ、ただ本来は無用な労力を要します。頭は、隙あらば、既存の回路を使おうとします。で実によつたかいです。暫く練習をしないといないと「反射」を使うように戻ってしまうのです。深思考回路が出来てしまえば（写し取られてしまえば）放っておいてもその回路を使うので大丈夫です。さすまで作り上げればいいのです。ただし、一度、反射回路を作ってしまった人は、時々チェックしないと、いつの間にか反射回路を再利用していることがあります。深く考えなければ、その考え方は回路として写し取られません。自動的に働いてくれる小脳に思考回路を移動できないのです。数が少なくても深く考えることが応用力をつくれる理由です。写し取られた回路はいつでも簡単に利用出来るからです。これを私たちは応用力と呼んでいるのです。つまり、どんなに多くのことを覚えても、浅く考えても、回路として写し取られるこ

とはないので、覚え続けておかねば利用できないのです。反応は速くても応用できない知識では労多くして益少なし。短期記憶の正体です。

長期記憶とは小脳が写し取ったイメージや思考回路のことです。

ヒラメキは突然やってきます。でも、突然考えているわけではありません。とうことはどこかで考え続けているという事です。もう、お分かりでしょうが、小脳です。意識していないところで半自動的に考えるという動きを継続しているのです。材料はイメージです。だから、超高速であるにも関わらず負担（エネルギー消費）は最小なのです。

▼意識して

「意識して」「意識を集中して」とは、具体的に「明確なイメージを頭の中で描きながら」ということです。スポーツなら肉体感覚から受ける刺激を視覚イメージに変換して、ハッキリさせる（視覚イメージと重ね合わせる）ということです。文学も同じです。意識して読むとは、文字→音→イメージを明確にすることです。そして、自分が作り出したイメージと連動する感覚を味わうのです。

▼ミヒヤエル・エンテ

エンテは、芸術には癒しの効果がなくてはならないと言っています。何も難しく考えることはありません。見る人がイメージ再現する手伝いができ、しかも、その人が楽しくなるようなイメージの起爆剤をおいておけばいい、ということ。原形イメージの豊富さは、見る人によりけりですが、巧みに作られた芸術は、巧みにイメージを引き出してくれます。つまり楽しむ材料を引っ張り出してくれます。

全ての芸術は楽しむためにあります。自分（見る人）が楽しむためにあるのです。人生（同じです）。もちろん芸術作品を作る上げるまでは、それは芸術家のものであり、溢れ出るもの・発散する物ですが、一端出来てしまえば、それは、作品となり、芸術家からは独立し、我々の楽しみのお家へと変化します。我々見る側の人は芸術家は芸術家（人）として、作品は作品として見るべきなのです。そして、楽しむべきなのです。

▼味わい学習

小学校の勉強とは、料理と同じで、味わうものです。少なくとも小学校時代の勉強は味わうことで、思考モデルを小脳に写し取らせる必要がありますので、応用力となる深思考をさせる材料となる思考モデルを育てなければなりません。深い味をじっくり味わうことでしか、味覚（味を感じるための味蕾）が育たないのと同じです。機能があってもスイッチを入れてやらなければ稼働しないのです。ですから、深思考学習でしか思考力は育たないのです。

浅思考学習は味見と同じで、味わうことは全く違い応用力はつかないのです。

▼思考形態

あらゆる動物は同じ思考形態をしています。『Sol Thinking』（視覚思考）です。ですから、言葉が無くて賢いのです。人は手と言葉のお陰でこのイメージの再現を格段に容易にしかただで、特殊な方法を使っているわけはありません。イメージ再現なくして、模倣行動はあり得ません。ごっこ遊びが大切な理由はイメージ再現練習だからです。なぜなら、体はイメージの後を追って動くからです。意識的な行動とは明確なイメージを追ってイメージが作り出した感覚を肉体が模倣することで動くことです。

頭の中の明確なイメージ操作はかなり練習しないとできませんが、できるとこれほど高速処理を可能にするものはありません。ソロバンの暗算がよい例です。ですが、ソロバンの場合は使うイメージ操作が極端に単純なので思考力養成にはなりません。視力を使ったアイディア商品という位置づけです。ところが、このイメージ操作は書き出すことで見ながら出来ますので、誰でも簡単に出来ます。

このイメージ操作に手を使えるから人間は偉大な進化をさせたのです。手を使わずに絵図を描けなかったら進化はなかったでしょう。足や口で書いてもいいのですが、器用さからいって手なのです。絵図を描けるということは、イメージ保持（顕在化・直ぐに参照できる状態にしておくこと）に使う莫大なエネルギーを使わずに思考（イメージ操作）にエネルギーを使えるということです。つまり簡単に楽しく思考できるのです。つまり、イメージ操作に慣れるまでは、外部記憶装置である手を使ってエネルギーを効率的に使えば、誰でも無理なく無駄なく

効果的に考えることが出来るということですが。※目からの情報（絵図）を素にした再現は、ごく少量のエネルギーしか消費しないのです。

▼イメージと運動

ウォーキングの練習をするとき、明確なイメージを頭の中で描けるまでは、鏡を見ながら歩きます。これはイメージと感覚の動きを一致させるためです。ですから、一致したら、その一致したときの理想のイメージを頭の中に残しておいて再現しながら歩くと、理想的なウォーキングが出来ます。イメージが明確だと、体の動きさえも、そのイメージに合わせて動かすことが出来るのです。ムーンサルトもそうして生まれました。

▼確かなイメージ

作文が書けない理由も、算数の文章問題が解けない理由も、逆立ちが出来ない理由もみんな同じです。確かなイメージを描く練習をしていないからです。そして、このイメージングの前段階が、絵図をキチンと描くことです。そして、操作することです。

ですから、絵図を描くことが非常に大事なのです。視力の養成です。この視力を使った操作を頭の中だけで出来ること「天才」と呼ばれますが、そんなことは誰でもできるんです。これは当然のことです。ところが、このことを知らない教育者によって、天才である子供達はドンドン才能を潰されています。実に悲しく惜しいことです。

▼小学校時代の学習

小学校時代の学習は、全てが過程の造り込みであるべきです。思考モデルを小脳に写し取らせることが全てだからです。何をしたらかではなく、いかにしたらかが全てです。いかにとは過程のことだからです。宿題も過程の分かる（見える）宿題でなければ、宿題の意味がありません。宿題の最低条件です。

▼一流である条件

分野を問わずスポーツ選手から文学作家まで、一流である条件は、豊かなイメージ力を持つことです。イメージ再現・イメージ操作ができない人は、どの分野でもたかがしれています。ただし、間違っただけではないことは、イメ

ージだけをとりあげては片手落ちだということです。「言葉とイメージ」「肉体とイメージ」「音とイメージ」「絵画とイメージ」などのように常に何かと組み合わせるイメージを再現して操作することが大事だからです。この繋ぎの部分が練習を要する部分なのです。イメージは脳の言葉ですから、イメージ化の後は脳にお任せできるのです。脳はイメージの専門家なのです。心配無用なのです。

修学旅行のことを思い出してみよう。学校の場面でも結構です。では、今思い出したことを、もれなく文字に、音に、絵に、するとしたら何年かかるといいますか？イメージ再現は一瞬でした。では、空にある雲を見て下さい。雲の一つを見てその雲を変形してみよう。イメージだと無限にサイズも形も一瞬で操作できます。

▼体を作るのが体育ではありません。

体を使ってイメージトレーニングするのが小学校の体育です。1週間に数時間しかないのに、それで体を作れると考えるのは異常です。イメージトレーニングなら、非常に効果的に一生の財産にもなります。

体は、成長が完成します。つまり、本格的な移動が出来ようになります。小学校時代は成長途上で未完成ということですが、成長しているときに刺激というのは根本的に間違っています。栄養ならいいのですが、完成時に降にしかしてはいけません。とを前もってさせることは異常な負担を与えているだけです。

それでも体は外見でも分かれますので子供スポーツ外見もあります。ですから、完成時に行う動作そのものではなく、その動作のイメージトレーニングをさせると非常に効果的なのです。負担は少なく下準備になるからです。体育で頭を良くすることも当然可能です。頭はイメージ+αで強くなるのですから。

▼教育の統一場理論

教科に関係なく共通した目標は視力養成です。意識してイメージ化することで、大

脳で作った思考モデルは、小脳に写し取られて応用を待つ待機状態となります。こうして、必要なときにいつでも対応できる応用力が出来ます。

▼「分かる」全科目で「できる」ではなく

「分かる」モデルの作成が大事なのです。体育：体とイメージ→体感とイメージを連動させる
家庭：味とイメージ→味覚とイメージを連動させる
国語：字とイメージ→文字とイメージを連動させる

英語：イメージを連動させる
数学：イメージを連動させる
理科：イメージを連動させる
社会：イメージを連動させる
音楽：イメージを連動させる

▼小学校の体育では

頭の中に自分の体の動く様子をイメージして、そのイメージに体の感覚を合わせながら体を動かします。そして、イメージと体からの感覚と目で確認（見えなければ体で確認）している体の動きが一致したときの感覚を意味（モデルとして保存）します。理想的な動きが出来たら、次回は理想のイメージに近づける練習をします。

ココで大事なことは出来ることではなく、理想のイメージを常に「お手本」として描き、今の自分の動きとの違いを意識することです。そうするとどう修正すればいいのかが分かるからです。分ければ、今はできなくても肉体的に出来るようになったときに、100%出来るからです。これがコミュニケーション学習です。

ですから、小学校時代には、できてイメージと肉体感覚を体感できていなければ、よい体育とは言えないのです。意識しながらすることが、小学校時代は最も大事なことで、ゆっくりとした動作になることが望ましいのです。モデルを小脳にコピーするには意識することが必要だからです。

▼言葉はイメージ

言葉の全てをイメージ化は出来ないと思っています。反対は不可能ですが「言葉→イメージ」は何の問題もなく出来ます。なぜならイメージこそが頭の中の言葉そのもの（通信手段：信号はイメージとして認識される）だからです。「図解英語基本語義辞典：河上道生監修・政村秀實著・桐原書店1988年」では収載の英単語の意味を全てイラストで

解説してあります。

▼自信

簡単なシヨックで粉々になるガラスの自信など付けてもらっては困ります。

例えば「掛け算」

A君は2桁×1桁の掛け算10問を5分でできると自信を持っています。

B君はゆっくり自分のペースで筆算でやるので8分かかります。

では、この2桁×1桁の掛け算をしてみよう。B君はいつもと同じように何の抵抗もなくマイペースで筆算をします。ところがA君はできるはずだとばかりに暗算を始めますが上手く上がりません。

でも筆算をする習慣がないのでなかなかしませんが、どうしても暗算では出来ないの仕方なく筆算をしますが、殴り書きになったり数字が小さかったりして数字がすれたりしてミスの連続です。

基本とは何にでも応用が利く根本的な考え方のことです。

B君はどんな問題でも「いつもと同じ」ように筆算をして解いています。つまり、A君の学習方法は基本ではないということです。基礎計算とは暗算や高速計算ではなく「筆算を正確に間違わないような工夫をしなからすこと」なのです。

▼算数の文章問題は

イメージ再現（文章を絵図にすること）ができれば簡単に解ける問題からイメージ操作（イメージの移動・変形・連想・比較）ができないと、解けない問題に発展させることで思考力を育てることが出来ます。思考力と言うと難しく聞こえますが、自分が描いた絵図を操作するだけのことです。から、手を何度か見せてあげれば小学生でも簡単に出来るようになります。

私の教室では中学受験には関係のない普通の小学生が連立方程式の文章問題を文字式さえ使わないで絵図を描いて簡単に解いています。イメージ操作そのものが考えられることだと知っていると、どんな教科（材料）を使っても思考力を育てることが出来るのです。

また、このイメージ操作練習を続けることで判断力も育てることが出来ます。なぜなら、判断力とはイメージ操作の結果として出てきたものを「これでいいんだ」という感情を基に抽出することだからです。プラトンの「哲学学校：アカデミア」とイソクラテスの「弁論学校」は当時ライバ

ル校でした。フラトンは幾何学（目で見て考える視力中心のイメージ操作の鍛錬）を重視し、イソクラテスは文学（暗記中心の言葉の鍛錬）を重視しました。逸材は圧倒的にフラトンの学校から輩出された。当然のことです。思考力とは「視力」を使ったイメージ操作であり、言葉とはイメージを導くための記号に過ぎないからです。アカデミアの門には「幾何学の何たるかを知らない者は入学を認めない」という意味の言葉が掲げられていた。

ところがこれは幾何学（数学）そのものを指していたわけではなく「人間は言葉を使っていることを知っていることが入学の条件である」と言っているのです。計算が速かったり、言葉を数多く覚えることが思考力を育てるのではなく、イメージ操作（イメージの移動・変形・連想・比較）の練習が思考力を育てることをフラトンは知っていたのでしよう。

フラトンの教育に対する考え方は「どんぐり倶楽部」の考えと同質のもので、フラトンは「子供には元来才能があるのです。ですから、その才能をあれこれ大人の都合で刺激するのではなく、上手に引き出してやるのが教育の役割だ」と考えています。そして、学習には最も効果的なQ&A方式（「どんぐり倶楽部」の「分かる帳」と同じ）で、ある問答法で、特に図形問題（「どんぐり倶楽部」が「良質の算数文章問題」を使う理由と同じ）を教えて効果的な教育を実践したので、

▼大きな勘違い
「数字をたくさん知ってれば計算は自然に出来るようになる？」↓あり得ません。計算方法を知らないとは不可能です。

「語彙をたくさん知ってれば思考は自然に出来るようになる？」↓あり得ません。思考方法を知らないとは不可能です。

保護者から「じっくり考えているのに分らないようです。どうしてでしょうか？まだ、知識が足りないのでしょうか？」という質問をよく受けます。それも、不思議だという感じですね。

良く聞くと「知識は随分たくさん持っているのに考える問題は解けない」ということなのです。私には当然のことなのですが、多くのの人にとっては不思議な現象のようです。こういう質問をする人は「知識を増加させ

れば考えることが出来るようになる」という迷信を信じているのです。

知識量と思考力は合致しません。もちろん知識がゼロでは話になりませんが、何の特訓もしないで子供は考えるだけの知識は持っていますし、知識はほんの少しでいいんです。

なぜなら、思考力とはイメージの移動・変形・連想・比較をする力のことだからです。この練習を十分にすることで考えることが出来るようになります。使いたい方を使いたい材料に過ぎません。材料は用途に応じて（目的に合わせて）調達すべきなのです。無目的に材料を集めても使い方を教わらなければ何も作ることが出来ないのです。ところが、多くの人は、子供の思考が停止している状態を「じっくり考えている」と思っていて「どうして考えても分からないの？」「と感じているのです。実は「考えてはいない」のです。ですから、当然分からない（解けない）のです。

こんなことは絵を描かせてみれば一目分かります。絵を描けない子は頭の中で、どう考えているのか分からないので、時間が過ぎるのを待っているだけの子です。もちろん本人は考えると言っていますが、絵図を操作することだとは教わっていませんから、絵図の操作さえもせずに「よく考えただけだからなかつた」といいます。

これらは、教える側が気付いてあげなければ、子供自身では半永久的に気付くことが出来ないことです。ですが、言ってあげれば、誰もが持っている力を使うだけなので簡単に出来る様になります。

▼自信や達成感
自信や達成感を持たせられればどんな方法でもいいわけではあります。幼ければ幼いほど方法（過程）が大切なのです。なぜなら成長過程にある幼児は吸収力があるだけに、方法そのものをまるごと吸収してしまふからです。手抜きすれば手抜きを全てマスターします。見当外れの無意味な（価値のない）達成感（快感）を味わった幼児は、無意味な行動でも達成感（快感）を得るために反復行動をとりまわります。達成感そのものが目標になってしまふと、目標の意味や価値を考える必要を感じなくなり不毛な行動をとっても平気になります。幼児・児童期の教育の手抜きは一生を左右します。従って、反射的な単純作業の反復は必要最

低限とすることが肝要です。

▼暗算は極力しない
最速の暗算である視算は「この補数と九九」だけに限定します。「筆算を教えれば暗算は不要だから」です。「やりすぎ」はいけないうなどという消極的な理由ではなく「この補数と九九」以外の暗算は全く不要で無駄なことだからです。暗算を習熟させる必要は一切ありません。文章問題を解く途中に出てくる計算を正確に丁寧に筆算するように指導すれば十分です。しかも計算は視算表を見ながらでもいいのです。

私たちは簡単な計算を高速で出来るようにするために、計算方法を教えているのではありません。計算を速くする練習は「考え」ではなく、この命令を出していることです。幼児・児童期が過敏反応する時期であることを考えると、大人にさせて脳の活性化を促すなどという単純なこととは、全く違うことが分かると思います。考えるなどという指令を受けた頭は考えられない頭になるのです。

大人には薬になるものでも幼児には劇薬になるのです。ですから、計算を速くする練習は速くても小5の9月から、できれば小6の9月くらいがいいのです。こうすれば、考える回路を定着させた後なので、被害は最小限に食い止められます。「時間があるからさてもいいじゃない」は、「時間があるから考えさせない訓練をしてもいいじゃない」ということなのです。

それでも「でも、計算が速くないと困る」という人がいます。中学入試・高校入試を自分で解いてみて下さい。入試でさえも「計算は速い必要がない」と分かるはずですが、全く困らないのです。計算を速くするのは考える事が出来るようになった後の話です。反対は時間のロスが多すぎます。あるいは不可能です。計算は「サツと」するのではなく「リズム良くトントン」とでできれば十分なのです。

考える練習をしていなかったので、考える時間が足りなくて、あるいは、考えられなくて、入試で不合格になる子は山ほどいますが、計算する時間が足りなくて不合格になる子はいません。幼児・児童期に計算を速くするメリットは何一つ無いのです。

▼知的早期教育

知的早期教育は知的障害者には有効ですが、健常者には有害です。

障害者を持っていると記憶の再生や記憶の応用ができるようになるのに時間を要するところがよくあります。そこで、要点だけを厳選して先行学習をし、健常者よりも多くの時間をかけて反復しながら身に付けるようにします。形の上では先行学習ですが、実は先に進むことで時間をかけて基本の習得をするということなのです。したがって、障害者には厳選された知的早期教育が必要なのです。私は「緩やかな先行学習」と呼んでいます。

ところが、同じ事でも健常者には有害になります。不要なことを強制していることになるからです。元氣な人に歩くためのリハビリをさせると、時間を無駄に使わせて何の効果も得られないのと同じです。元氣な人には歩き方ではなく走り方や泳ぎ方や様々な遊び方を教えるべきなのです。つまり、応用のしかたを教えるべきなのです。学力に関連させると知識量ではなく思考力を育てるということなのです。

「読み・書き・計算」は歩くためのリハビリにあたりません。歩ける人には不要なのです。せめては困りますが必要最低限のいいのです。思考のための最低限の材料があればいいのです。

歩くためのリハビリを「徹底反復」しても走れるようにはなれないし、泳げるようにもなれません。「基本がしっかりしていないと応用は利かない」といわれて「読み・書き・計算」が基本だとばかりに「基本が大事だから・・・」と言う人がいます。

残念ながら「読み・書き・計算」は基本ではなく材料に過ぎません。材料がどんなに沢山あっても料理方法を知らなければ、いつまでたっても料理はできません。

「材料が増えれば料理は自然にできる」と言う人はいます。それなのに、「言葉が増えれば思考が自然に出来る」と言う人や「計算が出来れば思考が自然に出来る」と言う人や「漢字が出来れば思考が自然に出来る」と言う人がいます。

「分かる」「考える」のどちらも知らない人達です。

▼応用するとは
基本問題を数多く解けば、応用問題を解けるようになると思っている人は、とんでもない遠回りをしています。知らない町を隅から隅まで歩かせて道を丸

暗記させて、お使いを頼む人はいないでしょう。地図を見せとお使いを頼めばいいんです。地図を見て目的地を探す方法を教えてあげれば負担は一気に軽減します。そして、何にでも応用できます。これが考え方を教えるということなんです。

▼幼児教育

幼児教育は言葉の教育と言いますが、実はイメージ再現教育です。幼児教育のお手本は「言葉（音声）→イメージ再現」ですが、体感イメージ再現に勝るものはありません。そして、再現しやすいように入力してあげるのがコツなのです。子供が五感で感じていることに言葉を少しだけ添えてあげるのが最良の幼児教育なのです。言葉のタグを自然に与えるのです。

▼トリガー理論の応用

音楽は心を震わせます。なぜでしょう。どうして、音楽は心にダイレクトに届くのでしょうか。形（視覚イメージ：映像）にならない記憶（音のイメージ）を再現するキッカケになるからです。震えることで共振するものがあるからです。振動の記憶が共鳴するのです。本人でさえ気付かないうちに記憶された豊かな音のイメージを再体験させてくれるからです。音はイメージのトリガーなのです。

▼繊細であること

繊細であることと弱いことは違います。鈍感であることと力強いことは違います。敏感なときにしか繊細さは育ちません。穏やかに時間をかけてのんびり接することで微かな刺激を味わうことができます。これが2年後の人間の判断力を育てます。論理的な結論を最終判断とするような短絡的な判断は人間の判断ではありません。論理的な結論には感情は要らないからです。

▼「ふっさされる」恐ろしさ

計算は、高速単純計算を繰り返しているとある時を境に急激に速くなります。「ふっさされる」状態ですが、実に危険なことなんです。考えることを完璧に止めた瞬間に起こる現象だからです。自分機械になると決めた瞬間の現象です。人間として生きること（考えること）を止めて機械的思考に移り、単純作業を何の考えもなく機械のように高速で始めます。顔からは表情が消え感情は

平坦になり、仮面のような顔つきになります。こんなことを学力養成と言う人がいる。

▼勘違いをしてはいけない

「スラスラ音読」「ササッと計算」「ドサッと暗記」は小学校時代には何の価値もありません。知識やスピードは学力の素にはなりません。知識やスピードはストレス要因となるだけです。知識やスピードは栄養にはなりませんが、武器は使い方や使う意味を教えるから与えなければ危険なオモチャになるだけです。

▼「大人びた顔」には注意が必要です

大人びた顔の意味するものは、応える準備が出来ているということですが、このことは往々にして「つまらないお膳立てされた貧弱な応え方を教え込まれている自分の創造性を殺してしまった結果」であることが多いのです。「君の質問の答えは知ってるよ」ということです。処理すべきではないものも処理してしまう危うさがあります。結論を出さない方がいいのに結論を出して終わります。出来合の答え以上を求めない貧弱な精神の現れです。才能を潰されたなれの果てが「大人びた顔」です。これが大人びた顔の正体です。そこには感動はありません。つまり、人生はないということですか？

大袈裟に聞こえますか？
控えめに言っても同じ事です。感動することとが人生そのもののものですから。

▼料理と学習

「では、お料理を作ってもらいましょう」とたんにAは見るも鮮やかな大根の千本切りを披露しました。Bはゆっくり千切りを始めたばかりです。誰もその緩やかだが確かなBの手元を見ようとはしません。会場はAの妙技に拍手喝采。その拍手に應えてAはもう一度またまた素晴らしい千切りを披露しました。またまた拍手喝采。こんなことが続いているうちに会場がザワザワしてききました。「Aはいっになった料理をはじめのほう？」こんな声も聞こえてきました。Bは最後の仕上げにかかっていたからです。審査員はAに「料理を始めて下さい」と言いました。Aは「まだですか？では、もう一度だけ」と言って、またまた見事な千切りを披露しました。もう誰も何も言いませんでした。

Aは千切りを料理だと思っていたのです。Aは「料理教室」という名の「千切り教室」に通っていたのです。この教室ではあらゆる材料を千切りにする練習をしていました。千切りの徹底反復です。千切りを徹底反復すれば料理は自然に覚えます。というのですが、本当でしょうか？

審査員はAのコーチに聞きました。「どうしてAは料理が出来ないのですか？」「千切りの反復練習が足りなかったからです。もっともっと徹底反復させましょう」もちろん「千切り」は「高速単純計算」で「料理」は「考えること」です。

では、同じ文章で語句だけを変換してみよう。

Aは見るも鮮やかな高速単純計算を披露しました。Bはゆっくり計算を筆算で始めたばかりです。誰もその緩やかだが確かなBの手元を見ようとはしません。会場はAの妙技に拍手喝采。その拍手に應えてAはもう一度またまた素晴らしい高速単純計算を披露しました。またまた拍手喝采。こんなことが続いているうちに会場がザワザワしてききました。「Aはいっになったら考えることをはじめのほう？」こんな声も聞こえてきました。Bは最後の仕上げにかかっていたからです。

審査員はAに「考えることを始めて下さい」と言いました。Aは「まだですか？では、もう一度だけ」と言って、またまた見事な高速単純計算を披露しました。

もう誰も何も言いませんでした。Aは高速単純計算を考えることだと思っていたのです。Aは「考えること教室」という名の「高速単純計算教室」に通っていたのです。この教室ではあらゆる材料を高速単純計算する練習をしていました。高速単純計算の徹底反復です。高速単純計算を徹底反復すれば考えることは自然に覚えます。

というのですが、本当でしょうか？

審査員はAのコーチに聞きました。「どうしてAは考えることが出来ないのですか？」「高速単純計算の反復練習が足りなかったからです。もっともっと徹底反復させましょう」

「負のパーミッション（許可）効果
親子関係でのパーミッション効果知らない」と恐ろしい教育をすることになる子供も真似して襖を足で開けるようになる「です。いけないと分かっているもやっしてしまう。ところが、尤も信頼している人（親）」

がしたことは、自分がしても許されると体で記憶してしまいます。襖を開けるくらいなら笑い話で結構ですが。暴力を許可してしまうケースがたくさんあるのです。だから自分の子供を叩いてはいけません。他人の子供を叩いてはいけません。自分の子供を叩いてはいけません。という世間体が悪く聞こえますが、重要なことなのです。宗教色の強い国での残虐行為は、よく「神の許し」の下に行われます。つまり、信頼している者による許可は、個人の判断を停止させることが出来るパーミッション効果をもっているということです。

宗教色の弱い日本では、神の代わりに両親が存在します。親にされたことは誰にしてみてもいいんだという暗黙の許可として子供は理解してしまうのです。自分の子供に命令してはいけない理由も同じです。命令は全人格否定+強制+暴力と同じだからです。命令していい理由・必要性・成長に効果的な反応は何一つないのです。命令は口癖に過ぎません。もう一つは命令をする人の感情のはけ口になっている場合です。ストレス発散のための命令です。全ては命令される方ではなくする方の心で一つで今すぐに変えられる簡単ですが非常に大事なことです。この簡単な意識改革が子育てを劇的に変えます。

▼お喋りなお母さんの注意点

子供の前で話してはいけないことはたくさんあります。何でもオープンにしているのは「才」を過ぎてからです。それまでは薬も毒になることを心得ておきましょう。噂話は子供の前では厳禁です。反面教師は通じません。非常に危険なお気軽教育になってしまいます。見える教育がある様に、見えない教育もあるのです。

▼分らない

全ては生徒の「分らない」から始まった。「何が分らない？」「言葉が分らない」「どうして分らない？」「イメージできない」「なぜ考えられない？」「イメージを再現できても動かせない」

「分かるとはイメージ再現」
「考えるとはイメージ操作」

だから「言葉からイメージを再現させ、そのイメージを使う考える練習をさせることで、考える力はメキメキ育つ」
当たり前と言えは当たり前だが、気付くのに20年かかった。

▼子供を守る豊かな教育

異常教育が健全な子供を異常に育てます。視考力を無視した教育は、負担とストレスを与へ、未熟なままの脳を異常に肥大させます。偽物の学力を信じている高速計算信仰と多量知識信仰は、役に立たない考えられない頭を作り、異常な情報への抵抗力を消滅させます。

未成熟な頭が、異常に多くの情報を得ると無批判的に入力された情報に何の判断も加えることなく従うことになます。

今まで（小学校時代まで）は、情報が届かなかった人にも、雑多な情報が急激に入ってきてます。

多量の情報と反復は半斷力を病癡させます。今までの情に確かな判斷力（成熟した頭）が必要ない時代なのです。今まで、反応していかつた未熟脳も、これだけ多くの情報と反復には反応せざるを得なくなり、親の時代には較べざるを得なくなり、悪質で殘虐な情報が平然と飛び回っているのです。この情報を遮斷することは不可能です。増えることはあつても減ることはないのです。従つて、最も有効な防衛手段は成熟脳を育てることなのです。条件反射的な力をつけるだけで生きていける時代は終わったのです。

「理解力・思考力・判断力・表現力・読解力・創造力・行動力」に共通する最も重要な力が視察力です。人類が最も得意とするイメージ利用を活用する術を知らなければ、効果的な教育はできません。そして、上記の力をサポートするものは、体感イメージによって育てられた安定した確かな感情です。さらに、この確かな感情は安定した情緒がないと生まれません。乳幼児・児童期の最大の教育は情緒の安定なのです。知識の増加が教育ではないのです。刺激

▼思考

思考は大脳と小脳で行われます。また、大脳は約100億個の細胞で成り立っています。よく、この100億という数字を取り出して様々なことが言われますが、小脳は約10億個の細胞で成り立っています。実は、注目すべきはこの100億の方です。大脳の本来的役割は、思考の司令塔としての役割です。司令塔は大変優れていますが、全ての作業を自分で行うには限界があります。つまり、司令塔には多くの部下が必要なのです。それが小脳です。ただし、脳全体が未熟な場合は全ての処理を司令塔である大脳

が代行しますが、それは本来の仕事ではありません。ですから、優れているからといって、いつまでも大脳に全ての処理をさせることは、負担を増加させ本来の仕事の邪魔をするものになります。役割の変更時期は6才から9才の間で、自然な発達をしていれば9才前後です。つまり、この時期に大脳は全ての処理をする万能選手から本来の司令塔へと変身するのです。この変身で高度な思考が可能となるのです。この変身すべき時期を無視して、あるいは変身することを知らずに、大脳をいつまでも選手として使い続けるのと永久脳には変身できません。

早期の知的系統的教育が、長期的な成果を上げられない根本的な原因でもあります。乳歯と永久歯の關係で考えてみましょう。永久歯と同様のことが出来るからという理由で、抜け替わるように出来ている乳歯を鍛えて抜けないようにすることは、永久歯の発達を妨害するだけで能力開発とは全く反対のことです。まず、そんなことをする人はいないでしょう。御存知のように、乳歯は、永久歯が出来るまでの代用品だからです。乳歯は永久歯を健康な状態で迎えることが出来るように準備をすることが役目であり、その役目が終わったら永久歯の栄養となるために消えてしまうのです。ところが、この笑い話のようなことを本気で考えている人達が大勢います。もちろん歯ではありませんが、理屈は同じです。みなさんは、幼児（特に2才児前後）が驚異的な記憶力を発揮することを御存知だと思えます。これが乳歯の特徴であり、乳歯に当たる脳の時期です。乳歯と同じ働きを持っていますので永久脳が作られる時期には消えて無くなる運命です。これが、自然な脳の成長です。つまり、乳脳の時期の条件反射的記憶（具象理解）は、思考的記憶（抽象理解）が育つまでの代用なのです。つまり、永久に使える力ではなく消え去る力だということです。そして、育てるべき力は永久脳の力なのです。それなのに、一時的代用の力を才能だとばかりに勘違いして消え去るべき力を様々な方法で酷使して鍛えようとしています。これは、永久脳の健全な発達を妨げ、母胎（子供）の健康を損なうこととなります。乳歯に異常な刺激を与え続けて永久歯の発達を阻害していることになるからです。

人間が人間たる所以は抽象思考が出来るからです。この力がなければ人間らしい予測や判断はできません。意識的に未来を生きて

ることが人間の証なのです。
では、なぜ人間は、抽象思考が出来るのでしょ。それは、正常であれば、天才まで小脳でのイメージ操作（移動・変形・連想・判定）機能が発達するからです。それまでは大脳が具象物を抽象化する（イメージ化）練習をしているので、こちらの力（反射的記憶力）が優れていますが、小脳での思考（イメージ操作）が出来るようになると、反射的記憶力に使われていたエネルギーは思考に回されることになり、外見적으로는反射的記憶力が劣ってくるように見えます。しかし、これは自然なことであり、この過程（乳脳から永久脳への生まれ変わ）がなくては正常な発達ではできないのです。2才児が天才に見えるのは普通のことなのです。条件反射的記憶力が優れているのはイメージ化の練習をたくさんしているからに過ぎないのです。ですから、この力は年齢とともに消え去る運命にある力です。また、自然にプログラムされている時期に消えなければ、永久脳の発育に支障をきたします。この力を才能と勘違いして鍛えてはいけません。いつまでも（時期はずれな時まで）使ってはいけない力だということです。

そうでないと、人間本来の永久脳の健全な発達が妨げられてしまうからです。まさに乳歯が適当な時期に抜け落ちないと永久歯の発達に支障をきたすことと同じです。

↓2種類の忍耐力
「忍耐力には2種類あることを知らない」人
がいるようです。2種類の忍耐力とは以下
の2種類です。

A: もくもくと何も考えずに(あるいは条件反射的に反応して)単純作業を繰り返すことを可能にする忍耐力

：様々な考えを継続して展開するために
考し続ける忍耐力

もちろん、幼児・児童期に付けてはいけな
い忍耐力はAであり、付けなければならな
い忍耐力がBです。

ところが、「忍耐力 $\parallel$ 我慢すること」と単純に考えていると、子供にとっては致命傷を与えかねないAの力を、時間とお金を使って育てしまうのである。マス計算を代表とする高速単純計算(見せかけだけの不良文章問題も同じ)の連続学習はAの忍耐力しか育てられません。理由は、計算はどこまでいっても「この補数と九九」の反復作業にすぎないからです。反対に「良質の算数文章問題」は国語の読解力にも通じるBの

忍耐力を育てます。条件反射的作業はなるべくさせないことが大事です。計算練習は最低の量を最高の質で消化するようにします。ここを間違える命最低の質のものを最高の量で消化すると時期的に致命的なダメージを与えることになります。

「脳」の活性化は「学力アップ」ではない
「計算の速い方がいい」は一番危険な教育
「多量の知識が思考力を育てる」ことはありえない
「知的教育は早ければ早い方がいい」は単なるキャッチフレーズ
「感情は自然に育つ」ことはない
笑って中学入試を突破するには「低学年で無駄な知的系統的学習をしないこと」で
す。無駄な系統的学習をした子は応用が利かずにテストレベルの問題になると、急に解けなくなってしまうからです。逆説的に聞けますが、「学力を伸ばすには早くから受験勉強をしてはいけない」ということです。

本当は「手廻れ」などありません。格段に難しくなるのです。なぜなら、中学校に

なると小学校の時とは較べものにならないほど入ってくる情報が増加するからです。

もちろん好ましくない情報の方が格段に多くなります。また、舌動範囲も広がり交友

関係も多種多様になります。つまり、家庭では印刷できなくなるという事です。

従って、繊細なフオーは、実質的には不

可能になってしまいます。
教育は

感味力：吸引力
視考力：情報処理能力

応用力：1+2の応用
表見力：イメージ変換力

の順番で育てないと支障を来します。ま

た。1. 2. の時には東邊に少ない方がいいのです。方法（モデル：「お手本」）を学

ふ時期には、深く味わうことが大事だからです。雑音が多くては落ちていて音楽を味

わえないのと同じです。

失敗する長期教育

ない教育」とは、幼児・児童期の知的系統

的学習をしたときで、感情の不安定を招くストレスを増加させます。知識の積み重

ね（大量の知識）が思考になるという根本的な勘違いが根底にあります。また、感情

教育をしなかった場合も失敗します。安定した感情をもたせないと異常な判断をしたり、判断できなかつたりします。安定した感情の養成は幼児・児童期の安定した、十分に繰り返された納得できる「体感イメージ」を必要とするので、本当の学力を育てたいのであれば、幼児・児童期に感情が不安定になることはさせない方がいいのです。スピード教育も、代表例の一つです。これは、速さが頭の回転を良くする「頭が良くする」という根本的な勘違いが根底にあります。全体を通して言えることは、考える練習をしていないことです。「考える」とは「どうすること」かを具体的に説明して行う考える練習（イメージ操作練習）をしないこと。どんなに「読み・書き・計算」を強化しても思考力は育てられません。考えない学習を加速するものには、必ず以前のパターン学習があげられます。パターン学習の成果である限定されたイメージ再現しかしていないと肝心なイメージ操作である「考えること」が出来なくなるからです。

▼幼児・児童期の最も効果的な学力養成方法は、全ての教科を通じて「イメージ再現イメージ操作イメージ抽出」を取り入れた学習をすることです。

▼本当のテレビの害

テレビ番組が子供に良くない影響を与える本当の理由を御存知だろうか？人為的に編集してある部分が多くある番組は自然な流れではないので、幼児の自然な反応を破壊する恐れがあります。感情には感情が流れる時間があります。その時間には番組時間に合わせて意識的に調整するには体験が不足しているのです。十分に経験があれば（大人であれば）人為的な時間のカットを頭で補えますが子供には出来ません。ところが、その人為的な嘘の時間の流れを子供はそのまま「お手本」として取り込んでしまふのです。だから、危険なのです。これは短絡的思考にも繋がる一大事です。自然な時間や場面の流れを吸収すべき時期に不自然で作為的な人工の流れを体験させてはいけません。それは精巧であればあるだけ害をもたらしします。

▼刺激に関する基礎知識

子供は大人の何倍もの敏感さで刺激を受け

ています。大人自分でも、二倍の音量・速さでテレビを見せられては不快感だけが残るだけです。刺激は外部からの侵入者です。侵入者を敵か味方かを判別するのは快感・不快感です。ですから、同じ刺激でも快感とともに与えられた刺激は栄養となり、不快感とともに与えられた刺激は、有毒となるのです。「刺激を攻撃に変える三要素」は「速さ・強さ・冷たさ」です。テレビにはこれらの3つの要素が全て含まれていることが多いのです。「刺激を栄養に変える三要素」は「ゆっくりさ・穏やかさ・暖かさ」です。母親の愛情にはこれらの3つの要素が全て含まれていることが多いのです。

▼学習年表

0～3才：不快感を与えないように適度なスキンシップと暖かく快い声掛け
3～6才：体験的学習（具体的な物事）の中で豊かな言葉を味わう
※楽しい体験としての読み聞かせをする（質問しない）

6～9才：具体的に理論的な言葉を分らせるような対話をする
※展開を重視した読み聞かせをする
※「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」

9～12才：抽象的で理論的な言葉を分らせるような対話をする
※「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」◎

12～15才：ここで知的系統的学習を使って頭を鍛える
※あらゆる学習に耐えられる頭の体力を付ける
※「鉄は熱い内に打て」とはこの時期のこと
※この時期より前に打つと鉄といえども液体状態なので飛び散ってしまいます。

▼幼児・児童期に評価をしてはいけない理由
評価にない価値がないと思ってしまう。評価をする人の価値観でしか動けなくなす。評価して貰えないと「やる気」がなくなります。評価する人がいなくなったら

何も出来ないし、する気にもならなくなり評価が間違っていたり、価値あることを価値がないと評価されたり、価値のないことを価値があると評価されたり、全ての行為がその人にとって無意味になります。

▼異常行動

十分な感情教育がなされていない子供が、異常行動をとるのは当然のことです。十分な感情教育と厳選された知的教育が、幼児・児童期の重要課題なのです。遅くとも才までは、確かな感情に裏打ちされた人間らしい判断力の養成を終えていなければなりません。そして、その前に思考力の養成、その前には理解力の養成です。知識量や計算速度に目を奪われていてはいつまでたつても健全な子供を育てることは出来ません。

▼幼児脳を鍛えてはいけない理由

9才前後までの幼児脳を鍛えてはいけない理由があります。人間の成長段階で、細胞がある時期にスムーズに消滅していくことも細胞の発達過程では自然で必要なことです。例えば胎児においては手足の完成を見てみると、最初は一つの塊だった細胞が少しずつくびれが形成され、やがて五本の指になるのですが、この指には水掻きのようなものがついていて、この指は水掻きのように消滅していきます。ところが、この水掻きのような細胞は時間が経過するとともに消滅します。そして、この細胞の消滅が無ければ手足の完成はあり得ません。しかも、この細胞の消滅はタイミング良く（自然に）起こらなければ、正常な発達は見えないのです。将来的に消えるものだから早く消していこう、というのは実は危険な考え方なのです。成長過程に「早ければ早いほどいい」はあり得ないのです。これらのことは、幼児・児童期の不自然な知的系統的学習の無意味さ、自然に正常に育てなければいけない幼児脳を異常な刺激で育てることを英才教育と勘違いしているヘンテコリンな教室の危うさを物語っています。

▼本当の学力：「絶対学力」

本当の学力とは、人間らしい判断力を含む

思考力です。人間が思考して判断する場合、どんな場合でも選択枝は必ず2つ以上あります。たとえ理論的には結論が1つの場合でも、その結論を採用するかしないかという2つの選択枝があるからです。例えば「正しいといわれていることはどんな場合でも、絶対に守り通すことがいいことだ」とすると、このなかに本人の判断力はありません。つまり、未完成の危険な思考者をしているということです。だから、判断力・抽出力まで含めて思考力なのです。人間的であるかどうかは、この安定した感情をベースとした、この判断力が大きなウエイトをしめます。限られた情報から出した結論が、例え論理的に優れていても、その結論を採用するか否かは、人間の人間としての判断力が決定するのです。ここに感情教育と知能教育の相乗作用として生まれる人間らしい「子供を守る絶対学力」が誕生するのです。

▼天才の頭になつてみましょう

「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」を解いてみましょう。
・年長用（50文字）こは、くらげのうみです。まいにち、きょうは、きのうより5ひきおおいようです。きのうのくらげは、6ひきでした。あしたもまたきょうとおなじかすだけ、ふえるとすれば、あしたは、くらげは、なんひきになるでしょうか。
・小1用（100文字）ダンゴムシだんごむしさんたちが3列（つ）に並んでいました。1列めは7匹（ひき）、2列めは8匹（ひき）、3列めは6匹（ひき）です。では、それらの列で前（まえ）から3番目（ばんめ）になるダンゴムシさんたちだけの数を合計（あわ）せると、みんなで何匹（なんびき）になるでしょう。
※下記の手順で考えて下さい。
1 文章を読んで（絵図を描かないで）解きます。
2 文章を絵図に変換しながら式を立てて解きます。
3 絵図のみで解きます。
4 絵図を頭の中で描いて解きます。

* * *

- 1の方法では何時間かかる人もいるでしょうし、結局解けない人もいます
- 2の方法では式に頼ると解けない人がいます
- 3の方法では誰もが簡単に解けます
- 4の方法では確かなイメージを持ってないと解けません(イメージを持っていないと解けません)
- ※4が出来なかった場合は3の絵図を何回も見ておいて、一瞬でいいので頭の中だけでイメージを見るように練習してください
- ※イメージは一瞬で結構です。答えも見えてしまいます
- ※4の方法を「天才の思考」といいますが、子供達は自然にやっている普通の方法です。ただ、意識していないことと勉強に使っていないだけです。勉強にも使えることを指導者が知らないのが能力はあるのに、使い方を教えてもらえないでいるのです。
- この問題を計算で出そうとする(算数を公式を使った計算で出そうとする)と計算方法が何種類も出てくるので混乱してしまいます。答えは一つでも出し方は何種類もあるからです。しかも、「公式」があるかのようになっています。
- 「クラゲ算」「ダンゴムシ算」などと言われ一つの出し方を覚えているようでは、応用は全く利きません。どちらも絵図で考えるだけの事です。「算」などないのです。※子供達のノートは楽しいですよ。では、気を取り直してもう一問
- 小1用【MX35】今日は満開の桜の下で、お花見です。御馳走は超長金太郎飴と超長銀太郎飴の柔煮です。超長金太郎飴は超長銀太郎飴3倍の長さがあります。
- みんなで午前中に金太郎飴と銀太郎飴を丁度半分ずつ食べたところ、残りの長さをあわせると2cmでした。では、超長金太郎飴はもと何cmだったのでしょうか。
- ※頭の中を整理して「まとめ」を読んでみましょう。
- 1聞いているだけでは分からない。
- 文を追っているだけでは分からない。
- イメージを残していけないと分からない。
- 言葉としては消え去った部分を絵図で残しておくことが全体を把握できる唯一の方法なのです。
- 2文を見ながらだと何度も反復できるのでおぼろげに分かる。
- 頭の中でのイメージ化とその維持が苦手だと混乱してできない。
- 通常はこの時に有効な能力(頭の中でのイメージ化とその維持)を学力と勘違いしている。
- 3言葉や文を頭の中でイメージ化するのは

なく手を使って目の前に絵図として描くと頭の中での処理は瞬間的なイメージ化だけとなり最も効率的な頭の使い方となる。

誰にでも出来る。また、目の前のイメージの移動・変形・連想・比較により、簡単な複雑な問題をも解決できる。つまり、単当の学力とはイメージの再現と操作のことなのです。

※どうして、絵図を使うと分かりやすいのか？

↓見えているからです

※どうして、見えているとわかりやすいのか？

↑頭は言葉や文字ではなく絵図(イメージ)で考えている(情報の処理をしている)からです。

※この能力(視考力)は誰もが持っている人間最高の得意技であり、思考力の素。言葉を絵図にすることが学力の基本。絵図にしたものを使って操作することが考ええるということ。抽出することが判断すること。

※問題は同じでも絵図はオリジナルになるのです。

▼子供達の変化の実際

子供達の变化は、同じ様な反応をして変化します。私たちは子供達をいかに教育すべきなのです。私たちが子供達をいかに教育すべきなのか？

ここに、その一つの答えがあります。そして、検証は自分の頭と自分の子供で簡単にできます。

▼「どんぐり倶楽部」へのメールより

・どんぐり倶楽部様

以前登録をしました「小4一人息子の母」です。「泣く泣くやっています」とお知らせしたところ、「そのように育てた親の責任」とのお返事、心にスーンときました。それから文章題を、親子で絵を書きながらこつこつとこなしてきました。掲示板を拝見しますと、皆さんのお子さんには、ものすごい量の宿題がだされているようでびっくりです。幸運なことに、宿題をパンパン出さず先生にあたったことはありません。早期教育も、〇〇式も、これまでも無縁で育ててきました。小3時の担任の先生は(現在も持ち上がりで同じ先生が担任です)、教師生活8年のベテラン男性教師ですが、「宿題は自主学習、読書・日記・計算・漢字など、好きなものをやって結構です。塾の宿題も〇。目安は学年×20分、無理なら15分でいいので机に座らせる習慣をつけてください。」とはじめに言われました。それまでの低学年時は、漢字ドリル1ページ、あるいは音読1回、日記(複数でたこ

とはありません、ひょろろ分もあれば終わる程度の量)と、少ないながらも宿題がでていました。なので「どうして宿題がないのに勉強をしないといけないのか」と、息子は戸惑っていました。親としても何をやらせたらよいのか迷っておりまして。そういう訳で、しばらくは漢字ドリルや日記、読書をどなかひとと、できそうな時は算数のプリントをやらせていました。その算数プリントの文章題で苦労していました。計算などは問題ないのに、なぜ問題の「コ」に気づかないんだろうと。3年の秋頃から、ネットに接続できる環境になったので、勉強法など検索しているときに「どんぐり倶楽部」に出会いました。

感動しました。早速、2年生の文章題をやらせました。解ける問題もありましたが、「筋肉豆腐」でつまづきました。なぜ？でも子供は「わからない」というのです。ショックでした。「利用者の声」を参考に、進め方も工夫しながら、「ゆっくり、ジックリ、ていねいに」を合言葉に、辛抱強く待ちました。やってきた自主学習は担任の先生にみていただけるので、「どんぐり」をほじめて2ヶ月後くらいに、まとめてノートをみていただきました。「へえ、びっくりしたよ、よく考える問題ですね。こういう練習が大切ですね。」とコメントを書いていたいただきました。それから、ほぼ毎日、ノートをもっていたくようになりました。よい印象をもっていたくしたので、わからない問題は「わからん帳」で質問させるようにしました。子供はいやがっていました。が、「先生は絶対教えてくれるから」といって持つて行かせたら、きちんと教えていた。だき、その日は「わかったー!!」と大声で叫んで帰宅しました。とてもうれしかったようです。その後も「いつも楽しい問題を解いていますね」とコメントしていたり、4年の初めには「こんな文章題もあるんだよ」と、クラスの子供たちに息子の「どんぐり」ノートを紹介していたり、だいたいで、子供はすっかり「どんぐり」ファンになりました。息子は担任の先生のこと、最初から大好きなんです。ほめてくれるし、ゲームはいっぱいやってくれるし、細かいことにこだわらないで。この担任の先生に出会えたことも、彼にとって幸運でした。

「どんぐり」ファンになってからなのか、そういう時期なのかわかりませんが、子供に变化がみられます。今までは友達とはその日に約束した子とだけ遊ぶ、途中でさそつ

てくれた子には「こめんね・・・」と断る。家の中で遊びたがる(お天気の日でも)。約束がなければ外に出ない。そんな彼でした。ところが今では「だいまーいってきまーす」「え？誰と遊ぶの？」「〇くんとかうーん適当におしえなさい！(その日によつて)」といて遊びに行き、やれ穴掘りだ、どろだんこだ、サイクリングだ、虫つかまえた、だといっています。自分の子供時代の、「子供らしさ」がでてきました。真っ黒で帰ってきて、夕飯を食べて、ポケモンをきんちやります。その「どんぐり」ですが、最近はずっと終わる3年生の問題を10・15分で解きます。自分で好きな問題を選んでいるんですが。そして昨日、メインページにある「今週の添削教室」の年長問題を読んで、すぐに「二本だよね、かんたん！」と絵も描かずに解いてしまいました。以前の彼なら「なにこれ？」と言っていました。顔に拒否反応を出しながら。本当に驚きました。天才になったわけじゃない。子供はみんな「チカラ」をもっているんです。母の日は息子子ひとりです。やらせていなかっただけなんです。この感動を伝えたくて、メールいたしました。長いですが、申し訳ありません。「どんぐり」に出会えて、本当に感謝しています。ありがとうございます。

小4一人息子の母より

▼「どんぐり倶楽部」憲章

- 1 子供達の力を信じる
- 2 無理なく無駄なく効果的な学習指導をする
- 3 「考える力」を身につけさせる

▼「あゆみ」は先生の感想文

「あゆみ」が満点でも、何の学力判定にもなりません。「あゆみ」が零点でも同じです。「できる」の評価は「分かっている」ことを含んでいます。「どんぐりの背比べ」と呼ばれる時期に、どれだけ正しい教育をすることが出来るかで伸びは決まります。外的な知識的系統的学習は子供の才能と成長を著しく阻害します。小学校時代には小1・2・3は楽しむことで感味力を育てて吸収力を養い、小4・5・6では視考力を使って全教科を学力にするんです。

▼2種類の学習習慣

学習習慣とは机に座っていることではありません

ません。確かにイメージ再現練習をする
とです。役に立たない見せかけの学習習慣
ほど悪い習慣はありません。周りも本人も
本当の学習を何もしていないのに、してい
る気になつてしまふからです。誰もか判で
押しませんが、それは学習ではありません。
と言いますが、それは学習ではありません。
まずは「視覚イメージを意識することから」
始めるのです。

▼勘違い教育
「できるからドンドンさせる」「才能がある
からその才能を伸ばす」は、子供にとって
は何の価値もありません。出来ること分か
っているのだから、出来ることをドンドンす
る必要はないし、才能は自分で育てて開花
させるものだから、その才能を使うことが
本人が楽しければ、隠れてでも自分で育て
るのが才能です。楽しみがないのであれば
出来てもさせられるのは迷惑です。開花さ
せたくない(楽しくない)才能は、その子
にとっては苦痛でしかありません。

▼祭り
ストレスを発散させ、異常行動に進展する
ことを未然に防ぐための仕組みが祭りで
破壊欲求の解消にも役立ちます。祭りの少
ないところでは、個別に破壊衝動の消化が
できるようなお膳立てが必要です。子供任
せでは、爆発の方向が予期せぬ方に向いて
しまふ可能性が高いからです。それなのに
学園祭を学習発表会という反対にストレス
のかかる場に置き換えている人達がいま
す。これは、子供のストレスは急速に蓄積さ
れ爆発を誘発します。ストレス発散という
最も基本的な正常に戻る作用を定期的に実
施しなければならぬ学校で、このことに
気付いていないことは、本当に危険なこと
です。

▼人間は進歩するように出来ている
誉めたから叱ったからといって、人間は
歩き出すものではありません。誉めた叱つ
たに關係なく、人は歩けるようになった
います。進化のプログラムは、十分に備わ
ており、余計な開発は異常成長を促すだけ
なのです。大事なことは、その自然な進化
を喜んで迎えてあげることだけです。「楽
しい体験」として、進化を取り入れること
が出来ないようにすることが、才能開花を促
す唯一の方法です。
子供は楽しいことは自分から進んでやっ
ていきます。誉められて歩くようになると、

誉められないことはしなくなります。御褒美
依存症です。「何かが出来たら大褒美に
める」ことを、いい子育てのように思っ
ている人もいます。いい子育てのように思
うと「お母さんが喜ぶと思ったから」と
いう自分の価値基準の全くない言葉を口
にするようになります。児童犯罪でよく耳にする言
葉です。誉めることと認めることは、全
く異なる行為です。認めることが大事なの
であつて、誉めることは大事なのではあり
ません。そして、自分に伝えることが、最も
大事なことです。できれば、穏やかに
暖かくゆっくり、伝えてあげましよう。満
足は、ゆっくり味わうものです。

▼受験頭
受験頭とは、前もって入試問題の設問で、
聞かれること(設問形式)が分かっている
状態の頭のことで、設問を読む前に、問
題の本文を読みながら「すべきこと」を平
常心ですることが出来る状態の頭です。緊
張状態です。数ヶ月が限度です。高スト
レスを要求されるからです。ですが、短
間ならば良い刺激となります。受験頭、
最も簡単に作ることが出来るのは設問解
釈によるパターン学習です。普通の類似問題
を集めただけのパターン学習では、効果半
減ですが、設問形式別に細分化されている
場合は効果抜群です。

▼風揚げ
視覚イメージは、頭の中で、一瞬で再現と
操作(移動・変形・連想・比較)を自動的
に処理できる人間が最も得意とする分野で
す。ですから、思考にはこのイメージの移
動・変形・連想・比較を使っているのです。
それなのに、一番時間がかかり情報量が少
ない文字で理解させようとしている人がい
ます。「読めば分かる」とか「良く読みな
さい」「何回も読みなさい」と言うだけの
人は何も分かっていないのです。文字の動
きも機能を知らずに文字だけで考えさせよ
うとしている証拠です。これでは風揚げを
するに、風を見ないで、糸だけを見せる
風揚げをさせているようなものです。風が
あることに気付いた子供だけが、風を見て
操縦できるようなのです。最初から、
糸には風が付いていて、風揚げとは、風を
操作することなんだと教えてあげれば誰で
も100%できるんです。

▼漢字

漢字を書けないことは、言葉を知らないこ
とではないし、考えられないことでもあり
ません。ただ漢字を書けないというだけで
学力には一切の關係はありません。反対に
漢字をどんなに知つていようとも、学力と
は關係ありません。学力とはイメージ(特
に視覚イメージ)の再現力と操作力だから
です。

▼反応
考える力が育っていない子供の典型的な反
応(全国共通)は、次の様な言葉になつて
表れます。
「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」
を見ての発言からの分析
「何コレ」→重症度200
「こんな習ってない」→重症度300
「分からない」→重症度300
「分らない」→重症度300
「たすの？ひくの？」→重症度300
※さらに問題は「解ける」けれども楽しめな
い子がいます。多くは機械的なパターン学
習で「楽しむこと」を消し去られた子供達
でフロレムソルバーと呼ばれている成績
の良い悲惨な子供達です。
頭はいいのに、使えない頭になつてしま
っているのです。問題を機械的には解けま
す、発見も何も出来ない頭にされてしま
つた子供達です。

▼絵図を描く人には絶対になわなない
どんなに記憶力が良くても、頭の回転が速
くても、絵図を描く人には絶対になわな
い。なぜならば、頭の中だけでは全体を
見直すことが出来ないからです。「九九
の暗唱」と三角計算の關係も同じです。結
果だけを見て考えているのと、常に全体を
捉えながら考えているのでは、理解度に
雲泥の差が出るからです。また、結果だけ
を見ていると間違いや今自分のやってい
ること自体が何なのか分からなくなつて
しまいます。目の前の数字だけを追つても、
その数字が何を意味しているのかを気にし
なくてはならず、ただ計算をし続けている
ことでは、ただ計算をし続けているとい
うことです。これは算数でも数学でも単
純計算練習です。算数文章問題を解いて
意味はゼロです。作図はイメージ再現能力
を強化しますし、作図そのものを使うこと
も出来る点が優れています。しかも、具
体的な個性(オリジナル)養成にもなるので
す。

▼確認

今まで、子供をどのように育ててきたのか
をこの場で確認しましょう。
「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」
を5問で結構ですからノーヒントでさせて
下さい。
「考える力」が育っていれば、絵図を描きな
がら楽しく出来るはず。解けなければ、
あるいは解けても絵図を描いていなければ、
今までの教育では「考える力」を育てるこ
とは出来なかったと言つていいです。

▼うちの子には合わない
「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」
を解けないと「うちの子には合わないのか
な？」と平気で言う人がいます。何を否
なこと言っているのだから。」「どんぐ
り倶楽部」の「良質の算数文章問題」は学
年相応の「考える力を使う問題」なので
から、この言葉は「うちの子には、学年相
応の「考える力を使う問題」は合わないの
かな？」ということ。また「絵図を描
かなくても解けるよ」と言う言葉(危険信
号)を聞いて、「凄いな」と勘違いしてい
る人もいます。

▼危険な「読み・書き・計算」信仰
これから、1週間 かけて「読み・書き・
計算」が考える力を 育てられないことを
検証します。次の通りにして下さい。
▽月5金の5日間を次の通りに学習して、土
に問題を解きます。
※学習時間と問題を解くときにかかった時間
も記録しておきましょう。
※月5金の5日間は文章問題はしません。
1音読の徹底反復・次の文を「スラスラ読め
るまで何回も徹底して読む」1日2回以上

【材料】
赤い亀と白い亀がいます。
赤い亀は白い亀より何匹か多いです。
今、数えたら、赤い亀は8匹でした。
では、みんなで亀は何匹いるのでしょうか。
2 漢字の書きの徹底反復
：筆順・トメハネも正確に書けるようにする
：全部を1日2回以上
：完璧正確暗記目標

【材料】
赤い亀が1
亀がめ1
白ひろ1
一匹ひろ1
多おおい
今いま
数がそえる

です。なぜならスピードを要求することと知能は無関係なのに、スピードを要求されるテストで知能指数を測っているからです。知能指数を学力の指標にするのはナンセンスです。一定レベル(80~100)以上であれば何の差もありません。知能指数の数値を上げようとするのは、競技(技能向上)であって学力向上とは無関係です。×漢字ではなく平仮名で書いているのは意味内容を覚えていられない。書けることと意味を知っていることは全く違う。書けなくても意味を良く知っている方が百倍もいい。×漢字表記のものは漢字のまま覚えることが一番なのです。↓受験の直前に受験用漢字としてまとめて覚えると実に効率よく覚えられます。

▼保護者が問題を解くことで分かること
さて、ここで保護者が小1の問題を考えて下さい。「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」より

【300】タンゴムシだんごむしさんたちが7列つに並んでいます。1列めは7匹ひき、2列めは8匹ひき、3列めは6匹です。では、それぞれの列で前手前から3番目ははじめて後ろしうから6番目の間あいだにいるタンゴムシさんたちだけの数がすを合おわせると、みんなで何匹なんびきになるでしょう。

この1年生の問題でも、頭の中だけで考えるのはかなりやっかいです。ところが、お絵描き算数をやっていると、何の問題もなく、それこそ鼻歌でも歌いながら楽しんで解いてしまいます。色鉛筆などあったら大変です。何ともカラフルなタンゴムシが踊り出すこと間違いナシです。つまり、難しい・考える問題といわれている問題でも、絵図で解く練習をしていれば、何の問題もなく楽しく解けるということです。視察力も真面目です。「何回も読め分ける」というのは勘違いなんです。読んではいるうちにイメージ再現ができる場合もある、というだけですから「描けば分かる」が正しいアドバイスなのです。「見える川分かる」なのですから当然なのです。それなのに、視察力を使う指導はしないで「問題解決学習は時間がかかるばかりで、学力を育てられない」などと平気さで言っていて「読み・書き・計算」を徹底させる人がいます。これでは永久に学力は育てられません。徹底すべきは「読み・書き・計算」ではなく「目で考える力」の養成なのです。

▼ホーキングを知っていますか？

【Sw.Hawking】

ニールトン、アインシュタイン以来の天才的科学家として知られているホーキング博士は1990年6月に朝日ホールで「ブラックホールとベビーユニバース Back holes And baby Universes」という講演を「まじした。驚いたことに、その原稿は英単語を200語しか登録していないワープロで作成されたものでした。中学生用の英和辞典でも見出し語は1000語を超えますし、高校で生用では」1000語を超えるのが普通です。さらに、高校在学中に覚えるべき最低単語数は600語と言われていることを考えると、いかかに言葉ではなく考えそのものが大事であるかが分かります。ソクラテスは「確かな視覚イメージがあれば、何を使っても表現できる」と言っています。

いつの時代にも考える力は言葉そのものではなくイメージだということです。

▼視覚イメージ以外のイメージについて

少なくとも、五感のイメージを感じることができません。ですが、視覚イメージ以外は感知・保存・再現・類推までで、イメージ操作（イメージで考えること）には不向きです。不向きと言うよりも、人間は視覚イメージの操作力がずば抜けて優れているので視覚イメージを使って思考しているのです。

▼危険なレトリック学習：小学校では不要

小学校で表現力の養成をしてはいけません（中身（思考力）を空っぽにしておいて、飾り（表現力）だけつけても意味はありません）、小学校時代の表現力養成は、高度な猿真似になる場合が非常に高いからです

▼解けてもダメな理由

12才までの学習では、目の前の問題が「解ければいい」では、一生使える思考力は育てられません。「良質の算数文章問題」は、一生使える思考力の養成のためにあります。消化するための問題ではありませんので、どんなに簡単な問題でも、キチンと絵図を描き「視考力・目で考える力」を使ってイメージ操作をしながら解かなければいけないのです。「解ければいいんじゃない」は「自分で考える力は育たなくて与えられた問題を解ければいい」ということです。

「量より質」といいますが、正確には「結果

より過程”なのです。過程で具体的に考えること、具体的に迷うこと、意識的に考えること、これらの行為だけが思考モデルを作り出すことができるからです。

▼思考力を持っている
夢を見ることができるとは思考力を持っていると見ます。夢は思考そのものです。目的や判断はありませんが思考そのものです。イメージの動きが思考だからです。夢は目的や方向性を持ってなされる思考とは異なります。常識や肉体の制限から解放された頭の本来の自由な遊びなのです。思考の遊びは頭のストレス発散です。息抜きです。ですから、頭は夢見ることと必要とするのです。「人は夢を見ないと死んでしまう」というのは、比喩ではなく本当のことなのです。

▼分割学習の危険性
効果的な学習とは「文字↓絵図・イメージ再現↓イメージ操作↓立式↓計算↓答え」が1セットになっているものです。

▼危険な分割学習例
1文字だけ
よく読めば分かる
分かるハズがない
「速読」「暗唱」「スラスラ読み」
※スラスラ読みとイメージ再現は連動していない場合が多い。「スラスラ読めるまで」は関係なくて「イメージ再現できるまで」読むことが大事なのです。音読は発音チェックしかできないことを肝に銘じておくべきです。

2絵図だけ
これではただのお絵描き
文字を絵図にする過程が力を育てる

3イメージ再現だけ
頭の中だけでイメージ再現の練習をするのはエネルギーの無駄遣い
小学生には不要
「フラッシュカード」

4イメージ操作だけ
頭の中だけでイメージ操作の練習をするのはエネルギーの無駄遣い
小学生には不要
「ソロバン」

※計算方法の文化としては非常に優れていますが学習には役立ちません。視考力の一部を使っているだけです。

5立式だけ
立式は言葉からではなく絵図から起こしま

す。言葉から立式すると全体の中で何をしているのか分らなくなりま。常に全体を見ながら進めるのが応用の利く基本です。

：「決まった解き方が見える算数の文章問題」

6 計算だけ

：計算は「この補数と九九」以外の暗算厳禁。必ず筆算をします。できるのは当たり前です。だから、間違わないように正確にすることが大事なのです。

：「暗算」「高速単純計算」「マス計算」「筆算式が書いてある筆算」

7 答えだけ

：計算式の数字は答えではありません。答えは単位を添えて設問に合った答え方で個別に書き出します

：「数字だけを書き込む回答欄」

▼言葉

歌っている本人が全く歌詞の意味を知らなくとも、例えば日本語を知らない外人が日本語で歌を歌っていても（発音していても）その歌（発音）を聞いて感動します。私たちは音（音声・歌声）に反応して頭の中で自分の体験から得たイメージを再現し、そのイメージを再体験して感動しているからです。音に自動的に反応してイメージが再現されているということ。そして、そのイメージを味わっている（再体験している）のです。感情移入が出来るのもイメージ再現の力です。感動の素は全ての自分の頭の中にあるのです。ですから、原形イメージがなければ感動もないのです。「人の気持ち」が分らない。「感情欠損」全てはこの原形イメージの有無にかかっています。子供時代「ゆっくり・ジックリ・丁寧に」体験していれば、それだけ豊かな原形イメージを持っていきます。原形イメージはあらゆる応用に利用されます。ですから、多くのノーベル賞受賞者は同じことを言います。「小さい時の体験が大事だ」と。

▼スピード幻想

多くの先生が答えられない簡単な質問

質問1：どうしてこんなにたくさん計算問題をしなくてはならないのですか？

答え：習熟するためです。

質問：今、習熟しておかなければいけないんですか？

答え：もちろんです、今これが出来なければ次の計算が出来ませんからね。

質問：出来ることと習熟することとは違いますよね。

答え：でも、速い方がいいでしょ？

質問：どうしてですか？

答え：理解が早いからです。

質問：計算が速いと理解が早いんですか？

答え：・・・

※計算が速いことと理解が早いことは全く関係ありません。つまり、習熟させなければならぬ理由はないのです。

質問2：どうしてスラスラ読めないといけな

いんですか？

答え：スラスラ読めないと内容を理解できないからです。

質問：じゃあ、黙読では理解していないというのですか？

答え：黙読は頭の中でスラスラ読めるから理解できてるんです。

質問：スラスラ読めなくても分かるんです

けど、どうしてですか？

答え：でも、時間がかかるでしょ？

質問：時間がかかっているじゃないんですか？

答え：でも、速い方がいいでしょ？

質問：どうしてですか？

答え：理解が早いからです。

質問：音読が速いと理解が早いんですか？

答え：・・・

※音読が速いことと理解が早いことは全く関係ありません。つまり、スラスラ読みをさせなければならぬ理由はないのです。

▼オリジナル

私達は無数のオリジナルを持っています。取り込んだイメージは全てオリジナルだからです。イメージにはどれ一つとして他の人と同じものはないからです。似ていても違うのです。それは育てられた環境がみんな違うことと似ています。原形イメージは異なる原形イメージから作られるイメージは当然違うのです。オリジナリティは自分の中のイメージを明確にするだけではないのです。

▼学力は瞬く間に伸びます。

日本には、これだけ整った教育の場があるのですから、理論さえ一新されれば学力は瞬く間に伸びます。義務教育の失敗は、内容や構造や指導者養成にあるのではなく、学習理論にあるのです。その証拠に、普通の保護者が「どنگり方式」を取り入れて無理なく無駄なく効果的に子供の学力向上に寄与していません。理論を学べば先生なら一日ですべきことが分かるでしょう。

▼人間が人間であるための条件

生命維持（危険回避）のために発達した体験から得られた視覚イメージ（平面図）の処理回路は、空間認知や動態予測を可能にしました。この高度な発達には、視覚イメージ操作を思考という、人間が人間であるための条件の一つとしました。もう一つは安定した感情を元にした人間らしい判断力です。特に、思考結果として出てきた論理的な結論を受け入れるかどうか、言動に移すかどうか、実行するかどうか、信じるかどうか、の判定を加える力は、最も高度で人間らしい力です。また、判定を保留するということ判断は最も高度な決断であり、この力を持つていることが人間として成熟している証となります。なぜならば、思考により導き出された論理的な結論は、半自動的に体験から得られた視覚イメージ操作によって行っているもので、そこには創造性がないからです。「こうです」から「こうなる」には無限の可能性はありません。人間の脳は思考に最適なように（できることでもなしに）ように、制御されています。外部からの刺激でさえも思考の役に立つ形で使いやすいように処理されています。

例えば、思考に色や形の細部は必要ではありません。そこで、視覚イメージは入力情報保存時に色や細部を分けて処理します。思考に必要なものは、基本的には平面図（Line drawing 線画程度）です。また、色や細部が必要な場合には、その都度目からの外部刺激を利用して再現するようになっていきます。外界全てが外部記憶装置のようなものです。正確には、頭の中にある情報を再現するための「キッカケ刺激：トリガー」です。これは人間の脳が色も細部も再現する能力があるにもかかわらず、通常は再現しない理由にもかかわらず、思考の邪魔になる情報は抑制しているのです。忘れること（余分な視覚イメージを再現させない）も、夢を見ること（外界からの刺激に制限されて自由に視覚イメージを操ることが出来ない）ことによるストレスの解消も聴覚・臭覚・味覚・触覚を通常は考えないことが出来る（操作できる）視覚イメージに変換しないことも思考の邪魔をしないための抑制作用です。

その証拠に、音や匂いを視覚イメージで再現することが出来る人もいます。脳は全てを視覚イメージ化する力を持っているのです。ですが、通常はしないのです。思考の邪魔だからです。この働きを逆手に使うと特別な訓練をしなくても、音で考え

る（音を操作する）ことや、味で考える（味を操作する）ことも当然出来ます。感覚を視覚イメージにすればいいのです。から記号化すればいいのです。音なら音譜でよし、味なら味譜でよし。もちろんどんな感覚でも視覚イメージ化すれば普通に操作が出来ます。牛乳（milk）小麦茶（wheat tea）砂糖（sugar）ヒール牛乳です。また、形は触れば分かるような感じがしますが、触ることは材質の質感を感じることであって形の認識には向いていません。見ることによって形は理解されるのです。特に立体の認識には多くの平面図の情報が必要になります。頭の中には立体そのものはなく、平面情報の応用で処理しているからです。

▼なぜ人を殺してはいけないのか？

「なぜ人を殺してはいけないのか」という人がいます。いけない理由などありません。ただし、いけないと感じることが人間の証なのです。人間はヒトから成長して人間に育てられるのです。その条件の一つが「人を殺してはいけないと感じる」ことなのです。人間としての違和感があるのです。教育によってのみ与えられる感情です。

▼能動的に遊ぶ子が頭がいい理由

ノーベル賞受賞者は、口を揃えて幼いときの体験が大事と言います。これは「健全だから」ということだけではありません。思考に必要な原形イメージを作っているからです。能動的に遊ぶということとは、視覚イメージの操作をして何万通りのもの類推イメージの中から、行動に移すべきものを選択して実行することの繰り返しだからです。体験の中で、考える素である視覚イメージの操作回路を増やしているのです。

▼人間はゆっくり成長する

人間はゆっくり成長するようにできています。ゆっくり成長しなければ正常に育たないようになっています。頭は12年間、体は8年間です。この間にスピードを付けるということは、異常さを身に付けているということです。視覚イメージ操作である思考以外が速くないから、考えることができるようになっただけです。これは人間にまで進化した形跡を見れば明らかです。生命維持のために、高度な視覚イメージの操作（思考）ができるように操作の発達を妨害する高速作業をさせてはいけないのです。思考と作業は反比例するのは当然のことな

のです。特に頭の作業である高速単純計算は厳禁です。頭の成長（人間としての脳の成長）を直接妨害するからです。高速単純計算の練習は、思考力養成にとっては悪性腫瘍と同じです。もちろん、高速計算の練習をしなくても計算の速い人が、わざわざ遅くする必要はありません。それは、その人のテンポです。ので良くも悪くもないからです。自然で良いのです。

▼暗唱練習の勘違い

暗唱は視覚イメージを十分持っている大人には有効でも、持っていない子供には無効です。暗唱用に作られた音声教材や文字教材を言葉の入力用として使い、学力を育てられるような錯覚をしている人がいるようです。暗唱の真価は、自分のスピードでジックリと物語を味わうために、視覚イメージ再現のトリガーとなっている言葉（音声）を連続的に記憶できることです。それなのに視覚イメージを再現できない状態で、音（言葉）だけを暗唱させるという全く無駄なことをしています。言葉（音声・音）だけの暗記には何の意味もありません。言葉とは視覚イメージの音声化を記号にしたものです。視覚イメージがなければ全く価値はありません。先に言葉だけでもというのは弊害があるだけです。順番が逆です。なぜなら、人間は視覚イメージで考える動物だからです。

※言葉の習得の前には必ず視覚イメージの体得（体験）が必要です。視覚イメージを抜きにした語学修得は無理無駄の連続です。言葉をこの感覚で覚えても、その言葉と繋がる体験を一日ですることとは不可能です。反対に体験を一日ですことは不可能で、その体験と言葉を繋げることは一日でも可能です。順番を無視した教育は致命傷を与えます。味付けに最初に塩をいれてはいけないうのと同じです。

▼国語も算数も使う力は同じ

国語も算数も使う力は同じ視考力（視覚イメージの再現と操作）です。このことを知らずに違う力だと思っていると無駄な時間を浪費します。国語の内容の理解方法とは「視覚イメージの流れの理解」です。つまり複数の視覚イメージを細部に注意することなく流している状態を意識することです。すると、細部に注意しないことで流れを意識しやすくなるのです。「内容」と呼ばれているのは「流れ」のことです。ですから

国語の読解力とは視覚イメージを操作ではなく、再現とその移り変わり（流れ）に重点を置くことなのです。算数的内容の理解方法とは「視覚イメージの細部の理解」です。つまり「単数の視覚イメージを細部に注意して見ている状態」を意識することです。そして、イメージ操作を加えます。イメージの移動・変形・連想・比較です。このイメージ操作を算数の言葉にしたのが計算式です。ですから「文章↓計算式」ではなく「文章↓計算式」は何にでも応用が利きます。

視覚イメージを利用するという「フラットホーム」を知っていると、修飾の少ない数学にも修飾の多い文学にもどちらにも簡単に移行できます。

▼視覚イメージは思考のフラットホーム

視覚イメージは思考のフラットホームなのです。人間はフラットホームを持っているから、文字や記号を使うようになったのです。それなのに、フラットホームを使わずに理解しようとする思考が学習の邪魔をしていて人がいます。学習のフラットホームを使えば無駄なく効果的な学習が可能です。

・計算：……【筆算：絵図操作：頭の中では視覚イメージ操作】↓答え

・算数文章：……【絵図操作：頭の中では視覚イメージ操作】↓理解

・国語文章：……【絵図操作：頭の中では視覚イメージ操作】↓流れ

・国語作文：……【絵図操作：頭の中では視覚イメージ操作】↓視覚イメージ

・英語：……【語順訳↓絵図操作↓頭の中では視覚イメージ操作】翻訳

▼表現力にも視考力を使います

視覚イメージの言葉などでの説明が表現力です。ですから、要約する場合なら視覚イメージを簡略化して、その簡略化した視覚イメージの説明をすればいいのです。長文ならば視覚イメージを細部まで表現すればいいのです。感情なら人物の視覚イメージを良く見て説明すればいいのです。変化させるのは言葉ではなく視覚イメージなのです。言葉は視覚イメージの説明に過ぎません。説明する対象を変えれば説明の仕方は当然変わるのです。それなのにイメージをそのままにして表現だけいじっても、それは言葉の言い換えであるだけです。

私達は生命維持のための進化の過程で空間認知（立体と動きを平面図・視覚イメージを駆使して感知できるようにすること）を可能にしました。この空間認知のための進化が、思考を視覚イメージで持つようになった原因です。人間として持つようになった格段に優れた得意技である視考力。全ての解決はこの視考力を使った視覚イメージのフラットホーム利用にあります。「分かりやすい」とは視覚イメージ再現にどれだけ近いということだからです。

▼無駄な計算練習はしない

高速計算のための計算練習は無用です。小学校時代には脳の成長を妨げますし、中学校では分数計算が中心になりますし、高校では理論が中心になりますし、会社では電卓を使います。どこでも使えないのが高速計算（暗算）なのです。それなのに、どれだけ貴重な時間を費やして計算練習をしているのでしょうか。これでは「考える力」を育てている時間はありません。また、思考回路の基礎整備をする9才までは、そんな時間は微塵もありません。意識的に視考力を使って、視覚イメージを自在に操れるようにしなければ、人間としての思考力を獲得できないからです。

幼児・児童期の脳の発達、将来の永久脳作の原形となる思考モデルを一次的に多量に作って小脳にどんとこピーし、保存して思考の基礎整備をするための一時的な過剰発達です。ですから、0・9才の記憶力は思考モデル形成のための一時的な能力なので時期が来れば消えるのです。役目を終えるからです。それなのに、思考モデルを作らずに記憶力が良いからと、どんとこピーばかりさせて、思考モデルを作らないままに思考の臨界期を迎えさせている人がいます。もちろん考える力は育っていません。さらに、9・12才の時期に、思考モデルの使用がない場合は、不要な回路として思考回路は消されてしまいます。これが、思考の臨界期です。前述のように、ノーベル賞受賞者が口を揃えて子供の頃の遊び体験が重要というのは「健康的」だからではなくて「思考の基礎整備」をしているからです。体験情報ほど豊かな情報はなくその情報を元に思考モデルを作るからです。思考モデルは視覚イメージの操作です。そして、言葉は視覚イメージになったなら、言葉とリンクさせて視覚イメージの操作を練習するので、「言葉だけ」「イメージだけ」では役に立ちませ

ん。子供達の記憶力が良かったり、反応が速かったりするのには、9才までに莫大な量の基礎整備をしなければ思考が出来るようにならないからです。これらは人間になるための成長でもしからず自動的に行われます。外見には何も感じないようでも自然におこります。暗記やスピードはこの大事な成長を妨害します。だから危険なのです。生物は進化の過程で、持っている（能力はあっても）使っていないかっただけの時の状況（生活環境）に合わせて機能を組み換えながら進化するので、進化という全てが良いように聞こえますが、臨界期までに稼働させなかった機能は永久に使えなくなるということです。思考は機能です。臨界期前に始動させてください。

▼一時期だけ過剰発達する記憶力

本格的な抽象思考を可能にする準備として小脳に保存しておくための思考モデルを作るために、大脳は一時的に過剰な記憶力を使って、思考モデルを作らなければなりません。ですから、このモデルを作り終えるべき時期が過ぎると過剰な記憶力は自然に消滅します。本来なら小脳が思考モデルを写し取っているもので、不要になっているはずだからです。ところが、この思考モデルを作るための過剰発達した記憶力を、思考モデルとは正反対の暗記に利用する人がいます。しかも、それを能力開発と称しているのですから厄介です。そんなことをしていたら、思考モデルを作る時期を過ぎてしまします。思考の臨界期を過ぎてしまします。すると、一生人間になれないということになります。こんなことを、お金と時間をかけて自分の子供に強要している人がいます。不要な能力を育てているときには育てなければならぬ必要な能力は育てられない時間となつていきます。ここが注意しなければならぬポイントです。「出来るからさせる」「能力があるから伸ばす」は問題外です。多くの人にそんな時間は、どこにもありません。能力開発は、人間に育て上げた後のことです。

▼犯罪と思考の臨界期

考えようとしても考えられない。どうすることが出来るのか分からない。思考のパターンとなる思考モデルを作っていないので、本能的思考ができません。条件反射的な短絡的思考しかできません。この現象は「考える」ときに表層しか使えないからです。浅思考といえます。深思考の反対です。

深層の（小脳に保存して思考するとき）に効果的に使うようになっていく。思考モデルを作らずに育ってしまった結果です。小脳にあるべき思考モデルがないのですから、思考することができないのは当たり前のことです。思考モデルを持っていない人にも「よく考えること」は不可能なものです。もちろん、ゆっくり急がせずに思考の手助けをすれば、疑似思考はできます。ですが、使える容量が少なくないので困難であるばかりか、かなり意識的に集中しないと出来ません。思考の臨界期を過ぎていくので、思考モデルを使っても自然に余裕のある思考は出来ないので、余剰がないから、判断する時間とれなくて短絡的な行動に直結するのです。思考モデルがない（少ない）ので選択肢も少ないのは当然です。行動が限定される理由もここにありま。小脳の思考モデルを使っても思考は、半自動的なので超高速処理を軽々とやっつけていきます。しかし、この機能は0.12秒までに作られてしまっています。12才以降に思考モデルを作るのは非常に困難です。また、多くの無差別犯罪の原因は犯人自身の欲求不満です。従って、矯正には欲求の満足が最も効果的では許されなくとも、現実的にはこの方法以外には真の矯正はありません。

例えば幼少時の破壊行動が不足していたことが原因であれば、破壊行動を満足するまでさせることで満足回路が作られます。しかし、再発を防ぐにはさらに満足を超える度合いまで進む必要があります。過剰満足を与えると苦痛になり拒否反応が起こるからです。美味しい物でも食べ過ぎると見るのも嫌になるのに、それでも食べなければなりません。実際に「馳走を与え続けることは不可能に近いので、これをバーチャルでできることが望ましいのですが、現在の技術では出来ません。五感を騙して体験したことと出来れば真の矯正ができるということとです。理不尽ですが性犯罪も同じです。

▼回路
満足回路↓抑制回路が働く↓過剰満足↓苦痛↓拒否感↓矯正

※ホラマニアならホラー映画を毎日嫌でも見続けさせることが矯正に繋がることは押さえつけているだけで芽を摘んでいるわけではありませ。一度開いてしまった芽を自然に枯れさせるには、開かせてエネルギー

ギーを使い終わらせるしかありません。

▼頭も体も人生を楽しむためにある
頭はイメージを楽しむ。体は感覚を楽しむ。必要とする。思考力と呼びますが、実は楽しむ力なんです。感覚は感力です。深く味わうことです。大事なのは、時間をかけてマイペースでジックリと味わうことです。

▼感力

素晴らしい音楽を豊かに感じること（味わうこと）が出来なければ、どんなに演奏が上手でも音楽は人にとっては何の楽しみにもなりません。素晴らしい料理を豊かに味わうこと（感じる）が出来なければ、どんなに料理が上手でも、その人にとっては何の楽しみにもなりません。感じることは、味わうことが出来て楽しむことが出来ることです。音楽や料理を作ることが絶対条件ではないのです。基本は感力なので、素晴らしい音楽なら誰でも感動するし、美味しい料理なら誰でも美味いと思うだろう。と言う人がいます。違います。味わう力がなければ作り出す力も無くなるのです。自分で作った料理の味が分からないのは料理人には出来ません。教育は全て同じです。感力力が基本であり、それは育てなければ育たないのです。「表現力養成には注意しなければならぬ」というのは、小学校時代には「味わう時間を削ってまで料理をすることに力を入れている時間はない」ということです。幼児・児童期にオムレツの作り方を徹底反復してもダメだということとです。味わうことが最優先であるということとです。作ってみるとは、味わうことを深める点においてのみプラスになるのです。ですから、上手であるとか速くできる等というのは、評価対象にはなり得ないのです。プロの料理人になるのなら、速く必要でしょう。しかし、それは（技術）その時に修業すればいいのです。幼児・児童期にすべきことではないのです。

▼誰のために

誰のために思考力を手に入れるのか？自分が楽しむためにです。誰のために教育を受けるのか？自分が楽しむためにです。誰のために食育を受けているのか？自分が楽しむことができるようにです。自分が楽しいと感じたことは、自分の子供にも伝え

ように思うし伝えることができます。教育とはすべからずこういふものです。教育を受けた者が人生を（教育を受けた分野を）楽しむようにすることです。小学校の教育は全てが総合学習です。なぜなら、人生を教える場だからです。つまり、人生を楽しむ能力である思考力を始動させることです。そして、中学校では各教科の世界を楽しむようにするのです。

▼判断力を育てる

間違っではないけません。幼児・児童期に決断を急がせてはいけません。幼児・児童期に性急な判断を迫ることは、自分で判断しなくていいと言っていることと同じです。『どうしようかな』と悩んでいる時間が大事なことです。ここで急がせないことが確かな判断力を育てます。ここで急がせると、自分の行動を他人の責任にします。早急な判断は力にはならないのです。一見、決断力があつて賢く見えますが、見かけだけの操り人形になることが多いのは、回りが期待している判断に自分を従わせているから待て。本当の判断力とは、本当の自分の感情に素直に従って、揺るがない自信を持って自分の未来を選択することです。早々簡単に出来ることではありませんし、させることもありません。判断力養成も「ゆっくり・ジックリ・丁寧に」なのです。

▼幼児の反復性

何度もすることが好きなのではなくて、次の段階に移るには「納得すること」が必要だから反復することと納得しているのです。面白く思うことを納得するまでしているのです。ここに知的系統的学習をいれると強制になり発達を阻害するのです。出来ても出来なくても納得すれば終わりのことです。途中で納得すれば「終わり」でいいのです。何かが出来たら「終わり」でいいのです。意味もありません。だから「遊び」が重要なことです。遊びなら「うがでできるまで」か「うの次は」とは考えずに、子供の自主性に任せることが出来ます。これが思考の基礎を積極的に最も効果的に養うのです。

「（知的系統的学習を）何もしない時期」が必要である理由です。受け入れる準備（土台）が出来ていないのに、入力（建物）を建てようとするのは、母体（土台）を根本から破壊することになります。子供は幼いほど敏感であり影響を大きく受け

ます。どんなに子供の回復力があっても、機能的な発達の邪魔をされては、回復は難しいのです。機能障害を自分で治療することは出来ないからです。思考できないのは脳（永久脳：大人脳）の未発達による機能障害です。思考は機能です。ですから、目などと同じように思考にも臨界期があるのです。思考に適した脳の機能が働くようになる時期のことです。12年間思考すること禁じられていては思考は必要ないと判断されて思考する機能は消滅します。この機能消滅は全ての生物で同じです。能力があっても成長期に一定期間使わなければ、不要なものとして機能を停止し、その仕組みは再生不可能になります。思考の臨界期が12年間という長きにおいて猶予されているのは、思考は生きるための生活には不要であり、楽しむための生活に必要だからです。ただ動物として生きるだけであれば永久脳の思考は必要ありません。なぜなら、考えることが出来なくても判断は出来るからです。幼稚園ではあつても判断は出来るし、判断できれば行動は出来ます。ただし、短絡的であつたり残忍であつたりします。また、自動的ではなく意識することと同じ様な思考も無理ではありません。もともと大脳で行う思考モデルを写し取って利用しているのですから、高度ではなく速くもないです。思考は出来ます。しかし、本来の使い方ではないので浅い思考になつてしまっています。遺伝子のプログラム情報は、機能始動に必要と外界からの固有の刺激がなければ動きません。生物の機能始動には臨界期があるということとです。そして、最適な教育のタイミングは、臨界期を知っていると最も効果的だということが分かっています。例えば音楽教育では、聴音（ピアノの音を聴いて音階名を当てる訓練）に關しての実験をすると、3才児が一番良い結果になります。早すぎても遅すぎてもいけないのです。ですから、レディネスと臨界期を考えると教育の最適期が分かります。それぞれの教育の最適期は、レディネスと臨界期で自動的に決定されるのです。

※HP「Ready-Go-Map」参照

「何でも早め」という短絡的な考えにはレディネスという重要な考えが抜けています。鳥が羽があるからといって産毛しかありません。飛翔の練習をしないと、効果がないばかりではなく命取りになると同じで、機能を発揮できる準備が整った後で機能が消滅す

る前までに練習を始める必要があるし最も効果的なのです。よく観察すれば自然に個体が教えてくれるのですが、その知らせを無視しているから思考力を育てる時期を逃してしまうのです。

「口答え」や「言い訳」は論理的思考が出来るようになった「お知らせ」です。この重要な知らせを「生意気」などとトンチンカンな反応で返す大人がいます。

漢字などを「3才が一番早く習得できる」といって多量に暗記させるのは的外れもいってころです。この時期の記憶力の優秀さは漢字等を暗記するためにある能力ではありません。視覚イメージの再現練習です。だから漢字といえども絵図で覚えるから、画数の多さには関係なく簡単に覚えるのです。しかし、自然界の景色に比べれば漢字は全く取るに足らない貧弱な対象です。子供の能力を枯渇させているようなものです。自然の中での主体的・能動的な遊びが一番の学力養成になる時期なのです。

世界的なソニーの創立者、故・井深大氏はソニー創立後の晩年、日本の教育現場の荒廃と学力、特に理数科の劣化に憂慮し、教育の根本は幼児からと考え「幼児開発協会」を設立しました。そして、「幼稚園では遅すぎる」「3才では遅すぎる」「3才からの母親作戦」「井深アピール」などの著書を刊行し、世界に向けて早期教育の必要性和重要性を主張しました。しかしながら、その井深氏をもつてしても8年間の結論が「知的教育は言葉が分かるようになってからゆつくりでよい」(1989年(平成元年)5月8日)朝日新聞夕刊・ウィークエンド経済欄」なのです。

高等動物は高等であればある程、出生後の遺伝による決定行動は最小限であり、生活環境に高度に適応するため自己学習する事が分かっています。しかも、その機能や働きを触発させる誘発因を持つ時期は生後一定期間の中で限定されており、その期間を過ぎると、その機能は触発されても稼働することはないのです。臨界期がどの分野にも共通したものでなく、その分野によって内容の難易度や個体の成育度、成育過程の中で当然順次性が存在します。その個体の最終臨界期は、進化の最終形態である部分の成長が終わる時期のことを意味します。そして、その時期は性成熟年例と一致します。進化の遺伝情報を伝えるために最終進化形態である機能を始動させた後で子孫を残せるようになるからです。それが、人間では12才なのです。ですから

人間ならば12才までに思考機能を完成させる(機能準備万全にして)13才14才で知育をするのが最適なのです。意外かも知れませんが、高校入試に合わせた勉強するのは最も効果的なのです。知育の適齢期は中学生なのです。

「子育てとは文字通りの「人間育て」」多くの人が人間となつて生まれてくると勘違いしている。生物学を少しでも知っている人は、人は生まれただけでは人間ではないことを知っています。高等であればあるだけ、生まれ出た後の環境に合わせれば進化を完成させるのです。人間は機能的にも完成するのに時間がかかるのです。ですから、子育てとはいいますが、実は「子育て」とは「ヒトを人間に育て上げること」なのです。現在の人類の進化の最終形態(性成熟期までに機能発達する)が「考える」ことが出来ること・人間らしい判断力を含む思考する頭の獲得」であることは疑いの余地はありません。

「結論II判断II行動」となるような思考までなら、小3までで十分ですが、人間は人間らしい判断力(理論のさきにある基準)による判断を最終進化形態としていて、十分な思考の上に、人間らしい判断を加えることが出来るように育てることのみ「ヒトを人間に育て上げること」ができます。ただし、育脳時間制限があります。最終段階は性成熟期である12才です。従って、頭は12才までに思考力を使うように育ててあげないで、体だけ(外見だけ)が人間でつまり、12才までに「ヒトを人間に育て上げる」ことができれば、外見は人間でもヒトという動物のままで大きく育つてしまふのです。

▼大脳と小脳

演算モデル(思考モデル)は00才までに大脳から小脳へコピーされ、蓄積されて

1209才でウオーミングアップを終えて15才で応用しながら材料となる知識も増加させます。日本では高校受験を利用すると知育教育が上手に

15才は実践です。この実践の中にアイデンティティの確立がなされると立派な大人になります。

▼教育内容別年表

・情緒教育(00-03)
・感情教育(03-06)
・理解・思考教育(06-09)
・思考・判断教育(09-12)
・知識教育(知育12-15)
・実践教育(入試15)

※12才以前のスピード教育が低学力児を作り人為的学習障害(ALD)をもたらします。考える方法を学ぶべき時(特に9才10才)に「スピード教育」をしない特訓をしていては、考えられない頭に育つのは当たり前です。

思考とは機能的な働きなので、機能障害が発生してしまうと、どんなに意識してもその機能(考えるということ)は働かません。つまり、考えられなくなってしまうのです。足を動かす運動神経に障害が発生すると、どんなに足を動かそうとしても動かないのと同じです。足が悪いのではなく、背髄の中の運動神経に障害があるのです。しかし、これは自分が何をしようとしていたのかを脳を通して確認することで多少の修正はできます。無意識には不可能なことを小脳で処理していることでも、視覚を通して毎回矯正すれば多少は(大脳で)出来るのです。12才以前の無駄な学習だけは知っておきましょう。これらは、新しいモデル形成にはならずストレス形成になるだけなのです。

・楽しくない多量の読み聞かせ：特に覚えさせること：記憶させること
・高速計算練習：特に単純な暗算(「この補数と九九」だけは〇〇)
・味わえない暗唱
・多量の暗記

▼「読み聞かせ」が失敗するとき

良いことばかりのように見える「読み聞かせ」でさえも、楽しさを共有すること以外に目的を定めると失敗します。「読み聞かせ」は12才以降の自分で知識を吸収することに役に立つようになります。ですから「読み聞かせ」ようになっているものを覚えた「読み聞かせ」の効果はありません。12才以降に「読み聞かせ」のときの楽しさで読書することが出来て初めて力になります。この時の1年間の読書量は、それまでの12年間の読書量を遙かに超えることになます。反対に6年間毎日二冊ずつの「読み聞かせ」をしていても、12才以降に楽しさをともなう読書が出来なければ、無駄な努力になってしまします。準備段階ですべきことは本番と

は違うのです。準備段階で本番と同じ事をしているのは本番では力は絶対に使えません。準備運動は本番とは違うのです。目的が違えば方法が異なるのは当然です。「読み聞かせ」の代用と称して〇〇や力セットの「言葉の垂れ流し」をしている人がいます。100冊流しても母親の楽しみの読み聞かせ1冊にも及びません。それどころか有害な量がつきません。母親の1冊から受ける情報量が格段に多いからです。自然かなう人量物が今までに存在しただろうか？あり得ありません。表面的な情報量(例えば聞いた単語の数)と内部にまで浸透する本当の学習量は全く違うのです。豊かな学習とは数少なく時間をかけて深く味わうということ。たくさんというだけではありませ

▼幼児・児童期の記憶力

この時期に記憶力が良いのは、思考モデルを作るときに、一時的に多量の記憶を必要とするからであって思考モデルを作るための一時的な現象(消え去る機能)です。ですから、本来の目的(思考モデル作成)ではないことに、この力を使っているのは本来の目的は達成できません。そして、そのまま臨界期を過ぎてしまふのです。ここで、人為的学習障害が生まれます。12才以前に過程が大事な理由は、道徳的なことではなく学力養成に必要だからであり、過程そのものが考えられることそのものであり、オリジナルだからです。そして、オリジナルだから応用自在になるのです。12才までは、全てシュミレーション学習でいいのです。「できる」ことで完成を目指してはいけません。ですから、「今度では出来ないのに努力してみよう」でいいのです。勉強だけでなく生活全てがシュミレーション学習です。出来高評価である「出来る・出来ない」は全く関係ないのです。お菓子作りをします。でも出来なくても良い。12才以降に自分を作りたかったときに、楽しい思いすら微かな「お手本」が出来ないからといって叱ったりする必要は全くないのです。それだけの知的な能力には発達最盛期があります。最初に、縦縞の模様のない環境で育てられ縦縞の線の特徴を捉える大脳皮質視覚野の一群の細胞が成熟する短い期間、仔猫を普通でない環境、横のストライプの模様の飼育

箱で育てると、その細胞が活性化しないことになり。この期間、仔猫は縦のラインを見ることありません。後になつて縦の視覚刺激を与えても、他の正常な視機能にもかかわらず、仔猫は縦のラインを認識できないのです。外で歩かせるといういろいろな物にぶつかります。垂直の特徴をとらえる神経細胞が発達していないのです。高次の精神機能の例としてはことばの発達の例があります。

1959年にフランスのラ・コニエの森で狼と行動する12才ぐらいの男の子が発見されました。イタルという医師が、教育を与えられず、人との交わりのない原始的な生活をしていたので、教育をすれば普通の子とまでできるという確信のもとに訓練をしました。しかし改善しませんでした。もともと遅れがあったという説と、臨界期を過ぎていたから教育がうまく行かなかったという説がありますが、適切な時期に適切な刺激を受けるということが重要なのは明らかです。1970年アメリカ、ロサンジェルスで「ジョニー」という女の子が発見されました。この例は言語発達の臨界期に環境からの刺激が剥奪された場合の影響を考えるうえで重要な事例です。この子は最初普通に育っていましたが、8力月から10才まで精神病の父親に狭い部屋に閉じこめられました。一日中小児用の便器に縛り付けられ、ベビーフードだけ与えられて、父親に怒鳴りつけられてばかりいました。少女が音を立てると父親が体罰を加えました。ジョニーは、文法や統語の発達の臨界期にあつたので、言語の刺激を受けることができなかったのです。もちろん言葉は喋ることはできませんでしたが、発見された後、専門家たちからかなり指導を受けました。その時が1才です。いくつかの単語を獲得できましたが、整った文をつくり出すことはできませんでした。

▼言葉が分からない
「言葉が分からない」には次の2種類の分類がないが、あります。「言葉が分からない」

※視覚イメージの再現ができない状態です。
※対策↓共通イメージを教える(絵図で示す)
例「くるま」↓??? ※形にならない

「言葉が分からない」↓「イメージできるけど違う」
※共通イメージではない視覚イメージを再現している
※対策↓共通イメージを教える：イメージの訂正
例「くるま」↓船のイメージ

▼1才までは過程が大事な理由
間違っただけで間違っただけ思考モデルは多種多様になります。その時には当てはまらない(求めた答えを見いだせなかった)回路でも他のものには応用できます。こうやって様々な思考モデルを蓄積することで深思考の基盤が構築されます。パターン学習で求められるような、単純で余裕のない思考モデルは、最低の学習となります。才までに扱う問題は様々な思考モデルを誘導できるものほど優れている問題なのです。

▼理解欲を活用しましょう

子供は「どうして〜なんだろ〜」と不思議に思うようになっていきます。理解欲です。この理解欲そのものを大事にします。多量も自然淘汰されて消えてしまふからです。数少なく「ゆっくり・ジックリ・丁寧に」です。いつでも「どうして〜だろう」と不思議に思える環境を与えておくことが大事なんです。知ってないことが当たり前とかそんなことも知らないのかという雰囲気は最低です。知識武装は感覚破壊に繋がります。動かない意味のない人生に繋がります。不思議だから分析が加わります。自分(人間)の分析手法で処理しながら思考のベースである思考モデルを作っていくのです。多くの間違いは「考える力は多量の思考モデルの応用で成り立っている」のに「多量の知識で成り立っている」と勘違いしていることです。知識は少ななくても、思考モデルが多様であればいくらかでも思考力は育つのです。12才以下の学習では、問題を解くときに答えを重視してはいけません(重要ではない)理由も同様です。問題を解くときの多くの間違ひも勘違いは、答えを基準に考えると無駄なものになってしまひますが、学力養成から考えると数多くの、間違ひたり勘違いしたりした分だけの多くの思考モデルを作っているということになります。その問題の解決には役に立たない思考モデルであつても他の問題解決には有効なものです。また、思考力養成には最も効果的な栄養になります。さらに、間違えて考えた部分が解法の

パターンにはないオリジナルならば、新しい考え方となる部分であり自分のオリジナルそのものののです。パターン学習を取り入れながらも、オリジナル能力を育て思考力を育てるには、ゆっくりジックリ間違ひすることが大事なのです。間違ひを大切にすることが学力を育てるとも言えるのです。数多く正解にたどり着くことは、入試を前提とした最後の仕上げとしてはすべきことですが日常的にすべきことではないのです。正解を求める学習は、子供の豊かな才能を制限し固定的で短絡的な思考を強化することになるからです。

▼「サバン症候群」

「サバン症候群」と言う現象があります。ダウン症などの知能の低い人が、時に異常な記憶力や才能を見せたりするものです。そのような才能の一つがカレンダー計算能力です。何年何月何日は何曜日とか、カレンダーについての計算を異常に素早く行なう能力です。記憶や単純思考(単純作業の反復で処理できるもの)は、数少ない思考モデルしか使わないので知能とは関係ありません。複雑な思考モデルを開発するはずのエネルギーを単純思考に回しているだけです。このサバンのカレンダー計算能力を説明するために、ベンジ・ラングドンという大学院生がチャレンジしたことがありまう。「ラングドンは日夜練習を積み、ペー」にわたる数字を記憶しなければならな

▼味覚・触覚・臭覚
味覚・触覚・臭覚は、直接味わう器官なので繊細な感覚が再現されます。しかし、繊

細すぎて再現するだけで目一杯、だから思考には使えません。視覚はおおざっぱな操作重視です。遠隔知覚なので、自由度が高く加工が簡単、刺激に制約されないのが粗いのです。視覚が騙されやすい理由もここにあります。ですが、処理が超高速なので生活の上では中心的な感覚となつていくのです。生活の知恵(生き延びるための変化)は、生活の知恵(生き延びるための変化)なのです。視覚と触覚を比べても直ぐに分かります。見た目は、全く分らないガラスの凹凸なども特別な訓練さえなくとも指で触れば瞬時に分かってしまふ。思考に使う視覚イメージは、精密であつてはいけません。完全記憶者が考えられないのは当然のことであつて、完全記憶を目指すことは異常(思考できない頭)を指すことになるのです。

▼耳

音に自動的に反応する耳は、自分の意志では塞げません。危険察知のための器官だからです。場所などの確定には向きません。ところが、考えるときには邪魔になります。「静かにして!」といった考える人も多いですね。音は思考の邪魔になるのです。音読や暗唱は思考練習には不向きなのです。

▼習熟と慣れ

スポーツのような臨機応変に複雑な操作(思考モデル)を要求されるものについては習熟は多様な思考モデルの作成と同じです。から、健全な頭作りになります。計算の様な単純な思考モデル(「この補数と九九」しか使わない)しか使わないものの習熟は、習熟すればするだけ単純思考しかできなくなる不健全な頭を作ります。考える力とは全く反対の考えない力を強化するのは、単純な思考モデルを頑丈にしているだけだからです。一度固定された思考モデルは柔軟な思考モデルを食ひ潰してしまひます。回復は非常に困難を極めます。幼児・児童期の間違ひた教育が、才能溢れる子供の脳を最低の反射しかできない脳にしてしまふのです。暗記・計算は最も危険な考えない学習です。そこには思考力の基盤となる多様な思考モデルは全くない脳です。学力を養成しているつもりで、お金と時間を大量に使い、親子でストレスを溜めながら一生懸命に学力の素を潰している光景は悲惨としか言いようがありません。

▼研究成果

長期にわたって知能の発達に良い影響をおよぼす幼児・児童期の要因の研究があります。子育てや教育が短期間で終わることはありません。ですから、短期の成果はあまり重要ではなく、長期の成果は非常に重要なことです。才能開発教室が長期報告をしないのは理由があるのです。長期にわたって知能の発達に良い影響をおよぼす幼児・児童期の要因の研究では一貫した結果が得られていません。全世界共通で、6つあります。1 世話をする人が情感豊かな反応の仕方していること、言語的な働きかけをしていること。子どもが声を出したときやことばを発したとき、親愛の情をこめて、心のこもった言葉で応えていること。
※言葉と感覚の一致：ゆっくり丁寧に穏やかに応えることが大事

2 制限や罰を避けていること

※安心↓自由(静↓動)↓活動↓満足(動↓静)↓安心(静)怒ったり、怒鳴ったり、体罰を加えたり、必要以上に子どもに制約を加えることを慎んでいる。
※反応してあげることが重要：自己確認になる反応がないと(自他の区別がないので)自分の行為を確認できない

3 周りの環境が整えられている

子どもと世界が安全な場所になっている。大人たちといつも接している。テレビを見る時間が定められていて、最小限になっている。

4 適切な遊び道具があること

手で操作できるもの、目と手を使うおもちゃ、子どもが積極的に関わる事ができるおもちゃがある。

5 大人の子どもにかかわるまなざしが豊かであること

大人の子どもがどこにいて何をしているか知っており、子どもをよく目を向け、子どもたちの活動に興味を持っている。

6 日常生活でさまざまなもの、あるいは体験に出会うチャンスをもつ子どもがもっていること

と大人が子どもを外に連れだし、子どもが観察したり手で触ったりできるような何か目新しいことをさせている。愛情を持った大人が少なくとも週に三回は物語を読んで聞かせている。

※子どもが周りの世界に能動的、主体的に関われるように配慮されていることが重要なことです。また「それでいいよ」という承認あるいは支えが与えられていること

とが重要なのです。

▼人間の脳のしくみ

人間の脳は異なる三つの仕組みをもっています。脳幹、大脳辺縁系、大脳皮質です。実はここに小脳を入れると多くの謎が解き明かされます。小脳は自動化を受け持っている潜在意識の正体だからです。ある人はこれら三つの脳を、爬虫類の脳、古いほ乳類の脳、新しいほ乳類の脳と呼んでいます。生命の脳、情緒の脳、知性の脳とい人もいます。知性の脳は新皮質とよばれる新しい脳で、下位の2つの脳をあわせたものの5倍の容積を持っています。この高次の機能をもつ脳は、知能、創造的思考、計算能力を産み出し、また思いやり、共感、哀れみ、愛を育みます。脳はこの3層の仕組みになっていますが、これらに共通して実際の処理を自動的に補佐するのが小脳です。この自動化部署無くしては正常な動きや思考はできません。自動処理機能については有名な盲点実験(ネットで検索すれば出てきます)を体験するとお分かりいただけるでしょう。要約すると、見えていない場所「盲点」の視覚情報は実際には欠損している(目を通して脳には伝わっていない)のですが、脳の自動類推によって欠損は意識されないのです。これまでの体験から自然であるように補われるのです。このとき視覚情報と矛盾しないような類推をするのです。

視覚イメージの自動操作であるこの機能は生命維持のために発達したのですが、今では自動思考にも使われているのです。思考そのものが視覚イメージの操作であることを考えるのが当然の仕組みです。肉体的な反射(視覚イメージの後追い現象)と小脳の自動思考(視覚イメージでの移動・変形・連想・比較・類推)は視覚イメージでつながるのです。盲点とは目の網膜の一部にあつて目から脳へ向かう視神経が束になっている部分なので、光に反応する細胞(像)は見ることができません。自動類推がなければ生命維持も出来ません。肉体と思考は同じ場所でも補助されています。視覚イメージという同じ材料を使っているからできるのです。

▼頭の悪い子

私は今までに「頭の悪い子」など見たことがありません。ですが「考えない力」を強化させられて「考えられない頭」になった子は無数に見てきました。

▼全ての動物は「考える」ことができる

機能的に空間認識が出来る動物は、少なくとも「考える」ことができます。なぜなら空間認識は平面の視覚イメージを高度に操作することであり、この視覚イメージの高度な操作そのものが思考だからです。またコミュニケーションとは、視覚イメージを伝達することですから、共通の視覚イメージを動物が識別可能な共通の記号(音や匂いや絵図や動き)に置き換えれば、人間と動物のコミュニケーションも可能です。

▼納得感

「納得感」とは「大脳で作った思考モデルを小脳へコピーした時の感覚」です。ですから、達成感を感じた「できる」ではなく納得感を伴った学習である「分かる」学習が応用力になるのです。納得感がないという事はコピーできていないということなので、覚え続けているが考え直さなければならぬのです。大脳思考は最初の1回だけで後は小脳にコピーすべきなのです。納得しない学習はただの理解であり応用の基礎である思考モデルのコピーがないのです。

▼具体的な手法が大事

目標がどんな風に正しく高尚であつても、手法が悪影響を及ぼす(副作用がある)場合は、どんなに効果的でも実施すべきではありません。なぜなら、目標に届いたときには、既に手法の悪影響を受けていて回復不可能になっているからです。目標とは結果に過ぎません。影響は手法によって与えられます。手法が貧弱だと、その貧弱さが子供を貧弱に育ててしまいます。手法は毎回繰り返されます。答えが出て出なくても手法は繰り返されます。ですから、手法を大事にしなくては効果的な教育はできないのです。いい影響も悪い影響も手法にあるのです。計算が速くなれば、どんな計算練習でもいいわけではないのです。考えさせないように作られている教材を使っていると考えられない頭に育つのは当然です。

▼プラットフォーム

視学力が全ての学習の絶対基礎学力となります。全ての教科は視覚イメージというプラットフォームで繋がります。調べ学習は、自分の知っていることを思い出す練習にします。例えば、「おだやか」という言葉に

あてはまると思う思い出をしてきます。新しい言葉でも、視覚イメージは過去の記憶の中にあるのです。新しい言葉と繋がるもの(言葉に意味を持たせる視覚イメージ)は子供達の視覚イメージをリンクさせること「言葉と視覚イメージをリンクさせること」が大事なのです。言葉のタクトを視覚イメージという体験してきたことにつけてあげるのです。これだけで、豊かなオリジナルの言葉を獲得出来るのです。言葉

を音や文字だと覚えておいて、新しい音や文字を暗記させているだけで、貧弱な頭を育てていることにいつまでたっても気付きません。そして、音や文字を暗記したかどうかのチェックだけをして学力がついたと勘違いします。視覚イメージを伴わない言葉調べは無意味です。あるいは非常に効率の悪い学習方法です。あるいは非常に入力されている視覚イメージを使える(再現・操作できる)ようにするのです。このプラットフォームを使って全ての教科を消えいと統一された目標は見えてきません。科目という形だけの言葉に振り回されて考え方がバラバラになってしまい、効率的な消化はできません。できても異常な無駄をさせます。

言葉の学習とは、新しい言葉を覚えて意味を調べることはありませぬ。新しい言葉を自分保持している(記憶の中にある)思い出(保存されているオリジナルの視覚イメージ)とを結びつけることです。

▼脳の役割

大脳の役割：再現・リアルタイム処理・新しいモデル作成・最終判断
(選択)

小脳の役割：リサイズ記録
：思考モデル(視覚イメージ操作手順)のコピー
：自動処理

※意識で呼べば大脳は頭在意識、小脳は潜在意識、頭在化すること、小脳の情報が脳に繋がるということ、この接続処理を「思い出す」という。

▼記憶と思考

再現までは言葉でも出来ます。大事なのは、その再現したもの(視覚イメージ)を使つてどう操作する(思考する)かです。よく再現されなければ応用は利かないし、味わ

うことも出来ません。量より質は絶対なのです。質を量ではカバーできません。しかもタイミングを逃すと一生回復できません。記録・再現と考えること（イメージ操作）とは違います。操作するには視覚イメージへの変換が必要なのです。ただし、図形の変形や操作程度では害になるだけです。特に言葉から離れたイメージ操作には要注意です。例えば簡単なジグソーパズルをイメージ操作だけで完成させることも練習次第で簡単に出来るようになります。そしてこの能力は知能指数の向上などには効果を生揮します。しかし、思考力にはなりません。頭の体操にはなっても栄養にはならないのです。

出来ることやりたいこと
出来るからする、できるからさせる、ってのは最低。やりたいからする、やりたいからさせる、ってのは最高。やりたいことを大事にしてあげるのが子育て。できなくても大事にしてあげることは出来る。できることが何個あっても、やりたいことがなければ無意味。

▼文字の学習

文字は小学校からが「で」じゃなくて「が」いい。知識や語彙量の大量投与は応用力の破壊になります。必要ならば必要な時期の直前に与えます。Qなど言葉の数を増やしたり知識を増やしたりしていては応用の練習が出来ません。数少ないものを工夫して使うから応用力が出てくるのです。応用とは基本を十分に使って複雑なことを理解することです。新しい知識をあてはめたり、作られた公式を使ったりすることは全く正反対のことです。応用力を削ぎ落としながら応用力がつかないと嘆くのは、栄養ではなくストレスを与えているのに成長しないと思議がっているようなものです。マラソン選手に自転車を与えて速く走ったのに、どうして本番では弱いのだろくと言っているようなものです。言葉も遅くして結構です。イメージ思考を伸ばすには語彙量はすくなくいいからです。表現は重要ではありません。言葉という便利なものがないと複雑で手間のかかること（イメージ保持・操作）を自然にします。言葉が遅くても満足してはいれば意志の疎通があるということ、イメージ操作ができていいるということ、イメージ操作ができていれば、言葉はいつでも簡単に出来るように

なります。イメージと結びつけるだけだからです。ところが、反対に言葉をどんなにたくさん覚えても、繋がっているイメージが確かでなければ全く使えないし、イメージ操作力がないければ機械的な反復しかできません。知識が豊富な馬鹿をII考えられない人間となるだけです。教育の順番を間違えると、すべきことができなくなるので取り返し出来ない失敗をします。

▼楽しい遊びが学力の素

具体的な経験（体験：遊び）が深ければ、様々な種類の具体的处理モデル（後に抽象的思考モデルに変化する）が作られます。これが、抽象思考の「お手本」となります。楽しくなくてダメです。小脳へのコピーを容易にするのが「楽しさ」という情報だからです。「ゆっくり・ジックリ・丁寧に」とことです。こつこつと情報が入るという込み、応用できる情報になるのです。この染みこむ時間を短縮させようとして、時期を早めたり刺激を強くしたり回数を増やしても効果は高く、あるのは弊害ばかりです。頭は圧力鍋のようにはいかない味は違う。たとえば表面的にはできてはいない味は違うのです。自然の原理ですから、人為的には不可能なのです。手抜きと工夫は違います。手抜き教育は手抜きをする人間を育ててしまします。思考力の養成を手抜きされれば考えられない頭ができるのは当然です。そして、考える練習をしなれば、いつまでたっても考える力が育たないのも当然です。「知識の暗記や計算」と「考えること」とは操作する対象（情報量）が格段に異なるからです。全く違うことと言ってもいいでしょう。ですから、どんなに計算を速くできるようにしても、考えることが出来るようにはならないのです。思考モデルが単純すぎるからです。単純すぎることを反復強化していてもは複雑な思考モデルは育つ隙間さえなく、永久に育てられませんか。

▼IQと学力は無関係

IQは簡単に上げられるが学力とは関係ありません。IQテストでは、基本的な機能が動いているかどうか程度の判定は出来ませんが、学力が高いかどうか思考力があるかどうかの判定はできません。ですから、IQが高くなつたとき高くなるから、というのとは学力養成とは関係ありません。特に、次のような言葉から離れた形で学習では、I

Qは上がるのに学力は下がります。最も重要な「言葉」視覚イメージ再現」の練習がないからです。

▼「しつけ」

「しつけ」がおしつけになってしまふ場合しつけには3つの段階があります。1言葉が無く視覚イメージも貧弱↓不快・不快の覚悟でのしつけ2視覚イメージで反応する↓良いことを「お手本」として見せる3言葉が分かる↓説明する：良い「お手本」をイメージ再現できるような説明

※音で入力が有効：思い出しやすいように音声を使う：キーワードを覚えてもらう：Q法：何度も言う：耳にたこが
できるまで
※年齢によって（相手の成長に沿って）しつけの方法を変えないと効果はナシ
※順番は 触覚↓視覚↓聴覚
※叱る必要はありませんし、弊害をもたらします。
※楽しくない。不快である。恐怖心を残す。不安になる。これらは全て不要なストレスです。ストレスは蓄積し爆発します。「愛から快へ」を意識すると、子育ては楽になります。不快と連動している愛情ほど怖いものはありません。12才以下に愛の鞭などあり得ありません。子育てに快感を感じないように育てられた親に子育ては難しい。「快適子育て」は、親が育てられた環境に大きく左右されます。

▼スパルタ教育の時期

12才を過ぎれば知識もスピードもOK！ここからは、スパルタ教育でも良い。これから先の機能の始動はないので、スピードや徹底反復の悪影響は最小限になります。ですから、必要な状況に合わせて厳しい指導も可能です。

▼父親の役割

父親の役割は分担作業ではありません。「母子一体感」を味わえるように守ることです。母親が子供にゆつたりと関われるように守ることが重要なことです。母親が子供と穏やかに過ごせるような手助けが重要なのです。

▼皮膚接触の重要性

抱き癖を付けたいという考えは、自立と孤立をき違えています。自立には、安心と自信が必要なのです。この2つは、子供と母親との間で作られます。メチャクチャ甘

やかして良いのです。

▼最高の学習教材は

目の前にある自然です。学力を育む点において、自然に勝る教材はありません。自然ほど多種多様な情報を提供できるものは、ありませんし、自然ほど多種多様な適切な情報処理を要求するものもないからです。

▼本当の計算上手の育て方

計算上手に育てるポイントとは、覚えようとしないで楽しく使わせることです。自然に覚えてしまふ工夫をします。計算の歴史は工夫の歴史です。速さは関係ありません。工夫することが、本当の計算上手の神髄です。

▼「く」教育とは「くを楽しむ」ということ

音楽教育とは「ゆつくり・ジックリ・丁寧に」音楽を無条件に味わうこと、楽しむこと。次に音楽を視覚イメージにすること。再現まで。ここまで出来るようにすれば（意識させれば）必要に応じて応用できます。視覚イメージ操作は全てに共通だからです。言語教育とは「ゆつくり・ジックリ・丁寧に」言語を無条件に味わうこと、楽しむこと。次に言語を視覚イメージにすること。再現まで。ここまで出来るようにすれば（意識させれば）必要に応じて応用できます。味覚教育とは「ゆつくり・ジックリ・丁寧に」味覚を無条件に味わうこと、楽しむこと。次に味覚を視覚イメージにすること。再現まで。ここまで出来るようにすれば（意識させれば）必要に応じて応用できます。視覚イメージ操作は全てに共通だからです。体育教育とは「ゆつくり・ジックリ・丁寧に」体育を無条件に味わうこと、楽しむこと。次に体育を視覚イメージにすること。再現まで。ここまで出来るようにすれば（意識させれば）必要に応じて応用できます。空間教育とは「ゆつくり・ジックリ・丁寧に」空間を無条件に味わうこと、楽しむこと。次に空間を視覚イメージにすること。再現まで。ここまで出来るようにすれば（意識させれば）必要に応じて応用できます。視覚イメージ操作は全てに共通だからです。数学教育とは「ゆつくり・ジックリ・丁寧に」数学を無条件に味わうこと、楽しむこと。次に数学を視覚イメージにすること。再現まで。ここまで出来るようにすれば（意識させれば）必要に応じて応用できます。

作を発展させる
：文字（言葉）からイメージ再現＋操作

※「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」

・09-12：具体物が無くてもイメージ操作ができるように抽象思考を育てる

※「どんぐり倶楽部」の「良質の算数文章問題」

・12-15：スバルタ教育OK！ここで知識とスピードの養成をする

※06-12才までをキチンと育てていれば耐えることが出来ますが、そうでなければストレスだけが蓄積され「キレル」要因となります。

▼本当の「分らない」

「分らない」ってのは不思議で楽しくて興味の対象になるということです。これが、誰もが持っている学習意欲です。それなのに「分らない」↓「どうしてこんな事も分らないの？」と責める人がいます。学習意欲が無くなるのも当然です。「分らない」⇨「楽しい」なのに「どうしてこんな事が楽しいの？」と責めているのと同じです。もったいない話です。

普通に受け入れれば「分らない」↓「え？どうして？知りたい！教えて！」となります。こうならない（なれない）のは異常な抑圧（ストレス）が蔓延しているからです。マジックがよい見本です。「え？どうして？知りたい！教えて！」でしょ？ところが「怒られるから」とか「馬鹿にされるから」とかいう理由で「分らない」と言えない子がいます。楽しみを奪われているのです。「分らない」とは本当は「楽しい」という表現なのです。

▼子育てと教育のキーワードは

「一人になったときに」です。「困らないように」ではなく「お手本」を思い出せるようにです。つまり、一人になったときに「お手本」を思い出せるようにしておくことが大事なのです。「させる」では一人になったときに「させられていた」ことから逃げ出します。整理整頓が出来ないのなら、何度でも「お手本」を見せてあげればいいんです。「お手本」を見た数だけ確実に「お手本」は体（頭）の中に染み込んでいます。何も心配することはいりませんし、今出きるか出来ないかなどは全く関係ありません。種を蒔く時期に花を見ようとするのは無理がありますし無駄があります。育

てる方も育てられる方も不健康になり疲れるだけです。花を育てるには花が咲くことを信じて花の状態をよく観察し、状態にあった栄養補給を心がけ十分に自然の中で育てることです。花は咲くように出来ていいます。余計なことをして根を腐らせないようにすることです。花は咲くように出来てい

▼スピードに慣れてはいけない

日常的でないこと（特にスピード）に慣れる（鈍感になっていく）ということは異常なことです。高速道路のスピードになれたら危険行為が普通になってしまいます。なぜなら、そのスピードには判断するのに必要な時間がないので脳は判断しないようになるからです。異常成長のことを「才能が開花する」といわれてその気になってはいけません。高速道路で慣らされた感覚は市街地走行に必要な感覚を麻痺させています。

▼過程が全て

失敗しても、間違っても、答えが出なくてもモデルを作ることに全力を傾けるのです。多種多様な思考モデルが出来ます。ですから、2才（少なくとも9才）までの学習は過程が全てなのです。この時に楽しさが加わっていると「考えること（視覚イメージ操作）」が楽しいと感じられるようになるのです。ですから、答えを急いだり無駄に考える楽しさを奪うようなこと（パターン学習・線分図の使用・模範解答や解説の使用など）は厳禁なのです。この時期に解く問題は、解くための問題ではなく考えるための問題でなければならぬのです。ですから、間違っても楽しく工夫が出来ていればドンドン栄養になるのです。そして、9才まで、それまでに蓄積した回路を使って考える練習をします。回路は出来ていきますので、分かっている手間のかかることは自然に省略するようになります。人間の正常な成長には「楽しさ」が絶対条件なのです。

「心へと続く道」

暗闇の中で
子供をテトラメに
走らせるのは止めよう

足をシッカリと照らし、
誰もが歩いていける道が「ココ」にある

舗装はしていないから、
歩きにくいかも知れない
でも、作り物じゃないから
絶対に壊れたりはいしない

この道を信じて、
子供を歩かせてみないか

この道は、人間の心へと続く道なんだから

暗闇の中で
子供をテトラメに
走らせるのは止めてくれ
どんなに力がある子供でも
それじゃあ、力尽きてしまうから

〒811-1356

福岡県福岡市南区花畑2-21-33-105

「どんぐり倶楽部」

<http://homepage.mac.com/donguriclub/frontpage.html>

e-mail: donguriclub@mac.com